
緋弾のアリー—お人よしな梟雄—

だしまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のARIAーお人よしな梟雄ー

【Nコード】

N2915Y

【作者名】

だしまき

【あらすじ】

平凡なDランク武偵、松永秋空は三年前のある事件がきっかけで三次元の女に絶望していた。今日も秋空は路上でカップルを見かけると爆発しろと念じ、週に一回ゲーム屋で中古のギャルゲーを漁る、そんな平凡だが幸せな日々を謳歌していた。しかし秋空の日常は、道端で出会った一人の少女のせいで一変する。「あんた、私の奴隷になりなさい」
愉快なオリキャラ達による、慌ただしいサイドストーリー・・・的なを書けたらいいな・・・

プロローグ 〈春休み終了のお知らせ〉（前書き）

この小説を読むときの注意点です。

- ・この小説は「緋弾のアリア」の二次創作です。
- ・作者は小説を書いて公開するのが初めての素人です。文章表現、構成力はとても稚拙なものです。要するに駄文、駄作です。
- ・「緋弾のアリア」の二次創作なのに、序盤アリアキャラがあんまり出てきません（え
- ・まったく更新します。
- ・オリ設定があります。

以上の五点で一つでもダメな点がある人は、戻ることを強くおすすめします。

プロローグ 春休み終了のお知らせ

目覚めは最悪だった。

頭が痛い。ガンガン痛むわけではないが、こう、何か圧迫されているような感じ。

ぼーっとした頭で、今自分が椅子に座って、何かゴツゴツしたものに顔を押し付けているのを理解する。

怠い体を起こすと、無機質な黒いパソコンの画面が目映った。さっきまで顔に当たっていたのはキーボードのようだ。

ほとんど無意識の中で右手に握ったものを動かす。これは……無線マウスか。

しばらくして、画面に笑顔でこちらを見つめている蒼い髪の女の子が映った。

「由良……？……そうか、俺、寝てたのか……」

かすれた声で俺は言葉を絞り出した。

そう。俺は昨日買ってきたゲームのCGをコンプリートしようとしていたんだ。ついでに某動画共有サイトで面白そうな動画を探したり、行きつけの某掲示板を覗いてみたり、前期観ていなくて気になっていたアニメを見始めたりはしていたが……とにかく、俺は春休み最後の時間を楽しんでいたわけだ。それがまあ、いつの間にか寝オチしていたらしい。

画面右下のデジタル時計を見ると、七時六分と表示されている。

四時くらいまでは起きてた記憶があるから、睡眠時間三時間ってところか。何だ結構寝てるじゃないか。

「秋空^{あきら}? 起きてる?」

不意に、ドアの向こうから控えめに俺を呼ぶ声がした。

「ああ、起きてる」

「あ、よかった。朝ごはん出来てるから、食べに来てね」
パタパタとスリッパの足音が遠ざかっていく。

「秋空っ！おっはよー」

「……抱きつくな。姉さん」

顔を洗ってからリビングに行くと、姉の葉月に後ろから抱きしめられていた。一体、どこに隠れていたのやら。

「えーいいじゃない。……ん？秋空また夜遅くまで起きてたでしょ」

「何でわかるんだよ。てか離れろ。制服、皺になるぞ」

「声が疲れてるよー。もう、今日始業式なのに」

「始業式なんて適当に寝とけばいいだろ。それより、飯食うから離れろ」

いい匂いのする長い髪が俺の耳元をくすぐり、背中には柔らかい双丘が押し付けられる。男子高校生としては素晴らしいシュチュエーションかもしれないが、相手は実の姉。現実には時に非情だ。

「んー。キスしてくれたら離れてあげる」

「バカな事言ってるでさっさと離れろ」

俺は姉さんを無理矢理引きはがすと、椅子に座る。

「パン二枚でいいーい？」

キッチンの方から姉さんが尋ねてきた。

「いや、一枚でいい」

「ん、わかった」

机に置かれた新聞を手取る。ニュースなんてどうでもいいが、四コマ漫画と将棋の欄は毎日確認している。

「はい。お待ちどー」

「ああ、ありがと」

皿に乗ったパンと、苺ジャムと、コーヒーがテーブルに置かれる。俺は新聞を置き、ジャムを塗り始めた。

「ねー、秋空」

「ん？」

パンを一口含む。うむ。美味しい。ジャムの甘さが寝ぼけた脳に染み込むようだ。

「今日私、多分帰り遅くなるからご飯先に食べててね」

「ん、わかった。また、依頼か？」

「うん。ごめんね。なるべく早く帰ってくるから」

「ん、了解」

どうやら、また姉さんは何か面倒な依頼を受けたらしい。

依頼、というのは、武偵高校が民間から受け付けている依頼だ。

難易度に応じて報酬と単位がもらえる。

とはいえ、別に姉さんが単位ギリギリなわけではない。留年してはいるが、決して頭が悪いなんてことはない。むしろ姉さんは百年に一度と呼ばれるほどの天才だ。

まあ、むしろその天才っぷりが原因で、学校側からの姉さんへの依頼がたびたび来るのだ。単なる迷宮入りした事件ならまだ簡単な方で、時には同じ武偵高校のSランク生がさじを投げた事件の依頼なんかを受けているらしい。要は学校の信頼を落とさないための尻拭い、というわけだ。

別に強制ではないのだが、おっとりしていて押しに弱く、お人よしな姉さんは受ける必要のない依頼を月に二、三回ほど受けてくるにしても――高校生が探偵業の依頼か。しかもモノによっては命に関わる。

つくづく、普通じゃないよな。あの学校は。

「ごちそうさま」

パンの最後の一口を食べ、残っていたコーヒーが喉に流し込んで、俺は手を合わせた。

時計を見ると――七時十六分。

「姉さん。俺に構わず、さっさと行ってくれていいんだぞ？」

「え？ いいよ。待ってる」

テーブル前のソファに座って、携帯をいじりながら姉さんは答えた。

「どうせまた学校で会うんだし……それに、今日の依頼の資料とか早めに目を通しておきたいんじゃないのか？」

「う、うん。まあ……わかった。じゃあ、先行ってるね。秋空も気を付けてね」

姉さんは携帯をたたむと、脇に置いてあった鞆を持ってそのまま出て行こうとする。

「……って、ちゃんと銃持ったか？」

「あ、忘れてた……」

慌てて戻ってくる姉さん。

「気を付けろよ。最近は『武偵殺し』なんてやつもいるんだしな」

「『武偵殺し』？」

「年始に周知メールが出たたる……まあ、もう捕まったけど」

「……ああ。でもあれ、本当に捕まったのかな……」

「――？　どういうことだ？」

「いや、何でもないよ」

「とにかく、姉さんはSランク武偵で、狙われやすいんだ。流石に朝っぱらの、武偵高の生徒がうじゃうじゃいる通学路で攻撃されるなんてことはまずないだろうが……気を付けておくに越したことはない」

「はいはい。わかってるわよー。じゃあ、今度こそ行ってくるねー」

「ああ。また後でな」

そんなやり取りの後、今度こそ姉さんは出て行った。

俺も支度を整えて……いや、その前にちよっと、例のゲームのイベントを進めておこう。

自室に戻り、着替えながらだらだらとキャラ達の会話を読み進めていく。朝から可愛い女の子達（二次元）に癒される幸せに思わず頬が緩む。子供には見せられないようなシーンまで行ったところで、俺はセーブしてウインドウを閉じた。

ふと時計を見ると、時刻はいつの間にか七時二十七分を示していた。今から家を出れば七時三十四分のバスになる。

この家はバス停から近いし、まだ余裕で間に合うのだが、これくらいの時間になるとバスが混む。混んだバスや電車は嫌いだ。

仕方ない。今から行って、バスが混んでたら歩こう。そして始業式はサボろう。

結局。この日、七時三十四分のバスはめちゃくちゃ混んでいた。乗れないことはないが、俺は押し合う乗客を横目で見ながらスルー。眠気覚ましも兼ねて、のんびり歩いて行くことに決めた。

――生涯。

生涯、俺はこの七時三十四分のバスに乗らなかったことを悔やむだろう。

なぜならこのあと、俺は出会うべくして出会ってしまうのだから。横井琴音に。

地面に女の子が

寝オチ特有の気だるい体を引きずって、俺はようやく武偵高のある人口浮島、通称学園島に辿り着いていた。

途中、コンビニで漫画を立ち読みしてきたからだろう。すでに始業式開始ギリギリの時間になっている。まあ、元々サボるつもりだったし、いつか。

心地よい春の風と、陽気を浴びながらの登校はちょうどいい運動になった。春休み中は運動不足だったせいかな、ちよつとしんどいが。

「――しゃがります」

「……ん？……遠山？」

今通り過ぎて行った自転車に乗っていた男を見て、俺は呟いた。

遠山キンジ。俺とは顔見知りで、今の自転車に乗っていた人物だ。何やら急いで、というか焦って、しかも何故か周りをしきりに見ていたようだが。しかもなぜかボーカロイドの声も聞こえたし……そう思ってもう一度遠山の方を見直した。

――ああ。なるほど。

「チャリジャックかよ。珍しいこともあるモンだな」

つくづくトラブルに巻き込まれやすいな。あいつは。

ここからじゃ見えにくいけど、自転車と並走している無人のセグウェイにスピーカーが乗せられている。それに、スピーカーの影になっていてほとんど見えないが、棒状の何かが突出しているようだ。多分銃だろう。

さっきの遠山の青い顔とスピーカーから聞こえてきた声を考慮すると、大方『武偵殺し』の模倣犯と言ったところか。随分と暇なことを考える輩がいたものだ。

助けに行こうかと一瞬思うが、どうせこの距離じゃ追いつかないし、何より遠山はあれくらいで死ぬようなやつじゃない。俺が行っても逆に足手まといだろう。

後で生死の確認くらいはしておくか。

それにしても遠山も始業式遅刻とは……あいつ、来年の四月には普通の高校に転入するとか言ってたのに、そんなに大丈夫なんだろうか。まあどちらにせよ、武偵高がそう簡単に遠山を手放すとは思えないが。

「はっ……ぜえ……ま……待ちな……ぜえ……」
どさり。

「ん？」

思惑にふける俺の耳に、後ろから何か重たい物を落としたような音が聞こえてきた。何事かと振り返ると、

「……え？」

……ちよっと信じられないものを見てしまった。硬直し足が止まると同時に思わず自分の目を疑う。もしかすると、チャリジャックより珍しい光景かもしれない。

倒れているのだ。女の子が。うつ伏せで。

しかも武偵校の制服を着ている。身長から察するに中学生だろう。

「お、おい！大丈夫か！？」

俺は慌てて駆け寄ってしゃがむと、少女を仰向けにした。そして首元を抱え上げて膝に乗せる。

「おい！しっかりし……」

しっかりしろ、と言いかけた先の言葉は出てこなかった。

（か、可愛い……）

その女の子を見て、俺は事態を忘れて思わず釘づけになっていた。整った顔立ち。絹糸のように細い、サラサラとした亜麻色の髪。林檎のような朱色に染まった頬。桜色の唇。そこから漏れる上気した吐息が艶めかしい。

「あ、あんた……」

少女の蚊の鳴くような声ではっと我に返る。よかった……とりあえず声を発することができないほど衰弱しているわけではないらしい。

「大丈夫か？」

「あんた……何で……追いかけないのよ」
「え？」

息絶え絶えに少女が何か言ったが、よく聞き取れなかった。

「だから……チャリジャックよ……気づいてたんでしょ？」

「あ、ああ。そのことか。って、もしかしてあれを追いかけてこんなことに？」

苦しそうに少女は頷いた。

「武偵憲章第一条にあるでしょ。『仲間を信じ、仲間を助けよ』って」

「ああ、なるほど。ご立派なこった。けど、大丈夫だ。あの自転車に乗ってるやつは、あれくらいで死ぬようなやつじゃない」

「何で……そんなことをあんたが……」

「あいつとは知り合いだからな。仮にも強襲科でSランクの武偵だ」
アサルト
嘘だけど。いや、まあ嘘ではないか。

「そう。よかった……」

安心したからか、少女の瞼が徐々に落ちていく。

「お、おい、ちょ、おま……」

「もう……だめ……」

「おい！しっかりしろ！死ぬな！死ぬんじゃない！」

「……」

糸の切れた操り人形のように、少女の身体から力が抜ける。自然に少女が俺に身を預ける形になるが、彼女の身体は驚くほど軽い。

俺へのツツコミもない。どうやら気を失ったらしい。

「はあ……」

ツツコミのないボケの虚しさのため息をつく。

これから、どうしようか。

それほど遠くないところから、爆発音が聞こえた気がした。

「失礼します」

両手がふさがっているため足で扉を開ける。

「……いないか」

本来教師がいるはずのそこは空席で、机にビーカーに入った薬品やファイルが雑多に置かれているだけだ。

ここは保健室。こんな物騒な高校だが、怪我の治療は衛生科や救護科ビュラスなる学科が受け持っているため、厄介になる生徒は少ない。ほとんど形だけの部屋だ。

その証拠にベットを見ると、八つある全てが見事に無人。まあ初日から保健室を利用する特殊な生徒がそういるとも思えないが。俺は手近なベットに、背負った少女を降ろしてシーツをかぶせた。どうやらまだ気絶しているらしい。目を閉じた少女は精巧な人形のように、気が付くと魅入られたかのように見つめている自分がいる。……いかな。どうも相当寝不足らしい。いくらこの子が可愛いからって、普段の俺なら三次元の女の子に見惚れるなんてことはない。

「んん……」

少女がかすかに瞼を震わせた。

「ん……あ、あれ？」

「起きたか」

「私……」

辺りを見た少女は、困惑した顔でこちらを見上げてきた。

「覚えてるか？お前、自転車を追いかけて、俺の目の前で倒れたんだ。ここは武偵高の保健室だ」

「そうだった……って、あの自転車に乗ってた人は……！」

そう言うなり起き上がる少女だが、

「きゅう……」

「急に起き上がるから……大丈夫か？」

「うう……」

ゆっくりとまたベットに戻っていく少女。俺は鞆からまだ開けて

いない水の入ったペットボトルを取り出して、少女に手渡した。

「ほら、飲め。遠山……あの自転車のやつなら無事だ。さっきメールで確認した」

「そう……犯人は捕まったの？」

「いや。一応調査中らしい」

さっき周知メールが来た。恐らく犯人は見つからないだろうが。

少女が水を飲む。しばらく沈黙が続く。

「横井琴音」

水を飲み終わった少女は、急にそう口にした。

「ん？お前の名前か？」

「そうよ。今日は助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。じゃあ、俺はもう行くぞ」

少女——横井も無事だったみたいだし、自分のクラスに行こうと俺は手提げ鞆を持って出口の方へと向かった。

「……待って。ねえ、二つほど聞きたいことがあるんだけど」

横井に呼び止められて振り返る。聞きたいこと、か。一つは予想できるが……さて、なんて答えようか。

「何だ？」

「何で……チャリジャックを見捨てて、私を助けたの？」

まあ、これは正直聞かれるかもとは思っていた。何せ明らかに命に関わるチャリジャックを見逃して、たまたま近くにいた少女を助けたのだから。

「チャリジャックはほつといっても何とかなるだろうって思ってたし、あの距離で向こうは自転車だ。走っても追いつかなかっただろうしな」

俺は振り返って壁にもたれかかると言葉を続けた。

「逆にお前は俺の目の前で倒れてたからな。スルーするわけにもいかないだろ」

「ふーん」

興味なさそうに横井はそう言った。自分から振った話題だろうに

……

「逆に聞きたいんだが、何で俺がチャリジャックに気づいてるってわかってたんだ？」

「たまたま聞こえてたのよ。『チャリジャックかよ』って」

「ああ。なるほどな」

「そういえばそんなことを呟いたような気がする。」

「で、二つ目の質問なんだけど……あんた、もうチームは組んだの？」

「？」

これは完全に予想外の質問だった。質問の意図は全くわからないが、とりあえず答えを返す。

「組んでねーよ。まだ一学期の初日だぞ？」

こんな早くにチームが決定しているところがあつたら、それはよほど自信があるか、よほどバカかのどちらかだ。

「じゃあいいわ。あんた……私の奴隷になりなさい」

さらっと横井が口にした言葉に硬直する。

……何だって？

「……すまない。もう一度言ってくれるかな？」

聞き間違い、だろうか。今、おおよそ日常生活で明らかに使われない単語を耳にしたような……

「はあ……使えないわね。一回で聞き取りなさいよ。奴隷よ、ド・レ・イ。あんたは今日から私の奴隷なの！」

……市民。奴隷とは何ですか？

ありもしないレーザーガンを取り出したい衝動に駆られる。

「ちょ、ちょっと待て。何だそれは」

「それもこれもないわよ。あんたは私の奴隷になって、一緒にチームを組むの。わかった？」

「……」

あ、頭が痛くなってきた……何だこいつ。

「拒否権は？」

頭を押さえながらそう聞くと、

「あるなら最初からこんなこと言わないわよ」

「……だが断る」

もう限界だ。行こう。

俺は保健室を出て、後ろ手にドアを閉めた。

……今のは、ちょっと理解不能過ぎた。何だかよくわからないけど、忘れよう。きっとそれがいい。

俺は少し足早に、二年の教室に向かった。

その後、俺は何かH^{ホーム}R^{ルーム}に間に合い、席についていた。

二年B組。俺の数少ない友達である遠山キンジ、峰理子とは別のクラスになってしまった。しかも、あまり居心地のいいクラスではない。

パツと見、強襲科っぽいやつは少ないクラスだし、一見問題なさそうに見える。が……

「秋空。今年も一年よろしくねー」

後ろの席から俺に話しかけてくる、その声が俺より一つ年上の姉なのは問題でしかない。

「……よろしく」

……いや、だがそれはまだいい。まだ、いい。姉が留年しているのにはわけがあるし、毎年姉とクラスが同じなのはきっと偶然だ。そう信じたい。

それよりも、もっと問題がある。

ちらりと右に視線をやると、

「……」

俺の右の席には女生徒が座っている。俺より少し遅れて教室に入ってきて席に着いたつきり、ずっと本を読んでいる。集中しているらしく、俺の視線には気づいていないようだ。

女生徒の髪の毛に目を移すと、それは見事な亜麻色だ。背は低く、机の高さと首の高さが同じくらい、踵も地面につききっていない。

顔も端正な顔立ちで……間違いない。さっきまで保健室で話していた少女、横井琴音だ。

さっきまで俺のことを奴隷にするなんて言っていたのが嘘のように、静かに本を読む横井は理知的な雰囲気醸し出している。

（本当に……さっきのは何だったんだろう。隣の席なのに何もしてこないってことは、からかってただけなのか）

「はい。ではホームルームを始めます。まずは自己紹介からかな」
いつの間にか教壇に立っていた教師の言葉で我に返る。

担任は去年と同じのようだ。若いのにいつもどこかくたびれていて覇氣のない、どうも苦勞してそうな男性教師。名前は斎藤京介。

「じゃあ五十音順に。左の列の人から一人づつ……」
ずぎゅぎゅん！

「……」

今、隣の教室から銃声が二発分間こえてきた気がするんだが……

「コホン。一人づつ前に来て自己紹介をしてください。名前、専科、趣味、特技だけは必ず言うこと。では、どうぞ」

斎藤先生。どうやらなかったことにしようとしてるらしい。やっぱり、苦勞してるな……

「……です。探偵科で、趣味は……」

生徒達も何事もなかったかのように普通に自己紹介をしている。

この学校大丈夫だろうか……

俺の心配をよそに、滞りなく自己紹介が進んでいく。

「……上泉久遠^{かみいずみくおん}。超能力捜査研究科《SSR》。……趣味も特技も特になし」

もう力行か……って、『特になし』ありなのかよ。

そう思って顔を上げて、

「え？」

思わず自分の目を疑った。

それくらい、教壇に立つその少女は美しかった。人間離れしていると言ってもいい。周りを見ると、男女ともにかなりの人数が心を

奪われたかのように見惚れていた。

まず目を引くのは、その長い髪。腰まで届こうかというその長髪の色は見事な白銀だ。ほとんど白に近い白銀。それが雪のように白い肌や華奢な体躯とよく合っていて、どこかのファンタジー世界のお姫様がそのまま抜け出してきたのではと疑ってしまう。

顔を上品な顔立ちで、見た感じ百四十もなさそうなほどの低身長が保護欲を掻き立てる。ますますお姫様のような印象だ。

「次、どうぞ」

どこか疲れたような斎藤先生の言葉でハツとなり、次の生徒が慌てて前に出た。

「……です。装備科で……」

自己紹介が再開された。再開、というのもおかしいかもしれないが。

それにしても可愛いやつだった。いまだに何人か上泉の方をぼーっと見つめているやつがいるし。

「す、鈴木桜すずきさくらですっ！」

また中々可愛いやつが教壇に立った。実は当たりなクラスなのだろうか。

黒髪のショートヘア。くりつとした垂れ目が印象的だ。

「探偵科で、ええと、しゅ、趣味は料理です。特技は、ええと、ええと……あ、ありません！ごめんなさいっ！失礼します！」

鈴木はぺこりと頭を下げると、そそくさと自分の席に戻ってしまった。

慌ただしいやつだな。

「……です」

順番が流れていく。鈴木の後には特に興味を引くやつはいなかった。そして、俺の前の席のやつが教壇へ向かう。

次は俺か。

前のやつが戻ってくるのと入れ違いに、俺は立ち上がると教壇へと歩いて行った。

「――松永秋空だ。探偵科。趣味は読書。特技は手品だ。よろしく」
手品、と言っても麻雀やトランプなどでのイカサマのことだ。あまり人前で披露できる類のものではないが……まあ嘘は言っていない。

言い終わるや否や席に戻る。少し緊張したが、別段おかしい点はなかったはずだ。

まっながはつき
「松永葉月です」

問題はこの姉だ。

姉が名前を名乗った途端、教室がざわめきだす。

「松永葉月って、あの？」 「天才とか言われてるんだろ？」 「あれ？　そういえばさっきのやつも松永って言ってなかった？」

「はいはい静かに」

斎藤先生が手を叩くと、ざわめきは徐々に引いていった。

「えーっと。続けていいのかな？……改めまして、松永葉月です。

さっき自己紹介してた、秋空の姉です」

余計なことを……

「探偵科です。趣味は料理。特技は速読かな？　一年留年してるけど、気にしないで気軽に声をかけてくれると嬉しいです。よろしくね」
そう言って姉は席に戻った。姉も俺も、この後何かしら色々聞かれるんだろうな……留年生なんて珍しいし。

宮島、宮中、森……八木、山本……途中ちょっと変なやつはいたものの、順調に年始の恒例行事は終わろうとしていた。

ここまでは。

「横井琴音よ」

（あ、あいつ……！）

すっかり忘れていた。いや、忘れたかった、の方が正しいのかもしれないが。

「探偵科。趣味は漫画とTRPG。特技はエッグドロップ」
どんな特技だよ……

しかしそれ以外はいたって普通の自己紹介、か。

「そして、松永秋空！私はあるに言いたいことがあるわ！」
「……」

俺はその言葉にうつとうしそうに目線だけやるが、内心めっちゃ焦っていた。

全然普通の自己紹介じゃないじゃないか。

「え？何々？」「あいつ、あの可愛い子と知り合いなのか？」「松永許すまじ」「もしかして付き合ってるんじゃない？」

……色々と飛躍しすぎだろう……とてもこいつらが推理が得意な集団とは思えない。

それよりも、俺は目立つのが嫌いなのだ。なのに何でこんなことに……

「秋空！あんた、さっきの話に納得してないでしょ。だから今、クラス全員の前で誓ってもらおうよ」

何だと？『さっきの話』？って、まさか……

「おいお前……」

まさかクラス全員の前で「奴隷になれ」なんて言い出すんじゃない？ここにいろやつらがそんなこと聞いたなら、絶対面倒なことになる。質問攻めにあうこと必至だ。

「ふふ。察しがいいわね。まあ昼休みに私と付き合うんなら、言わないでおいてあげる」

「……」

あ、悪魔かこいつは……

「どうするの？後三秒以内に決めなさい」

「え？」

「さーん……」

「わかった！昼休みだな！？いいぜ、ちょうど暇だったからな！」俺はもう、そう答えるしかなかった。

うう……何で俺がこんな目に……

「よし。決まりね。昼休み、楽しみにしてるから」

意味ありげにそう言うと、横井は自分の席へと戻っていった。

「おいおい。昼休みに二人だけでデートだと」「何だあいつ。地味なやつだと思ってたのに、あんな可愛い彼女がいたのか。まじで爆発しろ」「そういえば、あの二人始業式いなかったよね。二人で何かしてたんじゃ」

教室はいまだにざわざわしているが、斎藤先生はもうどうでもよくなったのか、止めるつもりはないらしい。

「じゃあHR終わります。あんまり騒いで他の教室に迷惑かけないように。では」

斎藤先生はそのまま教室を出て行った。先生、多分誰も聞いてないぞ……

「お前、どういうつもりだ？」

戻ってきた横井に問い詰める。

「話するくらい、別にいいでしょ？そんなに時間は取らせないわよ」涼しい顔でそう答える横井は、それに、と言葉を続けた。

「秋空にとっても悪い話じゃないはずよ」

「……わかった。話だけは聞いてやるよ。けどその代り、また奴隷とか何とかふざけたこと言うのはなしだ」

「私は本気なんだけどね……まあいいわ。続きは昼休みに話しましょう」

話は終わ리と言わんばかりに、横井は本を取り出して読み始めた。

……わからんやつだ。破天荒なやつかと思えば、あんなことをしてここまで冷静でいられる。

大物、なのだろうか。

少なくとも、これだけは自信を持って言える。

俺はこいつが、ものすごく苦手だ。

「はあ……」

俺はため息をつく、と、周りの野次馬をどうするかについて思案を巡らせた。

幼女の需要と、平穏な昼休み（前書き）

今回は雑談パート。

幼女需要と、平穏な昼休み

昼休み。クラスメイトからの質問責めを何とかまいた俺は、横井との待ち合わせ場所である理科棟の屋上にいた。やつらも、流石にここまで追ってくることはないらしい。この後教室に戻るのがいささか怖いが……

横井はどこだろうと辺りを見回すが、どうやらまだ来ていないらしい。横井もクラスメイトをまくのに必死なのだろう。俺は携帯でもいじりながら気長に待つことにした。

「さっき教務科から出てたメールさ。二年生の男子が自転車を爆破されたってやつ。あれ、キンジじゃない？」

数人の女子がしゃべりながら屋上にやってきた。屋上ってあまり来たことがないが、昼休みは混んだりしそうなイメージだ。出来ればさっさと用事を済ませてしまいたいところだな。

「あ。あたしもそれ思った。始業式に出てなかったもんね」

「うわ。今日のキンジってば不幸。チャリ爆破されて、しかもアリア？」

遠山の話か。チャリの件はともかく……『アリア』？どうもまた面倒ごとに巻き込まれてるみたいだな。

「お待ちせ」

いつの間にか後ろからトントンと肩を叩かれていた。

「おお。早かったな」

携帯を閉じて振り返ると、横井と目があった。それにしても小さいな、こいつ。

「奥の方に行くわよ。色々と、聞かれたくないようなことも話すかもしれないし」

「了解」

何を話すつもりだろうと思ったが、あえて何もツツコまないことにした。

屋上の奥に陣取ると、俺は弁当の風呂敷包みを広げた。ちなみに弁当は姉さんが作った。俺もたまに作るが、基本毎日姉さんが作ってくれていて、本当にありがたい。

「って言うか、お前それで足りるのか？」

横井は手に、購買で買ってきたであろう焼きそばパンを持っていたが、どうやらそれだけのようだった。

「足らなかったら秋空の弁当から少しもらうわ」

「……まあいいけどさ」

「いいんだ……秋空って結構お人よしよね」

ちよっと呆れたように横井が言った。

「そんなことを言われたのは初めてだな」

「そう？ 何だかんだで私の話も聞いてくれるし」

それはお前のせいだろう……と思いながらも口には出さなかった。二段になっている弁当箱の蓋を外す。中身はほとんど余りものの詰め合わせだが、姉さんの謎の技術によりとてもそうは思えないほどに美味い。

「じゃあ、いただきます……」

「もぐもぐ。美味しいわねこのだしまき卵」

「……別に食うのはいいんだが、せめて自分のパンを食いきってやらにしてくれ」

「ただ食い意地張ってるんだよ……」

「で？ 話があるんだろ？」

ピリッとのりたまふりかけの袋を開けながら、俺は横井に言った。

「ええ。って言うてもさっき保健室で言ったのと同じよ。私とチームを組みなさい」

「……」

さて、どうしたものか。

冷静に考えればこの申し出、別に受けてもいいはずだ。

だがいくつかの疑問と、会ってまだ数時間の横井に対する警戒心

が俺を踏みとどまらせている。

ぶっちゃけ、胡散臭い。

「まず聞くが、何で俺なんだ？」

とりあえずそう尋ねると、横井は焼きそばパンにかぶりつきながら、

「んー。勘？」

「真面目にしないと話聞かないって言ったよな？」

そしてパンをくわえたまま上目遣いはやめろ。

「冗談よ。いやまあ、あながち間違っではないんだけどね」

お茶のペットボトルの蓋を開けながら、横井は言葉を続けた。

「秋空はどうして今朝のチャリジャックがわかったの？」

「随分と急な質問だな。どうしてって言われても……普通気づくだろう。遠山は相当焦ってたみたいだったし、並走してるセグウェイは明らかに不自然だし……」

そこまで言うのと横井は深いため息をついて、

「普通気づけないわよ。まあAランク武偵が十人いたとして、そこまでの観察力を持つてるのが六人、それらの情報をチャリジャックと結び付けられるのは一人いるかいなかったところね。それにチャリジャックまで思い当たったとして、それを信じられる人なんてそうそういないわよ」

「それはAランク武偵を舐めすぎだろう……ちなみにお前はどうかって気づいたんだ？」

「私は普通にサドル裏のプラスチック爆弾が見えたのよ」

「……」

「な、何よその憐みに満ちた目は……」

「……いや、何でもない」

サドルの裏側が見えるくらいの身長って……と言いきうになるも、すんでのところで言葉を飲み込んだ。

「何よ何よー！ いいわよ私は低身長で！ 需要はあるんだから！」

「それは……一部の紳士達限定では？」

まあこう見えて俺も紳士なんだが。

「うるさい！今は幼女が微笑む時代なんだ！今にわかるわよ！」

「声マネ頑張ったな。全然似てないけど。……この俺の顔より醜く焼けただれろ！」

「え、すごい。結構似てる……」

横井は感心したのか目を丸くしていた。

「こんなのも出来るぞ。……イメージするのは、常に最強の自分だ」
「おお……！」

「気を付けろ。触れると一瞬で浄化されてしまうぞ」

「おお！すごいじゃない！」

「……最近の女子高生って、今のネタ全部わかるのか……何か、知りたくなかった現実を知ってしまった気がする」

急激にテンションの下がる俺とは裏腹に、さっきまで怒っていたのが嘘のように、横井は楽しげな様子で言った。

「わかるわよそれくらい。どれもメジャーなネタじゃない」

「まあそうだけど……って、かなり話が脱線したな。何の話してたっけ」

確か……横井の身長が低いって話だったか？

「今、何かすごく失礼なこと考えてなかった？」

ふと見ると、横井が笑顔で震えるこぶしを握っていた。

「い、いや何も？」

こ、怖すぎる！やっぱりまだ怒ってるのか。

「言っておくけど、私がサドルの裏側を見たのはたまたま携帯を落として、その時にしゃがんだからよ」

「そ、そうか。そうだろうな……」

まあさすがの横井でも、サドルの裏を見上げるのは無理があるかな。多分。

「わかればいいのよ。わかれば」

そう言う横井の顔から笑みが消え、握りこぶしも解いてくれた。笑顔があんなに怖いものだとは思わなかった。

……って、また話がそれたな。

「話を戻そう。何で俺なんだ？」

「え？何が？」

「……」

もうやだこいつ……

「お前、自分が何しに來たか完全に忘れてないか？」

「い、いや覚えてるわよ。ただちよっと、秋空のせいで話がそれたから、それで……」

なぜ俺のせいというところを強調するのか。

「はいはい。オタクってのは話が盛り上がると周りが見えなくなるからな」

「それは明らかに偏見だし、その自分は違うけどみたいな言い方は腹立つわね……」

そう言って、横井はパンの最後の一口を頬張った。

「じゃあ、話を戻すわよ。まず秋空が欲しいと思った理由は、今朝のチャリジャックを一目で見抜いた洞察力よ」

「いや、だからあんなの普通気づくって」

「……まあいいわ。それにそうでなくても、秋空は去年、ある事件を解決してる。遠山キンジと二人でね」

「……」

まさかあの事件を引き合いに出されるとは……いつの間に調べたのか。

「そうだな。確かにそんなこともあった。あのときは遠山の優秀さに、本当に助けられたな」

「そうね。確かに遠山キンジは入学当時Sランクで、入学試験で教官を全員倒すくらい優秀な武偵よ。でも今はEランクだし、何よりホテル全体に爆弾を仕掛けて人質を取った犯人グループを、たった一発の銃弾で仕留めるのはかなり難しいんじゃないかしら？」

そんなことまで調べたのか。一体どこまで知っているのやら。

「強襲科のSランク武偵は、一個中隊と同じ戦力があるんだ。それ

くらい出来てもおかしくはないだろう。それに一発で済んだのは運がよかっただけだし、警察の助けもあったからな」

「警察？ どうせ最後に犯人グループ取り押さえただけとかじゃないの？」

参ったな。どうやら全てお見通しらしい。

「あんたが何をしたのかまではわからなかった」

そりゃそうだろう。俺は何もしてないんだから。

「けど、これくらい落ちこぼれの私でもわかったわよ。秋空が作戦を考えて、遠山キンジがその通りに行動した。そうでしょ？」

「……まあ確かにその通りなんだが……何とというか、誇張しすぎじゃないか？ 俺は作戦なんて呼べるほどの指示をしたつもりはないんだが」

そもそも遠山なら、俺の指示なしでも充分立ち回れただろう。本気出したあいつは、通常の三十倍程強いらしいし。

「とにかく、私から見ても秋空はそこそこ優秀な武偵よ。だからさっさと、秋空の持つ智謀、全てを私に捧げる奴隷になりなさい」

「微妙に某孔明を意識してるのはわかったが、そんな要求を受け入れるやつがいると思うか？」

奴隷って……

「じゃあチームメイトになってって言ったら？」

「却下ア」

「うざ！ 言い方うざっ！」

何か一矢報いた気分だ。

「冗談はさておき、まだ疑問は残ってる。もう昼休み終わりそうだし手短に話すぞ。お前、ランクは？」

「Sランクよ」

「……で、ですよねー」

「わかったの？」

「A以上だろうなとは思ってた」

行動力は実力に比例する。少なくとも俺はそう思っている。それ

は、いわば実力がもたらす副産物の一つだ。

俺が見た限りでは、琴音の行動力は並みのものではない。何せ自己紹介があれだからな……多分、俺が見た中で誰よりも行動的なやつだ。衝撃的でもある。

「俺Dランクだぞ？本当に俺でいいのか？」

「いいのよ。まあ、あんたの洞察力も潜在的なものみたいだし、これから私がビシバシ調教してあげるわ」

「調教って言うな。……じゃあ、最後の質問だ。何でこんな早い時期にメンバー集めなんだ？」

そう言うのと、琴音はふいっとそっぽを向いて、

「……別に。早いに越したことはないでしょ。兵は拙速を尊ぶって言うし」

「……そうか」

俺は短くそう答えた。

なぜかその横顔は、聞かれたくないと言っているような気がしたから。

気のせいだと思うが。

「で？どうするの？」

「ん？何が？」

「……あんた中々嫌らしいわね」

さっきの「え？何が？」のお返しは、どうやら気に入ってもらえたようだ。

「そうだな……奴隷なんてのはごめんこうむるが、チームメイトにならなってやるよ」

「ホント？まあ秋空ってぼっちみたいだから、こんないい話断ることはないと思ってたけど」

「お前何てこと言うんだ……」

まあ特に断る理由もないし、琴音とは話も合いそうだ。いい話なのは確かだろう。

「ただ、さっきも言ったが俺はDランク武偵だ。お世辞にも優秀と

は言えない。可能な限り任務には全力を尽くすつもりだが、もし俺の実力が不満ならいつでも解雇してくれて構わん」

食べ終わった弁当の空箱を片付けながら、俺は言った。

「よし。じゃあ決まりね。これからよろしく」

「ああ、よろしく。……コンゴトモ ヨロシク」

「そんなわざわざ言い直さなくても……」

琴音は呆れたような、でもちよつと嬉しそうな様子でそう言った。これが俺の基本平和で、ちよつと慌ただしい日々の幕開けだった。

苦勞人の知り合い（前書き）

今回もg d g dと雑談パート。

苦勞人の知り合い

――午後七時半。

クラスのやつらからようやく解放された俺は、家の近くにある本屋のライトノベルコーナーにいた。そこそこ大手の本屋の支店で、ラノベやTRPG関連の本も結構置いてあるところだ。

帰り道の途中にあるということもあって、俺は要もなくここに寄ることが多かった。つまるところ冷やかしのだが。

俺は平積みされている新人賞受賞作品を一冊手に取ると、立ち読みを始めた。

(……これからどうなることやら。Dランクの俺がSランクの琴音と組んだんだ。風当たりは強いだろうな)

読んでからしばらくして、本の内容そっちのけでそんなことを考えている自分がいる。

あの屋上でのやり取りの後、琴音からは何も話しかけてくることはなかった。勿論俺からも話しかけに行くことはない。

俺はこれ以上クラスのやつらに話題になりたくない。それは、多分琴音も同じだろう。お互いそのことはよくわかっていようだった。

だが自己紹介のときの琴音の行動が気にかかる。俺と話をするなら、他にも方法はあったはずだ。なぜ、あんなに目立つような真似をしたのか。

それにまだ気になることはある。

自分で言うのもなんだが、俺は結構人見知りをする。後、若干コミュ障の気がある。そんな俺がほぼ初対面の、しかも苦手意識のある女子相手にあそこまで自然に会話出来るとは……話題が合うとは言え、琴音とは初めて会った気がしないほどだった。

もしかしたらそれは、琴音の人柄が成せる技なのかもしれない。

「ふーん。中々見る目があるじゃない」

ふと耳元で、鈴の音のような綺麗な声が聞こえた。ふわりと石鹸のような、甘いい匂いがしたかと思うと、

「う、うわっ！」

琴音が背伸びして俺の手元の本を覗きこんでいた。サラサラとした亜麻色の髪が一瞬手に触れる。

「び、びっくりした……いつの間に……」

「秋空が立ち読み始めたくらいからよ」

驚いた。まだ心臓がバクバク鳴っている。

まさか琴音のことを考えているときに、ピンポイントで本人登場とは。

「それ、面白いわよ。個人的にはオススメ」

「お、おお。そうか」

同様の余韻が残ったまま、俺は何とか返事をした。

琴音はくすつと笑うと、

「びっくりしすぎよ。仮にも武偵なら、これしきのことで動揺しない」

「……了解」

「で、秋空は何を買いにきたの？」

「特に何も。面白そうなものがあれば買うかも程度。お前は？」

そう尋ねると、琴音は肩をすくめて言った。

「同じよ。何か面白いラノベない？」

「そうだな……って言ってもお前が何読んでるか知らないし」

「まあそうよね」

言いながら、琴音は本棚の一冊に手を伸ばす。

「あー、それは俺も表紙につられて読んだな」

「へー。内容は？」

「そこそこ。気軽に読めるのがいいところか」

「んー、じゃあやめとく」

典型的なオタク同士の会話。人から評価されたもののほど、そんなに面白くないものだ。

俺も読んでいた本を元あった場所にそっと戻した。

「俺はこれからコンビニ寄ってから帰るけど、お前はもうするんだ？」

「私も着いてく」

「え？」

「何よ」

「いや、何でも」

少々意外だった。まさか着いてくるとは。何か話でもあるんだろうか。考えても仕方ないが。

本屋を出る。日はとくに沈みきり、空は闇色に包まれている。街灯と建物の明かりが街を照らしていた。

「なあ。聞きたいことがあるんだが」

「また？ 武偵なら自分で調べるなり、推理するなりしなさいよね」「じゃあ今からお前から話を聞いて調べる」

揚げ足を取ってみると、琴音はむすっとした顔で、
「……しょうがないわね。何？」

琴音は無然顔だが、それでも質問には答えてくれるようだ。

「俺以外に、誰か決まってるチームメンバーはいるのか？」

「いないわ。でも狙ってるのはいる」

「誰だよ」

「SSRの上泉久遠」

「……あ、あいつか……」

上泉久遠。聞き覚えのある名だと思ったら、今朝の自己紹介のときにあいつか。

「一応理由を聞いておこうか」

「頭脳面は私と秋空で充分だから、戦闘力の保管よ」

「……だからって何でそんな競争率高そうなやつを？」

武偵は超偵に勝てないと言われている。SSRの生徒はそれほどまでに圧倒的だ。恐らく、あの上泉も例に漏れず。

その上あの容貌だ。引く手数多なのは間違いない。

「普通に強襲科のAランクとかじゃ駄目なのか？」

「そういう妥協をしたくないから、こんな早くに動いてるのよ」

「なるほど。ちなみに他には誰を？」

「狙撃科のレキ」

「ああ……」

有名なやつだな。『ロボットレキ』の異名で知られる、狙撃科の麒麟児だ。極端に無口らしい。

「他は？」

「強襲科の神崎アリア」

「アリア？」

俺は昼休みにその名を耳にしていたのを思い出した。詳細は全くもって不明だが。

「誰だそいつ」

「知らないの？」

琴音は信じられないと言いたげな顔でこちらを見上げてきた。

「そんなに有名なのか？」

「有名も有名。ここに来る前はロンドンの武偵局^{カドラ}にいて、一度も犯人を逃がしたことがないっていう天才よ。『双剣双銃』って呼ばれてるわ。言うまでもなくSランク」

「一度も犯人を……？ そんなやつが……知らなかったな」

「知ったときなさい。それくらいは」

呆れたように琴音が言う。

「けど、随分ランクの高いやつばっかだな」

「私だって、今言った全員をメンバーに加えようとは思ってないわよ。でも、仮に一人でも入ってくれたら心強いでしょ？」

「んー……そんな上手いかないだろ」

数撃ちや当たる理論。いや、的が多いと考えると逆数撃ちや当たる理論か。

「大丈夫よ。この学校、強いのは腐るほどいるから。それに……：最悪誰か一人はチームに入る勝算があるわ」

「勝算？」

「それはこの後説明するわ」

この後……？

「それは……」

「ほら、着いたわよ」

ふと目を上げると、夜闇に光る牛乳瓶の看板が見えた。

扉を開けて中に入る。時間帯のせいだろうか。少し混んでいるようない感じがする。

「……ん？」

「どうしたの？」

「いや……」

あそこにいる、なぜか口尖らせて立ち読みしてるやつは……

「遠山？」

「……あれ、松永？」

読んでる手はそのままに、顔だけ振り返ったそいつは、やはり遠山キンジだった。

「よかった。生きてたんだな」

周知メールでわかっていたこととはいえ、こうして会って怪我一つないのを確認出来たのは本当によかった。

「どういうことだ？」

「今朝のチャリジャックお前だろ。お前が青い顔で必死に自転車こぐの見てたからな」

「いたのかよ！じゃあ助けろよ、この薄情者！」

「おいおい。俺が行っても足手まといになるだけだろう」

「お前弱いけど爆弾の知識だけはそこそこだろ。解除くらいしやがれ」

見ると遠山は額に青筋浮かべていた。

「ねえ、そいつ誰？」

琴音がそう尋ねてきた。

「遠山キンジ。俺の……知り合いだ」

「一番哀しい関係じゃねえか」

遠山は読んでいた近代麻雀を戻すと、こちらに向き直って言った。
「けどまあ、お前にも彼女が出来るとはな。一応祝っておくよ。名前は何ていうんだ？」

「え？」

「か、かか……」

遠山の言葉に目に見えて赤面する琴音。あれ、琴音ってそんなキヤラだったのか。

「カカロット！」

「誤魔化せてないぞ」

一応そう一言ツッコんでから、

「こいつは……」

「わ、私と秋空は……そ、そんなじゃない！恋愛なんて……くっだらない！」

「……ということだ。こいつはただのクラスメイトだよ」

そんな大声で強く否定しなくても……他の立ち読みしてる人に迷惑だろ。

「え？あ、ああ。悪い」

遠山もそこまで強く言われると思ってなかったのか、少し驚いた様子だ。

「わ、私は買う物あるから、ちょっと向こう行ってる」

相変わらず赤面したまま、琴音は逃げるようにどこかに行ってしまった。

「よく似たやつがいたモンだな……」

「ん？何か言ったか？」

「何でもねーよ」

遠山が何か呟いたのだが、聞き逃してしまった。

遠山は棚から漫画を一冊抜き取ると、

「まあ、俺はそろそろ帰る」

「あれ、漫画買いに来ただけ？飯買いに来たんじゃなかったのか？」

遠山とこのコンビニで会うことは多い。遠山は寮からすぐ近くにあるし、俺は帰り道の途中にあるからだ。遠山は大概いつも夕飯を買いに来ているのだが、今回は違ったらしい。

「今日は違う。実は家追い出されてな……」

「は？」

「いや、朝から変なやつに付きまとわれててな。家まで押し付けてくるわ、ももまんは七つ食うわ、奴隷になれなんて言いやがるし……挙句の果てには出ていけて……」

お、おい。何か愚痴り始めたぞ……疲れ切った遠山の顔から察するに、どうやらよほどそいつに迷惑しているらしい。

……って、ん？ 奴隷になれ、だと？

「……よく似たやつがいたモンだな」

「ん？ 何か言ったか？」

「何でもねーよ」

『奴隷になれ』。流行ってるのだろうか。

「まあとにかく、俺はそろそろ戻るよ。じゃあな」

「ああ、またな。何か知らんが頑張れよ」

軽く手を挙げて、互いに別れを告げると遠山はレジへと向かった。

「で、あんたはここに何しに来たのよ？」

「うおおっ！ きゅ、急に話しかけるな……」

本日二回目。琴音は身長が低いせいか、近づかれても気づきにくい。

「まさかあいつと雑談しに来たんじゃないでしょ？」

「そりゃな。お前の買い物は済んだのか？」

言いつつ、さっき遠山が読んでいた近代麻雀を手取る。

「ええ。あんたは？」

「これ買うだけだな。つか、これ買ったら俺は帰るんだが……お前の『勝算』とやらをまだ俺は聞いてないぞ」

そのままレジまで向かおうとして、

「だから、この後話すっていったでしょ。あんたの家で」

その足が凍りついたように止まった。

「……え？」

「どうしたの？早く買ってきてなさいよ」

「いやいや。冗談だよな？」

今こいつ、俺の家がどうか言わなかったか？

「外で待ってるわねー」

なぜか楽しそうに笑みを浮かべながら、琴音はコンビニを出ていった。

「え、ちょ、待て……」

俺の伸ばした手も虚しく……

（確か、今日は姉さんの帰りは遅いんだったよな……）

俺はすでに、かなり消極的な思考を始めていた。

「おい。どういうことだ？」

自宅。リビングのテーブルに買ってきた雑誌を袋ごと置くと、俺は琴音に問いかけた。

「何で、お前が家まで着いてくる」

「まあまあ。PS3あるんだし、ここはとりあえずス〇4でも、やらないか？」

「やらねーよ。うちはアケコン一つしかないんだよ」

それよりもだ、と俺は言葉を続ける。

「お前何しに来たんだよ」

「決まってるでしょ？さっきの『勝算』について説明しに来たのよ」

「じゃあもうそれだけ言ってとっとと帰れ」

そもそも俺の家で説明する必要もないだろうに。

「上泉久遠、レキ、神崎アリア。この三人のうち最低一人を、秋空が口説き落とす。以上」

「は？」

俺が？

「じゃ、私は帰るわ」

「待て待て待て」

帰ろうとする琴音の襟首をつかんで引きとめる。

「何よ。帰れって言ったり待てって言ったり、はっきりしなさいよね」

不機嫌そうな顔で琴音は振り返った。

「お前、そのどこが『勝算』なんだ？」

「――？」

「なぜそこで首を傾げる……」

こいつ本当に探偵科のSランクか？

「私は秋空なら、一人くらい余裕だと思うんだけど。まあいいわ。やるだけやってみなさい」

「やだよ」

Sランクって言ったら天才だぞ？天才ってのは大概相手しにくい変人ばっかなんだよ。レキはそのいい例だ。

しかもコミュ障気味の俺にそんなこと出来るわけ……

「もし一人でも仲間に出来たら、ご褒美にボーカロイド全員の抱き枕カバー一式をあげるわ」

「やらせていただきます」

その程度なら余裕だ。俺を誰だと思っている。

「秋空って結構単純ね……まあいいわ。任せたからね」

そう言って、琴音は勝手にソファーに寝転がった。スカートがまぐれて、銃と一緒に白いふとももとその奥が少し目に映る。俺は自分でもわかるほど顔を赤らめて、慌てて目をそらした。

……琴音の装備はSIG Sauer P230か。覚えておこう。

俺は一瞬だけ琴音の方に視線を戻すと、そう心に留め置いた。装備を確認しただけだ。他意はない。白だった。

「というか、お前の『勝算』って結局なんだったんだ？」

「それを考えるのは、秋空の仕事よ」

「ああ、そう……」

まあいいや。抱き枕カバーのためだ。何かしら考えよう。

「で、お前どうすんの？帰るの？」

「このまま帰るっていうのもねー。泊まっていてもいい？」

「いいわけないだろ」

ここをどこだと思ってるんだ。姉がいるとはいえ、仮にも男の家だぞ。

「はあ……」

なぜか琴音はため息をつく、ソファー上体だけ起こして、

「おい、そこに座れ」

「だから似てないっての。無理すんな」

そもそもあの声マネは女では無茶だ。

「秋空はなぜか私に排他的な態度を取るけど、私達知り合ってからまだ数時間よ？そんなんでチーム組むんなら、もっとお互い一緒に行動して、交友を深めるべきだと思うけど」

俺はその言葉にとっさに答えることが出来なかった。

「……悪い。正論だな」

女の前で排他的な態度になってしまふのは、俺の悪い癖だ。直さねば。少なくとも琴音の前では。チームメイトなのだから。

「わかればよろしい。じゃあ、今日は泊まっていくから」

「それは駄目だ」

「何だよ！」

「逆に俺が聞きたいんだが……何で泊まりたいんだ？」

交友を深めるだけなら、学校でいいはずだ。

「それは……——から」

「え？」

琴音が俯いて何か言ったようだが、よく聞こえなかった。

「何だって？」

「だから……ここまで話題合う相手、珍しいから……もっと話したいなって……」

顔を朱色にして、モジモジと話す琴音。おかしい。現実の女の子がこんなに可愛いわけがない。

だが琴音の言ったことは俺も同じだった。俺もいわゆる、そういうネタが通じるのはネット上以外では琴音が初めてだ。唯一のオタク仲間の峰理子はただのギャルゲー好きだし。

「はあ。しょうがないな……」

今度は俺がため息をつく番だった。

「何、してるの？」

俺は鞆からノートを取り出すと、一ページ分ちぎり取った。

そして後ろを向いて、それをテーブルに置いた。同じく鞆から取り出したシャーペンで書く。

「ほら」

書き終わったそれを琴音に渡す。

「俺のメアドとスカイプ名だ。何か語りたいんならいつでも相手してやるよ。あ、でも今期のアニメの話は駄目だ。前期もあんまり観てない」

「秋空……」

「まあだからとりあえず今日は帰れ。そんで帰ったらメールしてこい。俺も……お前と色々話したいしな」

これは、紛れもない俺の本心だ。こいつと話してるのは中々楽しい。そうじゃなきゃチームメイトの件の承諾してない。

「……ありがと」

そっぽを向いて、照れ隠しのように琴音は言った。言って、ノートの切れ端をポケットに収めた。

「じゃ、じゃあ帰るね」

まだ少し顔を赤らめたまま、琴音は立ち上がった。

「ああ。家まで送っていくよ」

「え？ いいわよ」

「もう八時だぞ。女の子一人じゃ危ねえよ」

「でも……」

「いいから。ほれ行くぞ」

廊下に二人、縦に並んで歩く。俺が先頭。横に並べないことはな

いが、狭いのでお互い自然と縦になっていた。

それが悲劇の始まりだった。

ガチャリ。

「――！」

ドアに鍵が差し込まれる音。それに俺は、思わず硬直してしまった。

姉さんだ。帰ってきたんだ。

間に合わなかった。

「え……？ きゃっ！」

当然、琴音が俺にぶつかって……

「うおっ！」

折り重なるように、俺達は廊下に倒れた。

本屋でも嗅いだ甘い香りが鼻腔をくすぐる。少し遅れて、肩に髪の毛がかかる感触がした。

ガチャ、ガチャ。

鍵が回され、引き抜かれる音。

まずい。

こんな状況。姉さんに見られたら絶対誤解される。

頼む！ 開くな！

「ただいまー」

俺の必死の願いも虚しく。

運命の扉はあっけなく開かれた。

ヤンデレ姉さん（前書き）

最近は自分の書いた小説を読み直して、あまりの駄文っぷりに悶絶する日々。あ、今回短めです。

後、オリ設定で白雪はC組になってます。また綴梅子もC組の担任です。

ヤンデレ姉さん

このままではまずい。

冷や汗が頬をつたう。後ろから俺にしがみついている柔らかい感触も、今の俺には焦りを加速させる要因でしかない。

姉さんが、いや誰が見たって今のこの状況は誤解される。

自分で言うのもなんだが、俺のことを溺愛している姉さんのことだ。きつと俺の想像もつかない形で暴走する。

離れなければ。まだ間に合うかも。

「ただいまー」

無情にも、あっさりとその扉は開かれた。

「あき……え？」

俺の名を呼ぶ途中で、姉さんは俺達のいる方を見下ろして固まった。

沈黙と、いたたまれない空気が流れる。

「……」

最初に動いたのは琴音だった。俺の上から退くと、何事もなかったかのように制服の前についた埃をはたきはじめる。

……いや俯いてはいるが、よく見たら顔が赤い。

「バカ！秋空が急に止まるから……その……」

どうやら俺のせいで倒れたことを怒っているようだが、今はそんな場合ではない。

「秋空？その人は、横井琴音さんよね？」

倒れている俺に話しかけてくる姉さんの目は、いつもよりちょっと細くて、なぜかとても恐ろしく見えた。

「あ、ああ」

「朝の自己紹介のときも思ってたんだけど、秋空は横井さんとういう関係なの？」

「た、ただのクラスメイトだ」

「本当に？じゃあ何で、横井さんは家にいるのかしら」
なぜか。

このとき俺は首筋に刃物を添えられているかのような、そんな威圧感と緊張感を感じていた。

俺はゆっくりと立ち上がると、

「お、俺の忘れ物を届けに来てくれたみたいだな。今帰るところだ」
「忘れ物？」

これは姉が問い返したのではない。琴音の言葉だ。

またも空気が凍りついた。

（こいつ気づいてないのか！姉さんのこのただならぬ雰囲気！）
「ふふ。嘘だったんだ。ねえ秋空？もしかして、私に内緒で浮気してたの？」

「う、浮気！？」

別に浮気してたつもりはないんだが……

「あ、秋空。あんたまさか……」

後ろでは琴音が口元を手で覆って、ワナワナと震えていた。

「あ、姉とそんな関係に……」

まずいな。こっちも完全に誤解してる。

俺にどうしろと。

「……と、とりあえず琴音。俺と姉さんはお前が思っているような関係では断じてないから安心して帰れ。疑問があるなら後でメールで聞け」

俺はなるべく落ち着いて、言葉を選びながら琴音にそう言った。

「悪いが送っていきそうにはないが……くれぐれも気を付けて帰ってくれ」

「う、うん。わかった。それじゃ、また明日ね」

「ああ」

逃げるように琴音は去っていった。明らかにまだ誤解してるな。

まあ、とりあえず一人目は何とかなった。が、本番はここからだ。
俺は姉さんの方に向き直った。

「姉さん。どうかまずはその剣呑な雰囲気収めてくれ。落ち着いて話し合おう」

剣呑というレベルではないが。

「ふふ。だーめ。それじゃ秋空はホントのこと言ってくれないですよ？」

その様子じゃ、本当のこと言っても信じるかどうか怪しいけどな。

「まず、姉さんは誤解している」

「何が？さっき秋空は横井さんと絡まり合ってたよね？付き合っていないとしたら、あれは何だったのかな？」

……これは、相当重症だな。

「ホントのこと話してね？じゃないと、お姉ちゃん怒っちゃうよ♪」

この後、俺は二時間かけて姉さんの誤解を解いた。

「……よう」

俺は机の上に鞆を置くと、隣の席の琴音に声をかけた。

「おはよう。何か、眠そうね」

「ああ。完全に睡眠不足だ」

昨日に続き、今日もあまり眠れなかった。

あの後姉さんの誤解を解いた俺は、メールで琴音の相手をしていたわけだが……琴音とは怖いくらい趣味が合っていて、話題が尽きなかった。

しかし萌え属性が違ったがゆえに討論となり（クーデレvsツンデレ）、気が付いたら午前四時。続きは学校でということになり、結果睡眠時間はまたも三時間となったわけだ。一日ならいいが、二日続くとやや厳しいものがある。

「お前は大丈夫なのか？」

「ちよっと眠いかも。でも大丈夫。それより昨日の続きを……」

「今は勘弁してくれ……というか、そもそも人の萌えについてはどうこう言えんだろ」

俺は机の上に鞆を降ろすと、あくびをしながら席に着いた。

「本当に眠そうね。大丈夫なの？秋空には例の三人を仲間にするっていう重要な任務があるのよ？」

「わかってるよ。心配すんな」

例の三人、というのは言うまでもない。上泉久遠、レキ、神崎アリアの三人だ。

昨日、というか厳密には今日琴音がメールで聞いた話によるとレキはC組、アリアはA組らしい。後で暇を見て教室を覗いておくか。

「抱き枕カバーのためだ。全力以上でやってやるよ」

「任せたわよ。……あ、ちなみにSSRは今日から合宿だから」

「え？ってことは今日上泉来ないの？」

「ガンだな……出鼻をくじかれた。」

「とりあえず、同じクラスの上泉からと思ってたのに……」

となるとレキと神崎の二択か。何か、どっちも地雷な気がするの
は気のせいかな？

仕方ない。今日はレキに声をかけてみよう。玉碎覚悟だが。神崎よりはマシなはずだ。今は神崎関連の情報が少なすぎる。

「秋空、後ろ後ろ」

「ん？」

琴音がそう言って、俺の後ろを指差した。何だろうと振り返る。

「――！」

振り返って、驚愕に息を呑んだ。あまりのことに声も出ない。

「……何か用ですか？」

対する彼女は表情一つ変えずに言った。

「え、と。上泉？」

目の前の少女。見間違えようがない。教室の中でただ一人、明らかに異彩を放っているその少女は紛れもなく上泉久遠だった。

「はい。何ですか？」

急に現れたことで、俺は軽くテンパっている。だって昨日の自己

紹介のときも思ったがこいつ、可愛すぎるだろ……白い肌とか、白銀の長い髪とか、華奢な身体とか、本当にこんなアニメや漫画にしかないようなやつがいるんだなとちょっと感心してしまう。

後どうでもいいが、腰にモロ日本刀を引っ提げているのが気になった。

「えーと。合宿は？」

（アホか俺は。他に聞くべきことがあるだろ）

「私は特例で合宿を免除されています」

「ああ、そう」

声も綺麗だ。いやそんなこと考えてる場合じゃない。

「ええと、俺に何か？」

思い切って尋ねてみる。会話の流れは明らかに変だが。

「名前を呼ばれましたから」

「……え？それだけ？」

そんなはずないだろう。

「それだけです」

どうしよう。ものすごくやりにくい。

助けを求めて振り返ると、琴音のいるはずの席には誰もいなかった。逃げやがったなあいつ。

「松永秋空。昼休みに二人で話しませんか？」

「え？」

「話したいことがあります」

無表情のまま、かつ無感情に上泉は言った。俺と話し始めてから、いや多分その前からずっとそうだ。

多分、こいつもレキと同じタイプの人間、クーデレだな。デレがあるかはわからないけど。

「わかった。昼休みだな？空けておくよ。丁度俺も、お前に話したいことがあったしな。場所は理科棟の屋上でいいか？」

これはまあ、承諾するしかないだろう。話がよすぎてちょっと不安だが。

「わかりました。では」

上泉は頷くと、自分の席へと戻っていった。

よくわからないが昼休みに話せるらしい。案外、ここであっさり説得出来て、抱き枕カバー入手で一件落着かもしれないな。

でもクーデレキャラって大概一度決めたことに対して頑固だ。説得はかなり大変かもしれない。……いや、でも俺なら出来る。数多のギャルゲー、エロゲーをクリアする中で、どれも真っ先にクーデレを落としかかってきた俺ならいける！

クーデレはいいよなー。クーデレの魅力は何と言っても、最初は表情一つ変えなかったヒロインが、長く主人公と一緒にいることで笑顔になるあの瞬間にある。基本的ではあるがあれは堪らん。特にふわっと笑うのがいい。なぜ琴音にはわからんのか。

……いや、でも相手は三次元の女だ。これまで三次元の女には色々々と裏切られてきた。今回も充分あり得る。

つまり、上泉が猫を被っている可能性。もしかして、上泉はクーデレじゃないのでは？クーデレに見せかけたツンデレなのでは？しかもデレがないやつ。

それだったら駄目だ……俺はハーレムルートやCGコンプなどの特別な事情がない限り、ツンデレキャラは放置している。

ツンデレは駄目だ。何か、駄目。嫌いとはまでは言わないが、萌えない。琴音曰く、ヒロインが自分の気持ちに気づいて、それを否定したいけど出来ないやつぱり好きってところにニヤニヤするらしいが、俺にはさっぱりわからん。

「秋空？何か百面相してるとこ悪いんだけど……」

いつの間にか戻っていた琴音に、俺は頭を抱えながら言った。

「琴音。駄目だ……」

「何がよ」

「やっぱりツンデレは駄目だ……」

「あんたさっき人の萌えにはどうこうって言ってなかった！？っていか久遠と一体何があったの！？」

その後、教師が来て授業が始まるまでの間、俺達はお互いの萌えについて語り合った。多分、周りにいた他のクラスメイトからは引かれてたと思う。勿論、後から教室に来了姉さんにも。

「秋空、あなた疲れてるのよ」

「ああ。俺もそう思う」

休み時間での、冷静になった俺達の会話だった。

さっきのは寝不足のせいだ。そう思うことにした。

僕と契約して、チームメイトに――（前書き）

今回も短め。

僕と契約して、チームメイトに――

「本当にいいんだな？ 久遠。その……い、入れても」

熱を持った視線が、久遠のそれと絡まり合う。

「構いません。私を……受け入れてくれますか？」

身体が熱い。興奮と期待で、それは芯からどんどん高まっていく。じっとりとした玉のような汗が、俺の身体を流れ落ちた。

「……後悔してもしらないぞ」

声が震える。緊張で変になりそうだ。

「ええ」

久遠はそんな俺とは対照的に、どこまでも落ち着いている。その久遠の様子に、俺も少し冷静さを取り戻した。

ごくりと音を立てて唾を飲み込む。緊張で喉は乾ききっていた。

「じゃあ、入れるぞ……」

どうしてこうなったのか、それは数分前にさかのぼる。

「というわけで久遠。今日は昼一緒に食えないから」

「何が『というわけ』なのかは全くわからないけど、了解」

上泉は『二人で』と言っていた。理由はわからないが、琴音に聞かれたくないようなことでもあるのかもしれない。

「じゃあ琴音ちゃん、一緒にどう？」

後ろの席で話を聞いていた姉さんがそう言った。仕事明けに居酒屋行くサラリーマンか、と思わずツツコみたくなる誘い方だ。

というか、いつの間に『琴音ちゃん』なんて呼ぶようになったのか。

「えーと、いいですよ？」

「敬語なんて使わなくていいわよー」

琴音はまだ、姉さんとどう接していいのか戸惑っているようだ。まあ留年生ってそういうもんだよな。

「行くか」

二人のやり取りを見ながらの俺の言葉に、側にいた上泉がこくりと頷いた。

今日も理科棟の屋上は閑散としていた。吹き抜ける一陣の風が虚しい。

昨日は俺と琴音以外に三人組の女子達が談笑している姿があったが、今日はそれすらない。俺と上泉の貸切状態だ。とは言え、後から誰か来ないとは言い切れないが。

「……奥に行きましょう」

静かに上泉が言った。

「また聞かれたくない話か？」

おどけたように言っても、上泉は何も言わずに奥へと行くだけだった。俺もそれに着いていく。見事に昨日と同じ場所だ。

適当な場所に腰を下ろして弁当を広げる。上泉も俺に向き合うようにして座った。座ったのだが、

「……上泉。頼むからその座り方はやめてくれ」

上泉は後ろの柵を背にし、両膝を立てて座っていた。足の隙間から……その、奥が見える。

「上泉ではなく、久遠と呼んで下さい」

「わかった。わかったからその座り方はやめてくれ」

じゃないと前が見えない黒。

「わかりました」

そう言って久遠は素直に、曲げた足をそのまま横にして座り直してくれた。ほっと胸を撫で下ろす。

「ってあれ？お前弁当は？」

見たところ何も持っていない、手ぶらの久遠に尋ねると、

「……カロリーメイト？」

俺の問いに無言に頷いた久遠は、ポケットからカロリーメイトの箱を取り出していた。

「おいおい。育ち盛りの女の子が、昼飯カロリーメイトだけじゃ駄目だろう。弁当ちよっと分けてやるよ」

そう言っ、俺は久遠に割り箸を差し出した。また琴音が分けるとか言い出したとき用に、余分に持ってきておいて正解だった。

「……心遣い感謝します。しかし、私には不要です」

「何でさ。いいから食っとけ」

「私を食べ物で釣るのですか？」

「……んなこと思ってねーよ。いいから食っとけ」

まずい。完全に見抜かれてた。

「なら、いただきます」

久遠は俺の割り箸を受け取った。

飯を食い始めてから五分が経過した。早速問題が発生している。

会話が、全く続かない。現在進行形で双方無言だ。

クールな女の子は好みだ。でも度を越せばそれは二次元限定なのだと思ひ知らされた。現実だと、会話がめんどくさすぎる。

黙々と俺の弁当からおかずを口に運ぶ久遠とは裏腹に、俺は話題を探すので精一杯といった感じだ。

とりあえず、この気まずい空気から解放されたい。話はそれからだ。

「……松永秋空」

「お、おお。何だ」

やった！久遠から話しかけてくれた。心の中で一人歓喜しながら、俺は返事を返した。

「チームに空きはありますか？」

「え？」

突然の問いに思わず問い返してしまった。少し遅れて意味を理解する。

「……私を、あなたのチームに入れて欲しい」
——何だって？

「え？本当に？」

無言で頷く久遠。

何を聞かれ、求められたのか未だに実感がない。

話が上手く行きすぎていて、それが俺の懐疑心を呼び起こしていた。

「理由を聞いておこうか」

「……この話を、横井琴音に話さないと誓えるのなら」
そう言って、久遠はだしまき卵を頬張った。

「……ああ、約束しよう」

少し逡巡したが、これを聞かないと何も話が進まないのので聞くことにした。

約束は……必要とあらば破るかもしれない。

「……私は今、横井琴音の護衛任務を受けています」

「琴音の？」

思わず声に疑いの色がこもってしまう。

あいつの護衛？誰かに狙われているのか？あいつは仮にもSランク武偵だし、あり得る話ではあるが……にわかには信じがたい。

「依頼主は……って、こういうのは聞いちゃ駄目だよな」

「……依頼主は私も知りません。依頼の内容は両親を經由して、私の元へ来ましたから」

琴音の言葉に、俺は眉をひそめた。

「両親を經由して？」

かなり特殊だ。依頼主がわからないというだけでも結構怪しいのに、なぜわざわざ親を仲介するのか。

「任務の内容は横井琴音を守ること、この任務のことを横井琴音に話さないことの二つです」

「……それで、チームに入りたいってか」

頷く久遠。確かに護衛するのなら、なるべく近くにいる方がいい。

琴音に護衛のことを言えないのなら、チームに入るのは近づくための手っ取り早い方法だ。

……さて、どうするか。これが本当の話なのか否か、俺には判別する術がない。

正直怪しいが、わざわざこんな中途半端に怪しい話をする意味も見当たらない。

「理由は以上です」

「あのさ、聞きたいんだけど、琴音って護衛されるようなやつなのか？一応Sランク武偵らしいけど……」

「……話せません。それは、横井琴音が望んでいない」

久遠が一瞬俯く。長い白銀の髪がはらりと舞い落ちた。

「あなたも人に聞かれたくないことが少なからずある。……松永の末裔よ」

顔を上げた久遠は、俺をじっと見つめてそんなことを言った。

「――！」

どくんと、心臓が脈打つ。

久遠から目が離せない。

「お前……」

言葉が続かない。

お前、何者だ？

「……震えていますね」

これはブラフだ。俺は震えていない。久遠はこの言葉で、俺の反応をうかがっている。

落ち着け。冷静になれ。

「そんなことないと思うが」

声に違和感はなかった……はずだ。

「いいえ。確かにあなたの魂は震えている」

「へ？」

意味不明な久遠の言葉に、俺は思わず間拔けな声を出した。

久遠は表情一つ変えず、何も言わずにじっとこちらを見るだけだ。少しの沈黙の後、俺はおずおずと切り出した。

「あー、まあ済まなかった。琴音のことはもう聞かないよ」

これどうやむやになるとは思っていないが……俺は、逃げた。

「……ええ」

久遠は視線を俺から外すと、弁当と向き合った。

同時に、さっきまで無意識に感じていた息苦しさのようなものになくなる。

それと入れ替わるかのように、再び沈黙が訪れた。

見ると弁当の中身はほとんどなくなっている。久遠が大方食べてしまったらしい。

「なあ、さっきのチームの話だけど……」

何か話さなきゃと思いついそう言っていると、久遠はちらりとこちらを見上げてきた。

相変わらず無言だが。

「えーと、本当にいいのか？」

「ええ」

「本当に？さっきのお前の話が本当かどうかはわからないが、もし他に組みたい仲間や友達がいるんならそっちを優先すべきだ」

抱き枕カバーのためにも、久遠にはチームに入って欲しい。だがそれは久遠が自分の意志で入りたいと思う前提での話だ。無理して仲間にしても何の意味もない。

「いません。それに、さっきの話は本当です」

淡々と告げる久遠からは、何の感情も読み取れない。

「本当にいいんだな？久遠。その……（チームに）い、入れても」（え？っていかもうゴール？……やばい。テンション上がってきた。報酬のボカロ抱き枕カバーが見えるんだけど）

熱を持った視線が、久遠のそれと絡まり合う。

「構いません。私を……（チームに）受け入れてくれますか？」

身体が熱い。（抱き枕カバーの）興奮と期待で、それは芯からど
んどん高まっていく。

じっとりとした玉のような汗が、俺の身体を流れ落ちた。

「……後悔してもしらないぞ」

声が震える。（抱き枕カバー入手の）緊張で変になりそうだ。

「ええ」

久遠はそんな俺とは対照的に、どこまでも落ち着いている。その
久遠の様子に、俺も少し冷静さを取り戻した。

ごくりと音を立てて唾を飲み込む。緊張で喉は乾ききっていた。

「じゃあ、（チームに）入れるぞ……」

僕と契約して、チームメイトに――（後書き）

……うん。出来ないことはするもんじゃないですね。反省。

とりあえず、今回で武偵殺し編でのパーティー編成は完了です。

猫探しと少女（前書き）

バスジャックまでこのgggとした日常パートが続きます。

猫探しと少女

「だから、m o oはアンチRPGなテーマだけじゃなくて、独特のキャラクターとドット絵、謎の言語、それに良BGMがあったからこそその神ゲーでしょ？」

「あー、確かに変なキャラは多かったな。でも、ちゃんとみんなそれぞれ『ラブ』があった。悪いやつはいなかったし。勇者も、大臣も……」

俺、そして琴音は青海の公園に猫探しに来ていた。

いや、厳密には俺だけだ。

「けど、みんな悪い人じゃなかったからこそ、最後の石版には胸が痛んだわね」

「わかる。あれは鳥肌。でもあれで終わらないのがm o o」

俺は、久遠との話が終わった後、猫探しの依頼を受けていた。単位は0・1。報酬は一万。

で、青海まで猫を探しに来たはずが……

「ところでだ。琴音」

「何よ」

「猫、見つかった？」

「そんなわけないでしょ。雑談してるだけなんだから」
なぜか、俺達は公園を歩きながら雑談してるだけだった。

「あのな。お前はともかく、俺にとっては貴重な単位なんだ。邪魔すんな」

「あつそ。ていうか猫の居場所に、何か当てでもあるの？」

「あるわけないだろ。しらみつぶしだ」

そもそも俺も、見つからばいいなーくらいにしか思っていないし。

「お前は、授業サボってていいのか？」

「私はもう今年分の単位は揃えてるもんね」

琴音は得意げにそう言った。

「はあ。さいですか」

「っていうか、あんた単位そんなにヤバいの？」

「いや、別にヤバいつてほどではないけど……」

まあ、この先猫探しクラスの依頼が一つも来ない、なんてことがあれば話は別だが。

「ふーん」

「何だよ……」

急にニヤニヤし始めた琴音にちょっと引きつつ俺は言葉を続けた。

「そんなに俺に留年して欲しいのか？」

「まさか。逆よ逆。留年なんてしたら許さないから。まあ、明日楽しみにしてなさい」

「？」

何だろう。またよくないことを考え付いたようだ。

「それより、あんた昼休み、どうだったのよ」

「どうって、何が」

「久遠と話してたんでしょ？ どうだったの？」

どうやらこれが聞きたいがためだけに、俺に着いて来たらしい。単に雑談したいからかもしれないが。

「チームに入るってさ」

「え？ ホントに？ やったじゃない！」

よっぽど嬉しいのか、琴音はその場でぴょんぴょん飛び跳ね始めた。小学生か。見た目小学生みたいだけど。

「こら暴れるな。子供か」

「いいじゃない、あんたも喜びなさい。それに、子供じゃない」

飛び跳ねたせいで、久遠ほどではないとはいえ長い髪が浮き上がり、甘い匂いが漂ってくる。

「ていうか、あんまり寄ってくんない」

「何だよ」

「周りを見ても」

言って、ちょいちょいと軽く周囲を指差す。

「？」

俺の言葉に、琴音は周りを見渡した。

ここ、青海唯一の公園は、海が近く、新しくて綺麗なせいかデースポットとしてそこそこ有名な場所だ。

つまり、まあ、ちよつと濃厚にくつついてるやつらが少なくない。

「……」

近くのベンチに、大学生らしきカップルが絡み合っているのを見て、琴音は顔を真っ赤にして声もなく硬直してしまった。

爆ぜろ。誰とは言わん。あのカップル、今すぐ爆発しろ。

「あ……あう」

「そういうわけだ。こんなところで一緒にいるの見られたら、付き合ってるなんて噂されるぞ」

「あ、あたしは……れ、恋愛なんて……」

「どうでもいいんだろ。なら帰るか、離れるかしろ」

俺がそう言い放つと、琴音は顔を赤くしたまま少し離れた。

「あれ？松永？」

「……遠山」

急に俺の名前を呼ぶ、聞き覚えのある声があった。声のした方を見ると遠山と、何か背の低いピンク色の髪の少女がいた。両方某ハンバーガーショップの紙袋を手を持っている。

「何してるんだ？」

少し驚きつつも俺がそう聞くと、

「猫探し」

「猫探し？」

俺達と同じだ。まさか同じ猫じゃないだろうな。

「まあいいや。その子は？」

「人に名前聞くときは、自分から名乗りなさいよね」

俺の言葉につっけんどんに少女が答えた。声高っ！すげえアニメ声だ。

「わ、悪い。俺は松永秋空。遠山の知り合いだ。お前は……？」

「神崎アリアよ」

そっけない。そっけなく答えただけなのに、俺にはなぜかものすごく棘のある言い方に感じられた。

……にしても『神崎アリア』。なるほど、こいつが。遠山と何かしら関わり合いがあるのはわかってたけど、まさか一緒に猫探しするくらい仲がいいとは。今度遠山に神崎の情報を教えてもらおう。

「ああ、そうだ遠山」

ふと思いついた俺は鞆からファイルを取り出すと、

「聞きたいんだが、こんな猫見なかったか？」

猫の写真を見せて言った。

真っ黒な猫だ。鈴は付けているが、何というか、どこにでもいそうな猫というのが正直な感想。遠山が見ていても忘れていそうである。

「……見てないな。一応、俺のも」

遠山も写真を差し出してきたが、

「……いや、見てない」

遠山と二人揃って肩を落としてため息をついた。

「じゃあ、俺はこっち探すわ。お前の見つけたら連絡するよ」

俺はそう言って、遠山に背を向けて軽く手を挙げた。

「ああ。俺も見つけたら連絡する」

遠山の言葉を背で受けながら、俺は端の方に向かって歩き始めた。

夕方。ようやく迷子の猫を見つけた。

場所はさっき遠山と会った広場。こういうのは案外あっさりと見つかるものだ。

そして、後はこれを捕まえれば解決……

「ふふ。妾に撫でられて嬉しいか？愛いやつめ」

そう、解決の……はず……

「……どうする？」

「どうするって……私に聞かないでよ」

猫は、広場にいた。

厳密には、ベンチに座っている、小学生くらいの少女の腕の中にいた。

金髪。淡い水色の目。フランス人形のような外見の、明らかに外人の少女は、嬉しそうに笑って黒猫と戯れている。猫の抜け毛が付着して、白いワンピースがところどころ黒くなっていた。

日本語ペラペラなどところを見るとハーフかクォーターかもしれないが……そんなことはどうでもいい。今問題なのは、どうやってこの少女から猫を取り返すかだ。

「ふふっ。お主、どこから来たのだ？」

「みゃー」

「ふふ。そうかそうか」

……こんな楽しそうにしてる少女に声をかけて、「猫返して下さい」か。憂鬱だけど、やるしかないよな。

「あ、あのー……」

「それにしてもお主、温かいな。妾が冷え性なのもあるが……」
気づいてもらえなかった……

「あ、あのっ！」

俺は物怖じせずはつきりと言う。無視されるのは面倒だ。

「うにゅ……この温かさは中々に心地よいが、いささか眠くなってきた」

駄目だ。全く気づいてない。

しかも何か、うつらうつら舟を漕ぎ始めているようだ。

「あの！」

俺は少女の肩に軽く手を添えて、なるべく耳元で言った。

「うわっ！ な、何じゃ！ いきなり！」

少女は閉じかけていた目を見開くと、飛び上がって身を引いた。

「そろそろその口調に激しくツツコみたいけどその前に……その猫、飼い猫なんだ。返してもらえないか？」

そう言って、少女の様子をうかがう。

少女はもう落ち着いて、青い目でじっと俺の目を見つめていた。その目は驚いているようにも、俺を値踏みしているようにも見える。偏見かもしれないが、しっかりと目を合わせてくるのはやはり外人だからか？……いや、それ偏見だな。久遠も結構しっかり目合わせてきたし。

「ふむ。この猫、お主の飼い猫なのか？」

「いや、違う。でもその猫の飼い主に頼まれて来たんだ。だから、返してくれないかな」

俺は中腰になって、少女と目線を合わせて言った。

「……わかった。お主に返そう。済まなかったな」

「あ、ああ。ありがとう」

意外だった。あっさり信じてもらえるとは。それにてっきり駄々をこねるものだと思っていたのだが。聞き分けのいい素直な子のようだ。

「飼い主によりしく伝えてくれ」

そう言って、少女は名残惜しそうに少しだけ猫の頭を撫でて、俺に手渡した。少女の手が小さいせいか、猫がやたらと大きく見える。

「わかった。確かに伝えておく」

答えてから、俺は受け取った。

これで任務完了だ。さあ、帰ろう。

「……ぐすつ、うう……」

……帰れない。

「あ、あれ！？どうしたんだ？」

少女はサファイアのような瞳に涙を溜めて、猫を見つめて震えていた。

「は、離れていても……お、お主は……ぐすつ、お主は妾の……友達。ずっと、わ、忘れ……うう……うわああ！」

「ええっ！？ちょ、ちよつと落ち着けて」

猫と離ればなれになるのがそんなに悲しかったのか、少女は泣き出してしまった。全然素直な子なんかじゃない。さっきのクールな

のは意地張ってただけのようだ。

猫を持って両手が塞がった状態でオロオロする俺を、琴音はため息をついて見ているだけだ。

「こ、琴音、何とかしてくれ！」

「はあ。猫は私が持つとくから、自分で何とかしなさい」

「わかった！」

俺は琴音に猫を渡すと、少女に向き直った。

「ちょ、とりあえず泣き止んでくれないか。ほら、これで涙拭け」
そう言ってハンカチを差し出すも、

「嫌だ！が、がなじいどぎには……ぐすつ、い、一杯泣くのだ！」

「わかった。もう思う存分泣いていいからとりあえず涙拭け」

そんなに悲しいのか。すでにすごいことになってる顔を少し拭いてから、俺は少女にハンカチを手渡した。

「う、うわあああん！」

「落ち着いたか？」

少女は頷いて、

「み、見苦しいところを見せてしまったな。すまぬ」

一応、少女はもう落ち着いていた。まだ泣き止んだばかりで、目が腫れているのが痛々しいが。

「いやいいんだけど……そんなに悲しかったのか？」

またも頷く少女。

「わ、妾の友達だからな。でももう大丈夫だ。礼を言うぞ」

少女はぐしょぐしょになったハンカチを、俺に返してくれた。

……重い。ただのハンカチなのに、受け取った瞬間結構ずっしりきた。

「どういたしまして」

ハンカチをポケットにしまいながら、一応そう言っておく。

「それにしても『友達』って、変わってるわね」

琴音がようやく会話に加わってきてくれた。

「？ なにゆえだ？」

「だって猫でしょう？」

「猫だ。でも妾の友なのだ」

少女は微笑みながら言った。

「ふーん。やっぱり変わってるわね」

「それより、お前、一人なのか？お母さんは？」

「……妾に母はいない。ここにも一人で来た」

少女の微笑みと瞳が少し憂いを帯びたものになった……気がした。

「だから、お主らが妾のことを心配する必要もない」

「……そうか」

心配するに決まってるだろう。

さっきの号泣、それにこの表情。何かあるに決まってる。

「なあ、猫と離れるのは……嫌か？」

「ちよっ、何言ってるの？」

「いいから！……で、どうなんだ？」

俺だってこの猫は当然依頼主に返す。そのことではなく……

「……嫌」

少女はポツリと言った。

「そうか」

「でもいつかは離れねばならぬときが来る。それが少し、早まっただけだ。だから、辛くはない」

「……」

思わず目を丸めて少女を見直した。

「驚いたな。こんな大人びた小学生がいるとは。何年だ？」

「……妾は小学生ではない」

「え？も、もしかして中学生？わ、悪い！」

「……もう良い」

少女はなぜかすごく疲れた顔をしていた。

「まあいいや。お前、この公園にはよく来るのか？」

「そこそこじゃな」

「じゃあ、俺は毎日来る」

「な、なにゆえ？」

少女は驚いたで顔見上げてきた。

「お前と話したいから。友達になりたいから」

「妾と？」

「嫌か？」

そう聞くと少女はうつむいて、

「い、嫌じゃ」

「そうか。でも俺は毎日来る。現存する全てのクーデレキャラに誓つてもいい」

「何それ……」

呆れたようにそう言う琴音を無視して、俺は言葉を続けた。

「今日まで猫が話し相手で友達だったんなら、代わりに今日から俺と友達になって欲しい」

俺はうつむいたまま黙る少女の頭に手を置いて、ぐしゃぐしゃとかき回した。

「や、やめぬか」

「まあ、俺の言葉を覚えてくれると嬉しい。じゃあな」

そう言つて少女の頭から手を離すと、俺は公園を後にした。

「どうしてあんなこと言ったの？」

「……言いたくねー」

「？ 何だよ」

帰り道。小首を傾げる琴音に、俺は顔を背けて言った。

「俺、あの子に対してすげー失礼な推測してるから。っていうか推測というより勘だし」

言つて、あの子の名前を聞き忘れたことを思い出した。

「何よ？ 言いなさいよー」

「……」

だんまりを決め込む。五分くらい会話なく歩いていたところに、

ふいに琴音が話しかけてきた。

「あの子……寂しそだったね」

「……ああ」

道端にいた猫を友達として扱い、母親がいないようなことも言っていた。それに、あの目。

あの水色の目は恐ろしいくらいに澄んでいて、でもなぜか寂しそうで、とても印象的だった。

「中学生が放課後に公園来る理由って考えたときに、猫に会いに来たんじゃないかって。それに母親の話したときのあの反応。多分……」

「もういいわよ。確かにあんたの推測、いや勘はあの子には言わない方がいいわね」

「そんなことわかってる。当たり前だろ？……じゃあ、俺は学校戻って依頼の報告してから帰るから」

「私も行く」

「ええ！？いいけど……」

結局、捕獲した猫は猫違いだった。確かに、よく見たら鈴の形が微妙に違う。

単位と報酬はもらえなかったが、もう少しこの猫があの子といられると知って、喜んでしまったのは秘密だ。

猫探しと少女（後書き）

今回は変なところ多いかも・・・また後日直します。

速さが足りない(前書き)

今回も変なところ多そう……

速さが足りない

「秋空。今日昼ご飯食べ終わったら、探偵科の前にいなさい」

「いいけど、何だよ」

「いいから来なさい。来なかったら……死刑だから！」

「おお。今のはちょっと似てたな」

——そんなやり取りが今朝、俺と琴音の間で行われていた。行われていたはずだった。

そして、今聞こえたのは五時間目開始のチャイムだ。昼休み終了のお知らせでもある。

「琴音……何やってんだ……」

晴れて五時間目をサボってしまった俺は、探偵科の入り口前で思わず額を押さえてうめいた。

いや、全く時間確認してなかった俺も悪いけどさ……

「てかあいつ……俺にここで待っとけとは言ったけど、自分が来るとは一言も言わなかったような……」

もしかして俺、琴音に騙されてる？

そこまで考えたところで、急に待っているのがバカらしくなってきた。

「……戻ろう」

そう呟いて、俺は探偵科に背を向けた。階段を降りながらため息をつく。あーあ、五時間目エ……六時間目も休んでしまおうか。

「だーれだっ！」

声とともに視界が黒に染まり、背中に何か重みがかかった。

「これはこれは、同じクラスの鈴木さん」

「予想外すぎてリアクションに困るんだけど……」

目を覆っている手をどけて、探偵科の方に向き直る。

「遅い。遅すぎる」

階段の数段上にいた琴音に、俺は言い放った。

「速さが足りない」

「ごめんごめん。手続きに時間かかっちゃってさ」

「手続き？」

何の？まさか任務の？

「じゃあ、行きましょ」

「行くってどこに？」

「いいからあんたは着いてきなさい。早く来ないと置いてくわよ」
そう言って、琴音はさっさと歩いて行く。

「え？おい、待ってっ」

俺も慌てて、その小さな背中を追いかけた。

「おい琴音。俺達今どこに向かってるんだ？」

東京の街並みを琴音と並んで歩く。目的地はわからないが、俺は琴音に着いていった。

「ゲーセンよ」

「ゲーセン！？授業サボってゲーセンって……立派な不良じゃねえか」

まあ何かの依頼なんだろうけど。さっき手続きがどうか言ってたし。

「で？どんな依頼なんだ？」

「何だ。ちゃんとわかってるじゃない。そう、今からあんたにある事件を解決してもらうわ」

「……え？俺？」

何でさ。

「他に誰がいるのよ」

「いや、てっきりお前が依頼を受けるのかと」

「何で今年分の単位取ってる私が依頼受けなきゃいけないのよ」
最ものである。

「まあそうだけど……何で俺に一言も断りなくそんなことするんだ

よ……俺受けたくないんだけど」

「0・5単位で報酬五万」

「やだ。絶対何か変な依頼だ」

だって俺達今ゲーセン向かってるんだぞ？ゲーセンで事件……盗、置き引きくらいしか思いつかん。そして、そんな事件は武偵には回ってこない。0・5単位ももらえたりもしない。

「まあそう言わず話くらいは聞きなさいよ。今回あんたにやっってもらう事件は殺人事件よ」

「何か今から俺が人殺すみたいな言い方だな」

殺人か。その手の関連の依頼は受けたことないな。

「二週間前、今向かってるゲーセンで殺人事件があったわ。被害者は女性。真田裕香。死因は……」

「おい待て。そんな詳細な情報、こんな道端で話すのはまずいだろ」
一応機密情報だろ。誰が聞いてるかもわからないのに。

「誰も聞いてないと思うけど……まあいいわ。今日は昼食べてなかったから、何か奢ってよ。どこかの店で話しましょ」

「ええー？まあとりあえず奢ってやるけど、俺が依頼受けなかったら金返せよ」

「わかった。じゃあ早く行きましょ」

「待て、走るな」

そんなに走れるんなら飯いらねーだろ。

結局、そのゲーセンの近くのデパート内にある業務用バーガーの店で食べることに決まった。琴音が勝手に決めたんだけど。

隅っこのテーブルについた俺達は、早速話を再開した。

「どこまで話したっけ？」

琴音の問いに、俺は顎を押さえて少し記憶をたどる。

「……二週間前ゲーセンで殺人事件があったこと。被害者は……誰だっけ？」

さ、さな……出てこない。

「ああ、思い出した。真田裕香。二十歳の大学生よ。死因は、後頭部を鈍器で一発殴られて即死よ」

「……後で『ほぼ』即死とか言い直されそうな死因だな。ていうかちよつと待て。メモ取る」

そうは言っても手ぶらで来たからな……紙も筆記用具もない。

「悪い。何か書くものない？」

「はいはい」

琴音は俺が手ぶらなのを予想していたらしく、シャーペンとノートの切れ端一ページ分を渡してきた。

「ありがとう」

「じゃあ説明するわよ。ええと、被害者は店内二階に置かれたダンボール箱の中から発見されたわ。発見したのは、ゲーセンに来ていた一般人」

「ダンボール箱の中って、人入るのか？」

言ってから、某蛇がダンボールに入って『で、美味しいのか？』と無線に話しかける光景が脳裏をよぎった。

「被害者の身長は百四十二。私と同じくらいよ。実験してみたけど、余裕でいけるわね」

「実験したのか……」

想像しようとして……なぜか虚しさを感じて止めた。

「被害者の首筋には二点の黒点があったわ」

「スタンガンか。腕時計は？」

「付けてなかった」

まあ、ですよね。

「てか、わざわざメモ取ってるんなら質問は後でまとめてしなさい。

……で、遺体の発見場所は二階のL.O.Oの筐体前だったんだけど、二階のトイレから被害者の携帯が発見されたわ」

「へえ」

これはいいヒントだ。

「じゃあ次。容疑者の説明ね」

「え？容疑者いるの？」

じゃあ俺何しに來たのさ。

しかも被害者の説明今ので終わり？

「言ってなかったかしら？容疑者は元ゲーセン店員の前原拓郎。今は留置所にいるわ。容疑がかかった一番の理由は、殺害に使用したと思われるダンベルが容疑者の私物だから。指紋は彼のものしか付いてなかった。ダンベルは被害者の入ったダンボール箱の中から見つかったわ」

「……なるほど」

「ん、じゃあ質問どうぞ」

「ええっ！？もう終わり？早くね？」

正直、全くと言ってもいいほど何もわからなかったぞ。

「まだまだ説明することあるけど、話してたらキリないし、現場で話した方が効率いいし、てか説明するの飽きたし。あ、結局この依頼受けるの？」

「あー、わかった受けるよ」

下手に断ると後がめんどくさそうだ。

「やった！」

目をぎゅっとつぶってガッツポーズする琴音を見ていたら力が抜けて、何かもう色々とうでもよくなってきた……

「……人、いねーな」

「まだ平日の昼間だし、つい最近殺人があったゲーセンだしね」

どこからか閑古鳥の鳴き声が聞こえてきそうなほど、ゲーセンには人っ子一人いなかった。

「てか、ここかよ。遠山とよく来るところだ」

「そうなの？」

「最近来てなかったから殺人があったなんて知らなかったけどな。」

L〇〇ワンクレ百円排出あり、戦〇大戦五百円入れて三クレサービス。プライズや音ゲーも中々良心設定だ。ただ、ACTCGアーケードに關し

てはレア抜きをしているという噂が後を絶たない」

それでも、安さ目当てでプレイに来る人は多い。主に俺や遠山のような学生が。

「……ん？　そういえば、事件があった二週間前って、ちょうどL O Oのバージョンアップあった頃だよな？」

「変なところに気づくわねー。まあ、そうよ。事件の日はバージョンアップの前日。結構大がかりな作業があって、当日はL O Oはプレイ出来なかったそうよ。ちなみに、容疑者の前原拓郎はバージョンアップの作業を担当していたわ」

「ほー」

「それと、遺体が入っていたダンボールは、元々新排出のピロー袋の箱がぎっしり入っていたらしいわよ」

「……おいしい。マジかよ」

ピロー袋とは、要するにカードの入ったパックのことだ。A C T C Gは他のカードゲームと違いカードパックを購入するのではなく、ゲームプレイ終了時に筐体から排出される仕組みになっている。

「とりあえず、二階に上がりましょ。それから店員に話聞いて、留置所行って、後はあんたの推理次第」

「そうだな、上がるか」

出入り口から見て左に見える階段を上って二階に上がる。

二階は一階ほど過疎なわけではなかった。それでもちらほら程度だが。

階段上ってすぐ右手がメダルゲームコーナーと戦○の絆、左手がビデオゲームコーナーになっている。犯行があったのは左手のビデオゲーム。具体的な配置は手前から順番に戦○大戦、Q○A、その右にブレイ○ルー、Q○Aの奥に○拳、L O O、三国○大戦、その右にエア・○ースト、そしてそのさらに右の一角に麻雀ゲームが並んでいる。

件のトイレは三国○大戦のすぐ後ろにある。L O Oの筐体との距

離は三国〇との筐体一個分だ。

「トイレで殺害して、ダンボールに入れて、L〇〇筐体前まで持ってきて、外に持ち出すタイミングをうかがってた。自然っちゃ自然な流れよね」

「……嫌に計画的だな」

琴音とL〇〇の前で言葉を交わす。

確かにトイレとL〇〇は結構近い。周りのゲームも過疎ゲーが多い。十分に可能な犯行だろう。

「一応聞くんが、ここ監視カメラとかないのか？」

「あったらとづくにこんな事件解決してるわよ。この不景気じゃ、カメラ付ける余裕なんてなんでしょ」

だよなーと、俺はがっくりと肩を落として脱力した。

「仕方ない。横着せずに、店員に一人一人話を聞くんか」

十分後

「どうぞ」

そう言って、店員が俺と琴音の前にインスタントコーヒーを置いた。

「ど、どうも」

俺達はスタッフルームにいた。もっと狭そうなイメージがあったのだが、横長の机と椅子、それにロッカーと、何というか運動部の部室のような場所だ。

なぜここにいいのかというと、二階で見回りをしていた店員に武偵憲章を見せながら話しかけると、どうやら話は事前に聞いていたらしく、ここの店長と話をするためスタッフルームに通してもらったからだ。

「えっと、店長、なんですよね？」

俺は真正面にどっかりと座って構えている、髭面で妙に威圧感のある中年の男に話しかけた。

「ああ。今日は例の事件の捜査に來たと伺っている」

(声にも妙な威圧感がある……正直怖い)

「は、はい。では早速、話を聞かせてもらえますか？事件の日のことを詳しく、不審に思ったことは何でも言ってください」

「その話は、もう警察に話したが」

あまりよろしくない雰囲気だ。

「我々は、武偵です。警察ではない」

(まあ、こういうのは本来武偵の仕事じゃないけどな)

結局詳しい依頼内容は知らないが、俺が何をすればいいのかおおよそ見当は付く。逆に言えば、今俺に出来ることはそれくらいしかない。そして、それは武偵の仕事にしてはかなり変わっている。

すなわち容疑者の決定的な証拠を見つけるか、真犯人を見つけるか。

まあどうせ真犯人なんていないだろうから、証拠を洗い出せばいい。そのために、この店長からは事件当日の容疑者の行動を残らず吐いてもらう。

「……あの、すいません。話してください。お願いします」

無言の睨みの圧力に負けて、俺は思わず頭を下げた。怖い！やっぱりこの人超怖い！『吐いてもらう』とか生意気思ってますいません！

「……はあ。わかった。話す。話すから、頼むから涙目で見るのはやめろ」

言われてゴシゴシと目を擦る。

「とは言っても、あの日はあの事件以外には特に変わったことはなかった。何を話せばいいのやら」

「じゃあ、よう……前原さんは事件当日、何をしていましたか？」

「前原、ねえ……彼はあの日、あるゲームのバージョンアップを担当していた」

「L O O、ですね」

「ああ、知ってるのか」

店長は少し驚いた顔をした。

「そう。それで午前中はずっと二階で作業していたらしい」

「『らしい』？ 実際に見たわけではないんですか？」

「私は一階で仕事してましたから」

そう言って、店長はコーヒーを一口すすった。

「具体的には何を？」

「プライズゲームの設定調整を。後は雑用とか」

俺はコーヒーに砂糖とミルクを入れながら、俺は質問を続けた。

「ここ、スタッフルームは一階だ。彼はここに来なかったんですか？」

「いや、それはないだろう。そこらへんは、あの日二階にいた店員の中井の方が詳しいはずだ」

「なるほど。後で聞いてみます。ちなみに、ここの店員は全員で何人ですか？」

「私を入れて六人だ。みんな仕事があるから一気に呼ぶことは出来ないから、順番にここに来るように言っている」

六人……紙一枚で足りるかな。

「ありがとうございます。では……」

一時間後

「お、終わった……」

机にうつ伏せに突っ伏しながら、俺は言葉を絞り出した。ようやく全店員に話を聞いた。流石に、六人に連続で同じような質問をしていくのは中々疲れる……

「お疲れ。ちょっと見せてくれる？」

そう言って琴音はノートの切れ端を手にとった。

「裏面に要点だけまとめておいた」

「ふーん」

相田……当日はずっと一階でプライズの設定をしていた。特に変わ

ったことはなかった。

中井……二階で見回りや台を拭いたり、掃除したり受付したりと雑用していた。容疑者はずっとバージョンアップの作業をしていたが、昼飯を食べに一度一階へ降りた。

浜田……一階でプライズ景品の宣伝をしていた。ずっとマイクで一階に響き渡るくらいの音量でしゃべっていた。

田中……一階で雑用。容疑者に『スタッフルームにあるダンボール箱を持ってきてくれ』と連絡を受け、二階に運んだ。このダンボールは、被害者が入っていた物。ガムテープでしっかり閉じられていたため、中に何が入っていたかは不明。重かったため、中に何か入ってはいたのは確実。

佐藤……休んでいていなかった。

八木……一階で雑用。昼時にスタッフルームに入る前原を目撃している。

- ・容疑者は、朝スタッフ用の服を着る際、全員と一度スタッフルームで顔を合わせている。
- ・事件発覚後、二階のトイレの携帯が見つかった場所で、大量のL O Oピローの箱が見つかっている。
- ・客がダンボールの中身を見て、叫び声を上げて、中井が通報した。その時、ダンボールにガムテープは付いていなかった。発見した客は外していない、元からガムテープなんてなかったと証言している。
- ・事件当日、ゲーセン店内で佐藤を見た者はいない。
- ・遺体の発見時刻は午後一時十四分。

「随分簡潔ね……」

「實際簡潔な事件だと思うが。容疑者が二階のトイレで被害者を殺害して、店員の田中に頼んでダンボールを持ってきてもらい、箱の中身と死体を入れ替えた。で、箱を持ち出す前に客に見つかった。自然で、疑うようなないと思うが」

「ホントにそう思ってる？」

「……微妙なところだ」

少なくとも、現状で前原拓郎が犯人だと断定することは出来ないだろう。

この証言だけだと、アリバイがあるのは大音量でずっとしゃべっていた浜田と、休んでいた佐藤くらいだ。やろうと思えば、その日前原がバージョンアップの作業を知っている者、つまり店員なら誰にだって出来る。

容疑者の指紋の付いたダンベルをあらかじめ用意しておけば、後はさっき俺が言った通りの流れだ。この状況じゃまず前原が疑われる。

強いて言うなら、ダンボールを運んだ田中は怪しい……か？

「ああ、今更言う必要もないかもしれないけど、依頼内容は『この事件を解決すること』になってるわ」

「予想通りか。ったく、真犯人でもいるのかねえ」

仮にしていると仮定して考えれば、そいつは間違いなく前原拓郎をはめようとしている。そして、結構大胆なやつだ。

状況から考えれば、犯行の流れは明らかだ。だが、そこから犯人をあぶりだす術が存在しない。

まるで挑発されているようだ。見つけられるのなら見つけてみろ、と。

「てか、お前探偵科のSランクだろ？ わからないのか？」

「これだけの情報じゃわからないし、わかっても秋空には言わない」「何でさ」

「この任務で、秋空の実力を計りたいからよ」

琴音はそう言って、一気に冷めたコーヒーを飲みほした。

「そういうのを明確に示すのが、武偵のランクじゃないのか？」

「ランクなんてあてにならないわよ。あんた、これまで地味な依頼ばかり受けてきたでしょ？それじゃDで当然よ。だから、あんたの本当の実力が知りたいの」

琴音は立ち上がると、スタッフルームの出入り口に向かって歩いて行った。

「おい。どこ行くんだ？」

「決まってるでしょ。留置所よ。容疑者と話。それとも、まだここでやり残したことある？」

「ある、けど、先に留置所の方がいいな」

先に前原の話を聞く。その後でまたここでやるべきことがある。「行くか。どこにあるんだ？」

「新宿」

結構めんどくさいところにあるな。ここからだともノレールか。

「わかった。行こう」

俺も立ち上がると、スタッフルームを出た。

速さが足りない（後書き）

中途半端ですが、今回はここまで。ゲーセンでバイトとかしたことないので、結構私の想像入ってます。

後L o o の v e r う p ですが、2 ↓ R e 2 くらいの規模のものです。

一番高いラーメン？（前書き）

ぶっちゃけ、この事件のパート知らないんですよ・・・
（え

一番高いラーメン？

ゲーセンを後にした俺達はそのまま新宿へ行き、新宿警察署へと向かった。ここに容疑者、前原拓郎がいるらしい。

事情を話し、面会室に通してもらうと、そこにはすでに透明な板一枚隔てた先に男がいた。容疑者の前原拓郎だ。

そして、こちら側向こう側に一人づつ男が立っている。監視員か。前原は少し憔悴した様子でこちらを見ていた。恐らく、度重なる警察の尋問と、裁判のせいだろう。琴音の持っていた資料によると大学生らしいが、今の彼は春の風物詩でもある疲れ切ったサラリーマンにしか見えない。

前原と向き合うように設置された椅子に腰掛けると、こちら側の男が口を開いた。

「面会時間は十分です」

「あ、あの、あなた達は一体……」

おずおずといった風に、前原が切り出した。

「時間がない。手短に話しましょう。まず、私は武偵です。依頼を受け、この事件を解決しに来た。出来れば、今から私がする質問に正直に、正確に答えて頂けると嬉しい」

「……あなたも、私を疑っているんですか？」

前原はそう言っとうつむいた。

『あなたも』か。警察の取り調べの様子が目に浮かぶようだ。

「そうですね。少なくともあなたは怪しい。今私の中では一番怪しいです。でもそれは、同時に他の店員も怪しいことを意味します」
多分。

「……？ どういうことですか？」

「この犯行は、あなたが事件当日にバージョンアップをすることを知っていた者、つまり店員なら誰でも出来ます。あなたのダンベルさえあればの話ですが。そこで聞きたいのですが、犯行に使用さ

れたと思われる、あなたの私物のダンベル。あれはどこで、どういう方法で手に入れ、どう管理していたのか。教えてもらえますか？」
久々にこんなにしゃべったな、とどうでもいいことを思いながら、俺はダンベルの写真を見せた。

「あれは確か……ゲーセンの隣にデパートあるじゃないですか。あそこで買った物です。スタッフルームのロッカーに入れて管理していました」

「……マジですか」

デパートで同じ物を買うにしろ、何とかしてロッカーをこじ開けるにせよ、簡単に偽装出来るじゃないか……

「では、次。犯行の際使用したと思われるスタンガン。心当たりはありますか？」

「スタンガンって私、触れたことすらないんですが……」

「ふむ。そうですか」

ちなみに俺も触ったことがない。
にしてもあのスタンガン、何か引かかるんだよな。もやもやして気持ち悪い。

「なるほど。では、あなたは事件当日、L O Oのバージョンアップの作業をしていた。間違いありませんね？」

「ええ。そうです」

「あのゲーセン、レア抜きをしているという噂がありますが……どうなんですか？」

「……ええ。しています」

えらくあっさり認めたな。後で遠山に教えてやらないと。

「では、そのための作業が必要なはずだ。そのレア抜きをしていたのは、誰ですか？」

「私です」

「それはいつのことでしたか？また、どこでしていましたか？」

「事件があった日の、十二時頃。場所はスタッフルームです」

「その時周りに誰かいましたか？」

「いえ、私一人でした」

なるほど。確かにこの人怪しいな。当日はほとんど一人で作業、凶器は彼の私物、遺体が入っていたダンボールも彼が管理していた。だが流石にここまで来ると、怪しい要素が多すぎる。

「では、結構重要な質問ですが、答えたくなければそれでも構いません」

前原は頭上に？マークを浮かべて、不思議そうな様子だ。

「被害者、真田裕香とあなたの関係についてです」

「――！」

被害者の名前を出した瞬間、前原はピクリと肩を震わせた。明らかに動揺している。

前原はうつむいて頭を抱えた。聞きたくない。そんな前原の声が聞こえてきそうだ。

「被害者とあなたは同じ大学に通っていた。学部もサークルも違います。でもその様子だと、何かあるみたいですね」

「ゆう……真田さんは……」

「あー、もういいです。無理に言わなくても」

今間違はなく『裕香』って言いかけたな。

名前で呼ぶような仲。でも学部もサークルも違う。意味するところは一つだろう。まあ前原はレスリングサークルだから、サークル違うのは当然なのだが。

「面会時間、残り五分です」

男の言葉が沈黙を破る。え、速くね？ええい、グズグズしてはいられない。

「前原さん。あなたは店員の田中さんに頼んでダンボールを二階に運んでもらった。そうですね？」

「ええ。そうです」

俺の質問に顔を上げて前原は答えた。さっき以上に覇気のない面持ちだ。

「その時、レア抜き作業はすでに終わっていましたか？」

「ええ」

「レア抜きが終わった後、ピローはどうしましたか？」

「元々入っていた小箱に詰め直して、それをダンボールに入れました」

「それで、ガムテープで閉じた？」

前原は小さく頷いた。

「万が一、お客さんに開けられたら困るので。それでスタッフルームに置き忘れて、田中さんに運んでもらったんです」

「なるほど。作業を終えてスタッフルームを出たのと、田中さんに連絡したのは何時頃でしたか？また、連絡方法は？」

「確か……十二時半頃に出て、十分後くらいには無線で連絡したと思います」

遺体発見時刻は一時十四分、か。

よし、とりあえず聞きたいことは全部聞けたかな。

「わかりました。協力、感謝します」

そう言って席を立つ。

「え？あの……」

「もしかしたら、あなたは犯人ではないかもしれない。その可能性が見えました」

「そう、ですか」

この上ない朗報のはずなのに、依然、前原の顔は浮かないままだ。それも当然か。

「では、失礼します」

面会時間はまだ残っていたが、俺は前原に背を向けた。

「あの！」

出入り口の扉に手をかけると、後ろから前原の声がした。

「必ず、犯人を見つけてください。……お願いします」

「……わかってます」

交わした言葉は少なかった。それだけで充分だ。

「失礼しました」

その言葉を最後に、俺は留置所を後にした。

「何か、留置所と事件現場を行ったり来たりするのって、逆転○判みたいだな」

「そう？ 武偵ならよくあることだと思うけど」

帰りのモノレールで、俺と琴音は並んで座って話していた。

疲れたのか、琴音は少しくうつらうつらしている。

「で、どう？ 何かわかった？」

「ああ。少なくとも、犯人は二人まで絞り込めた」

メモ用紙を見ながら俺は言った。やはり、こいつは怪しい。仮に犯人が前原じゃないとしたら、多分こいつだ。

「私も同じ。てことは、今から戻って調べ《・》る《・》のね？」

「ああ。地味な作業になるな」

「私もちよつとは手伝ってあげるわよ」

大きくあくびを手で押さえながら琴音が言った。

「悪い。退屈だったろ」

「くあ……ホントよ。サクサク話進め過ぎで、私全く入り込めなかったわよ」

「まあ、こっからは琴音が主役だ。任せたからな」

「はいはい。任せました」

結局、何だかんだで琴音も協力してくれることになった。

「でもまあ、多分前原じゃないでしょ」

「何でわかるんだよ」

「女の勘」

「全くあてにならないな……」

厳密には女の勘はあてになるが、琴音の場合は例外という意味だ。でも、俺は前原が人を殺すようなやつには見えなかった。友達か、想い人かはわからないが、少なくとも被害者の死に悲しんでいる。その心には嘘偽りない……ような気がした。

「まあなく……」

車内に響き渡る駅到着のアナウンスが、会話の終わりを告げた。
——しかし……何か忘れてるような……何だっけ。

この懸念を、俺は二時間ほどたってから思い出し、後悔することになる。

「悪い！本当にすまなかった！！」

「……」

午後八時。俺は昨日の公園にいた。ゲーセンで琴音と別れてから全力疾走して来たので、少し息切れしていて苦しい。

真っ暗闇の中街灯だけがきらめいている。

そして俺の前には頬を膨らませた昨日の女の子がいた。

「すまない！この通りだ！」

手を合わせて上体を四十五度傾ける。

「……妾を待たせるとは。お主、何様のつもりだ？」

「すいません！」

完全に忘れてた……今は心の底からすまないと思っている。

「妾は五時頃からここにおったのだ。三時間待たされたのだぞ？」

「す、すいません……本当に反省してます」

「確か『友達になりたいから』などと申しておったな？お主は友達を三時間も待たせるのか？」

「……すいません」

「いやそんなに謝られても困るのだが？まあ？妾は怒ってないのだぞ？本当に。けど偉そうなこと言っときながら、これではいささか信頼に欠けるというか？」

「……すいません」

「いやだから謝られても時間は戻ってこないし？」

ヤバい。相当怒ってるぞ、これは。キャラと口調が崩れるくらいには。

「け、けど、来てくれたんだな。俺と友達になるの嫌なんて言って

たのに」

少々強引に話題を変えてみた。このままでは埒があかないと思ったからだ。

「そ、それは……あれだ。た、たまたま、この近くに用事があったから……」

「でも待っててくれたんだよな？」

そう言うと、少女は赤面してそっぽを向いた。

「そうだ！晩飯まだか？」

「え？あ、ああ、夕餉はまだじゃ」

「じゃあ、ラーメン食いに行こう！もちろん俺の奢りだ」

これくらいで待たせた罪が消えるとは思わないが、せめてもの……というやつだ。

「ら、らーめん？」

「ああ、駄目か？」

「い、いや、構わんが……」

「じゃあ行こう」

そう言って少女の手をつかむ。

「――！！？お、お主、て、て、手……」

「ん？ああ、悪い。はぐれたらまずいと思ってな」

「こ、子供扱いするな！」

少々は勢いよく手を振って俺の手を離すと、ズンズンと先に歩き始めた。

「おい、そっち逆だぞ」

「……お、お主がさっさと歩かないからだ」

「らっしやいませーっ！カウンターまでどうぞ！」

「こ、ここが『らーめんや』か……」

キョロキョロと店内をせわしなく見ながら、少女は舌足らずな声で言った。

「来たことないのか？」

「ない」

「……もしかして、ラーメン食ったことは？」

「ない」

なんてこったい。

「まあ、不味いもんじゃねえよ」

「さ、左様か」

まだ店の雰囲気慣れないのか、若干そわそわしながら少女はカウンスラー席に着いた。

「ご注文お決まりでしたらどうぞー！」

若い店員が注文を尋ねてきた。

「えーと、じゃあラーメン一つと、この子には一番……」

——一番高いのを。

そう言っただけで無駄な甲斐性を見せようとした俺だが、突如言いようもない悪寒に襲われて口が止まった。な、何だ？ 今背中がぞわあつて……

「すいません。やっぱりラーメン二つで。あ、後餃子一人前」

思わず言い直していた。

「はいよ。ラーメン二つね。注文入りまーす！ ラーメン二人前餃子一人前！」

（ホントに何だったんだ……何か、俺はとんでもないことをしようとしてたんじゃ……）

「どうかしたのか？ 何やら顔色が悪いように見えるが」

「何でもない。気のせいだろ」

水を一杯煽る。今日はしっかり仕事したからか、はたまたさっきの悪寒が原因なのか、水の冷たさが喉に妙に心地よい。

「てか、連れて来という何だが、こんな時間に出歩いててもいいのか？」

「構わぬ。ほーにんしゅぎというやつだ」

「……そうか。ああ、そうだ。昨日の猫、どうやら探してたのと違ってたみたいでな。もしペットオーケーなら、飼い主が見つかるまで

お前が預かっててくれないか？」

「そ、それは真か!？」

「ああ。嘘ついてどうする」

目をキラキラさせて聞いてくる少女に、俺は苦笑しながら答えた。
何ていうか、可愛いな、こいつ。頭を撫でたくなる。

「うひゃあっ! な、何をするっ!」

「ああ、悪い悪い」

と思ったら、無意識に少女の頭を撫でていた。サラサラした髪の毛を名残惜しみながら、俺は少女の頭から手を離す。

「全くお主は……つくづく妾を子ども扱いしておって……」

「だから悪かったって」

「へい、ラーメンお待ち!」

今度は、いかにも『ラーメン屋のおっさん』といった風な男が俺と少女の前にラーメンを置いた。

「? これは?」

「嬢ちゃん可愛いからおまけだ」

にっしっしと笑いながら餃子の隣に置かれたそれは、

「……だしまき卵?」

「おうよ! 美味しいから兄ちゃんも食ってみな」

言っておっさんは奥へ引っ込んでしまった。

「……ラーメンにだしまき卵。いや、深く考えるべきではないか」

俺は割り箸を二本取ると少女に一本渡し、

「一応聞くが、箸の使い方はわかるか?」

「当たり前じゃ。日本にはそこそこ長くいるからの」

そう言って、少女は割り箸を割って、固まった。

「どうした? やっぱりわからないのか?」

「いや、そうではない。この……らーめん? であつたか? どうやって食すのだ?」

「……そういえばラーメン食べたことないんだったな」

とは言え、どう説明したらいいものやら。

「そうだな。ほれ」

俺は少女にスプーンを手渡した。

「とりあえずスープ飲んでみる」

「? ……美味しい」

ふむふむ。悪くない反応だ。

「後は周りの人みたいにな、箸で麺をすすって食べる感じだ」

「ほ、ほう」

「というわけで俺もいただきます」

手を合わせてスープを一口含む。うん！これは美味しい。これはいいスープだ。

さて、麺は……

ちゆる。

「うん。美味しいな」

隣からの視線を感じながら、俺は麺をすすった。美味しい。平凡な味と言えどそれまでかもしれないが。

「お、美味しい」

「おお、そうか。よかった」

どうやらラーメンの味は気に入ってもらえたようだ。ずずー。

しばらくそんな音だけで、互いに言葉を交わさずに黙々とラーメンを食べた。後、餃子とだしまき卵も。

「……ふう」

息を吐いて、今日のことを思い返す。

（犯人は……やつだ。間違いない。問題は、それを決定づける最後のピースが欠けていること。何とかして、それを埋めないと）
餃子を食べながら、俺は思考を続ける。

（……少々危険だが……いや、やる価値はあるか？うーむ）

「何を気難しい顔しておるのだ？」

「ん？ああ、ちょっとな」

知らずの内にくわえていた箸を離す。

ずるずる。

まとも沈黙。

気が付くと、器の中には汁しか残っていなかった。

「む。すまぬ。妾はまだ……」

「ああ、わかつてる。ゆっくり食べよ」

俺は水のおかわりを注ぐと、すぐに飲み干した。

「ふー。食った食った」

ラーメンを食い、外に出ると、夜風が涼しくて気持ちよかった。眠気を感じ始めていた身体が少し起きる。

「うむ。美味であった。礼を言うぞ」

少女も満足げな顔だ。よかった。これで少しは怒りも収まっただろう。

「もう九時か……どうする？お前がよければ家まで送っていくが」

「……いやいい。妾一人で帰れる」

「え？けど……」

こんな夜道を女の子が一人は危ない。ここは強引にでも着いていくべきだろうか。

「構わぬ。妾の家はここからでは遠いからな。着いてくるのは面倒だろう」

「いや、それなら尚更俺が送っていくよ」

「構わぬ」

少女はさつきよりもちよつとだけ強く、そう言い切った。

「……そうか。なあ、また明日も、公園に来てくれるか？」

「さあな。それは妾の気まぐれだ。ただ確かなのは、次からは一秒足りともお主を待ってやらぬということか」

「う……肝に銘じておくよ。俺はこっちだけど、お前は？」

「逆方向じゃな」

てことはここでさよならか。

「じゃあな。また明日」

「さらば……って、明日会うとは限らんだろうに……」

言いながら、少女の口元が少し緩んでいる。

よかった。本当は嬉しいのか。

「ま、楽しみにしとくよ。それじゃ」

俺はそう言って、一人歩みを進めた。

——また、名前聞くの忘れたな。

羽音と解決（前書き）

バスジャックまで日常パートが続くと言ったな。

あれは嘘だ。

羽音と解決

携帯を開き、電話帳から一件の連絡先の電話番号にカーソルを置く。

横井琴音。

名前の欄にはそう書かれている。昨日教えてもらったばかりの電話番号だ。俺は意を決すと、携帯のボタンを押した。

「も、もしもし？」

たったワンコールで、上擦った声の琴音が出た。速い。

「もしもし。今どこにいる？」

「が、学校よ」

「そうか。俺は今例の事件のゲーセンにいる。犯人がわかった」

「本当に？誰？」

「犯人は……佐藤だ。間違いない。証拠もつかんだ。今すぐ来てくれないか？」

「じゃ、じゃあ、ちょうど授業も終わったところだし、急いでそっち行こうかなー？」

琴音はそれだけ言うとう電話を切ったらしく、いきなり電話から音声が消えた。電源ボタンを押して携帯を閉じる。

これで仕込みは完璧。俺はじつとりと汗ばんだ手で、ホルスターから銃を引き抜いた。

mk22。消音性能に優れる暗殺用の銃……らしい。遠山に聞いた話そのままだが。まあ一年以上使い続けている俺の愛用の銃だ。実際に撃ったことほとんどないけど。

……そろそろ来る頃か。俺は安全装置を外し、息を潜めて外の様子进行うかがった。

……足音がする。来たな。

俺はそろりと外に出ると、閉まりかけているすぐ隣の扉に身を滑り込ませ、

「動くな」

その男の後頭部に銃を突きつけた。

しばらく沈黙が続く。お互いの息をつく音すら聞こえそうな静寂だった。やがて男が口を開いた。

「何の用すか」

「御用だ」

俺はトイレに誰もいないのを確認してから言葉を続けた。

「『大胆』。俺が犯人に、最も色濃く抱いた印象がそれだ。計画的な犯行とは裏腹に、自ら犯行の手口をさらすような真似をしているのは挑発しているのかと思ったほどだ」

だんまりを決め込む男、佐藤に、俺は一方的に話を続ける。

「だからこそ昨日の尋問のとき、お前が俺に盗聴器を付けたのに気づけたし、その盗聴器を通じてお前が犯人だと言ってやれば必ず何かしらの行動を起こすのは目に見えていた」

「……何適当なこと言ってるんすか。盗聴器なんて知りませんよ」

「その盗聴器にお前の指紋が付いてたとしても？」

鑑識科に回すまでもなく、指紋くらいなら自分で調べられる。昨日のうちに盗聴器の接触不良を装って調べておいた。

「まあそうですね。認めましょう。昨日付けましたよ。盗聴器」

「へえ。認めるのか」

やはりこういうところが大胆。

「でも、それだけで俺が犯人って決めつけるのは横暴っすよね？何か証拠でもあるんすか？」

「そうだな……まず、トイレに落ちてた携帯。あれ、明らかに不自然だよな？」

「どういうことすか」

「遺体は移動している。なのになぜ、携帯だけは事件現場に残ったままだったのか」

助けを求めていたのか、たまたま携帯を持っているときに襲われ

たのか、いずれにせよ本来あの場に残っているべきではないはずだ。
「被害者の真田さん、でしたっけ？その人が誰かに助けを求めて……
……ってのが一番自然じゃないっすか？」

「それなら、犯人は当然、被害者が携帯を手を持っていたのを知っていたことになる。しかし、それは明らかに矛盾している」

「どういふことすか」

「だって、仮に犯人が携帯を持っているのを知っていたら、その場に残すのは不自然だ。遺体を移動したのは、犯行現場を誤魔化そうとしたから。だとすると、携帯は必ず回収する」

「せめて見つかるならダンボールの中から。それが自然だ。」

「じゃあ、犯人は携帯のこと気づいてなかったんじゃないんすか？」

「それもあり得ない」

「何でそんなに断言出来るんすかね？」

「お前のポケットの中のそれが、答えだ」

……反応はない。

だが俺の言葉にその場の空気が、引き伸ばされた一本の糸のように張りつめるのを感じた。

「犯人は犯行の際にスタンガンを使用している。だから被害者がその時まだ携帯を持っていたとしたら、携帯は壊れていなければなら
ない」

「そうっすね」

「だが実際は壊れていない。つまり、スタンガンが使用された際、被害者は携帯に触れていなかったことになる」

「そうっすね」

やる気ないだろお前。

「つまり、もし犯人が携帯に気づいていなかったなんて状況はありえないってことだ。あるとすれば、そう、被害者が犯行のあったとき携帯を持っていなかった可能性」

「そうっすね」

いかん。今思わず引き金を引きかけた。

「だから俺は、あの携帯は、犯人が犯行現場を二重に誤魔化すために後でわざと置いた物だと考えた」

「へー。それが俺にどう関係してるんすか？」

「まだシラ切るつもりか？そもそもその犯行現場が違うんだ。俺は留置所に行った帰り、隣のデパートを調べた」

「……それがどうかしたんすか？」

「デパートの監視カメラにはあの日、彼女は映っていなかった」

「なら問題ないじゃないすか」

「いや、だが監視カメラのないある場所から、彼女の痕跡が見つかったんだ」

佐藤は黙っている。でもそろそろ動く頃合いか。

「デパート内にある業務用バーガーの店。あそこは必要最低限しか、監視カメラが設置されていない」

「……」

「だが店員や客に聞くと、多数の目撃証言が得られた。また、店のトイレの個室の壁から彼女の指紋が検出された」

指紋が残っていたのは奇跡に近いが。ちなみに壁のかなり高い部分に残っていた。

「けど、そんなの俺には関係ないっすよね？」

「んなわけないだろ。殺人現場はゲーセン店内じゃなかった。なら当日非番だった誰かさんが犯人なんじゃねーの？」

カチャリと音を立てて銃を強く押し付ける。

「お前は事前にスタッフルームの合鍵を作っておいて、先にスタッフ用の服を取っておいた。被害者を殺害し、それを大きな袋にでも入れて、スタッフを装って無人のときを見計らってスタッフルームに入った。で、死体を前原が管理していたダンボールに入れば、後はどう転んでも疑われるのは前原だ。そして」

「あー、もういいっすよ。認めます。俺が犯人っすよ」

佐藤はそう言うのと、両手を上げてこちらへと向き直った。

俺は銃を構え直し、じっと様子をうかがう。

「俺が、あの女を殺したっす」

「……認めるのか？」

おかしい。この落ち着き振り……まさかこれも想定内、なのか？

「あんた、中々鋭いっすね。驚きましたよ」

「……そうは見えないが」

「俺を犯人と見抜いたことじゃないっすよ？『挑発』のことっす」
何だと！？

「本当に、俺を挑発していたのか？」

「そうっすよ。……覚えるっすか？去年、ホテルに爆弾を仕掛けて、その上で姉を人質にとつて、あんたを脅迫したテログループ」

「――！その、残党？」

「そうっすね……微妙に違うっす」

佐藤は薄く笑みを浮かべながら、

「まあ、わざわざ説明してやる義理もないっすからね。あんたには

――
ここで死んでもらうっす」

佐藤がどこからともなく取り出したナイフを振るうのと、俺が引き金を引くのはほぼ同時だった。

「――っ！」

何とか回避。だが制服に切れ目が入っている。かなり危なかったらしい。

この狭い室内で、銃は危ない。

そう判断した俺は銃をホルスターにしまうと、右腰からナイフを取り出した。

「どうした？スタンガンは使わないのか？」

「洗面所の下にバケツ見えてるっすよ」

それはやつがスタンガンを使おうとしたときに水を被せてやろうと、俺が事前に用意したものだ。

「はっ！」

佐藤はナイフを逆手に持ち、左手で俺の胸ぐらをつかんできた。
「がっ……」

は、速い……全く反応出来ずに、俺は拳をモロに喰らっていた。
しかも鳩尾。綺麗に入った。

「去年のあの要求、覚えてますか？」

崩れ落ちる俺に、佐藤が問いかけてくる。

俺はそれに答えず、起き上りざまに佐藤に斬りかかった。

「……あんたホントに武偵っすか？弱すぎっす」
「ぐっ！」

俺の拳は佐藤の手に受け止められ、ぐると捻られた。
再び崩れる俺。カランとナイフが床に落ちる音がした。
首筋にナイフを添えて、佐藤は言った。

「去年の要求。あれを受け入れるんなら、命までは奪わないっす」

「……くく。ようやくか」

「？何がっすか？」

「聞こえないか？」

しーっと口元に人差し指を当てる。

「……サイレンの音。去年と同じっすか」

「俺の十八番だからな」

近づくようにして大きくなっているこの音は、パトカーのサイレンの音だ。

俺は琴音に電話する前に、警察に連絡を入れていた。佐藤に関するデータも送っており、警察は佐藤を容疑者として捕らえるべく動いてくれた。つくづく便利な連中だ。厄介でもあるが。

「もし俺が犯人じゃなかったらどうしたんすか」

呆れたような口調で言う佐藤だが、

「まあいいっす。どうせこうなるだろうなとは思ってたっすから」
「どうするんだ？逃げるのか？」

「そう言うあんたは捕まえないんすか？」

「どうも俺一人じゃ無理そうだし」

腹が痛くて立てないだけけどな。

「じゃあ、ありがたく逃げさせてもらうつすね」

そう言って、佐藤は悠々とトイレから出て行った。

「お疲れ」

痛む腹を押さえながらトイレから出て、一階に降りた俺を迎えたのは琴音だった。

「犯人、取り逃がしたよ」

「そう？　どうかしらね？」

琴音は言いながら悪戯っぽく笑う。

「どういうことだ？」

「捕まったわよ。犯人」

「え？　誰が捕まえたんだ？」

「ほら、あそこ」

そう言って琴音が指差した先には、

「……なるほど。後で礼を言っとかないとな」

琴音の指の先では、遠山と神崎が警察と話していた。

たまたまゲーセンに来てたのだろう。遠山の驚いている様子がここまで伝わってくる。

「ま、今回は素直に褒めといてあげるわ」

「あっそ。で、実際の俺のランクがどれくらいなのか、わかったのか？」

「この事件だけで判断するなら、Cランク」

「そんなもんか」

まあそれくらいが妥当なところか。

「はあ、じゃあ俺、青海の公園寄ってから帰るわ」

「え？　もう帰るの？」

「面倒な警察は遠山達に押し付けれたしな」

じゃあなーと手を振って、俺はゲーセンから出て行った。

羽音と解決（後書き）

何という荒い推理・・・

声と姉と、非日常への胎動（前書き）

そろそろ話を進展させたい・・・W
W

声と姉と、非日常への胎動

扉を開けて踏み込んだ先。そこは普段あるべき教室とはかけ離れた、名状しがたい空間だった。

床一面に広がる赤黒い液体、鼻を刺すような異臭、生温い空気が肌にまとわりつき、黒板には血文字で解読不能な言語が殴り書きされている。ポタ、ポタと何かが垂れる水音が妙にはっきり聞こえる気がした。

いつの間にか、教室の中央に影が立っていた。教室は薄暗いが、うっすらと見えた顔は緑色のカエルのようなのだ。

そのカエル人間は、こちらの存在に気付くと両手を広げて襲いかかってきた。

「……では、戦闘の前に、このような冒濫的で名状しがたい惨状を見てしまった探索者はS A Nチェックどうぞ」

話をさかのぼること一時間。俺と少女、そして琴音は青海の公園でベンチに座りのんびりと雑談をしていた。俺だけ別のベンチに座っていたが。

そんな折、少女の発した言葉が、事の発端となった。

「そういえば……秋空は昔妾と会ったことがあるじゃろう？」

「え？ そうなの？」

少女の言葉に驚いたように琴音が聞いてきた。

「いや、そんな記憶はないが……」

言いながら少女の顔を見つめる。……全く覚えがない。こんな綺麗な髪と目、見ていたら忘れることはないだろう。

「しかし、妾はお主の声を聞いたことがある」

「声？」

「うむ……しかし思い出せぬのだ。お主の声、一体どこで聞いたのか」

「声、ねえ。思い違いじゃないのか？」

「始めお主と会ったときから、何やら声に妙な違和感を感じておったのだ。間違いない」

でも、声の印象なんて曖昧だしな……変えようと思えばいくらでも変えられるし、電話や無線を仕切りにするだけで声の高低は豹変する。その変化した誰かの声が、たまたま俺と似ていたとしても何もおかしな話ではない。

「のう、お主、兄弟とかおらぬのか？」

「姉ならいるけど、俺とは似てもつかない声だぞ？もちろんいい意味で」

透き通るような綺麗な声だ。俺の声は……まあ、普通。高くはなく、どちらかと言えば低いだけの、特に特徴のない声。

「その姉上、今はどこにおるのだ？」

「？ 学校か、家かだと思うけど」

「なら、今からお主の家に行くというのはどうじゃ？」

少女は胸の前で軽く手を打って、『それだ』と言わんばかりに頷きながら、衝撃の提案をしてきた。

「いいわけないだろ。お前はもうちょっと警戒心というものを学んだ方がいい」

「なにゆえじゃ？」

少女は不思議そうな表情で首を傾げた。

何せ名前も知らない男に『ラーメン食いに行こう』と言われて、普通に着いて行ってしまふ女子中学生（自称）だ。俺が身も心も紳士だからいいものの、そこらへんの怪しいおっさんにも着いて行ったりしてそうで心配だ。

「とにかく、駄目ったら駄目だ」

「嫌じゃ嫌じゃ！」

「……何でそこまで来たがるんだ」

何なんだろう。琴音もそうだったが、俺の家は人を惹きつける何かがあるのだろうか。

「別に行ってもいいんじゃない？」

「え、えー!？」

琴音がまさかの裏切り発言。まあ、元々敵味方の関係ではなかったが。

「だって、猫の件があるでしょ？それ、今済ませちゃいませよ。秋空の家で。どう？」

「どう、と言われてもだな……」

腕を組んで考え込む。肯定か否定かで悩んでいるのではない。どうやって断ろうか、真剣に考える。

「そうだな……」

琴音は俺の言葉に被さるほど素早く、

「決まりね」

「え？何が？」

「あんた今『そうだな』って言ったじゃない。同意したじゃない。私は確かに聞いたわよ」

「はあ!？」

何だその小学生のような言い分は。

「別に同意したわけじゃ……」

「『そうだな』」

「!」

雑音混じりの俺の声が聞こえてきた。驚いて息をのむ。

俺が発した声ではない。誰かの声マネでもない。だがこれは……

「正真正銘、秋空の声ね」

あまりのことに、開いた口が塞がらない。

録音されていたのだ。俺に気づかれないように。してやられた。こいつが探偵科Sランクなのを完全に忘れていた。

「じゃあ行こっか」

「うむ。よくはわからんが、要はアキラの姉に会えるのだな」

琴音が少女の手を引いて一緒に立つ。

「ちょ、ちょっと待て。そんな発言撤回するに決まってるだろ」

「ふーん。じゃあ抱き枕カバーあげないけど、いいの？」

「なん……だど？」

俺は衝撃でその場から動けなかった。

「お前……何て卑怯な……」

琴音の意地の悪い笑みを見て、俺は悟ってしまった。あの、報酬に抱き枕カバーという一見オイシイ条件は、最初から俺を釣るための餌だったのだ。そして、そこまで気づいても、俺が抱き枕カバーを諦めることが出来ないことまで、あいつはわかっている。

嵌められた……何てことだ。そこまで計算されていたなんて……

「それじゃ、私達は先に行くから。秋空は猫の回収よろしく」
なぜかとても嬉しそうに去っていく琴音の背を、俺は無気力に見送ることしか出来なかった。

学校に預けていた黒猫を無事に受け取った。ダンボールに入っているため、ものすごくかさばる。

猫の入ったダンボールを抱えて探偵科の廊下を歩いていると、意外な人物に出くわした。

「久遠」

白い少女に話しかける。まだ帰っていなかったようだ。

「……何ですか？」

久遠を見るたびに思うのだが、こいつ、ただ立っているだけで異様に目立つ。浮世離れしている、とでも言うのだろうか。

「いや、まだ帰ってなかったんだなと思ってな。何してるんだ？」

「今は何も。さっきまでは白雪と模擬戦をしていました」

「白雪？」

確か遠山のところの通い妻も白雪という名前だったような。

「松永君？」

たまたま通りかかったのか、星伽が久遠の後ろから姿を現した。
噂をすれば、というやつか。
相変わらずすごい美人だ。

「呼んだ？」

「いや、呼んでない。久遠が今模擬戦してきたって言うから、その話してただけだ。というか、SSRは今合宿じゃないのか？」

「私はどうしてもやらなくちゃいけない生徒会の用事があって、今日から行くことになってるの」

「大変なんだな」

あんまり優等生過ぎるってのも、考えものだ。

「久遠さんと松永君って、お友達だったんだね」

ああ、と口元まで出かかった言葉を、すんでのところで飲み込む。
バカか俺は。また妙な噂に悩まされたいのか。星伽はわざわざそういうこと他人に広めるようなやつには見えないが、念には念を。
ここは否定しておくべきところだ。

「いや、ただのクラスメイトだ」

「え、そうなの？その割にはすごい仲良さそうだったけど」

星伽が驚いたように、さっきよりも少しだけ目を大きくした。

「……いいえ。私と彼は、ただのクラスメイトです」

おお。ナイスだ久遠。

「チームメイトでもあります」

それは余計だ。

「へー、そうなんだ。松永君、久遠ちゃんが強いからって、守られてばっかじゃダメだよ？」

「はは。そうだな。俺も頑張らないと。ところで、久遠ってどれくらい強いんだ？」

俺は前から少し気になっていたことを尋ねてみた。

「うーん。私がさっきの模擬戦で、何回やっても歯が立たなかったくらい？」

「……え？」

星伽って確か、めっちゃ強いんじゃない？

「……あれは、お互い能力使用禁止の縛りがあったからです。実戦ではああはならない」

それって、純粋な剣術勝負で星伽を圧倒したってことだよな？

久遠って実は、俺が思ってるよりも数段強いのか？

「あ、私生徒会の用事があるから、もう行くね」

「え、ああ。わかった。頑張ってな」

「うん、ありがと。それじゃあね」

星伽は手を振って、足早に去って行った。

「いや、お前強いんだな」

「……いいえ」

短く答えると、久遠は俺を通り過ぎて歩き始めた。

「え、おい。どこ行くんだ？」

慌ててその後を追う。

「帰ります」

「これから用事は？」

「特にありません」

「じゃあ今から俺の家に来ないか？ 琴音と……もう一人来ることになってるな」

「……それは、あなたが公園で出会った少女のことですか？」

少しだけ久遠がうつむく。

「え？ 何で知ってるんだ？」

「……私が横井琴音を護衛していること、忘れましたか？」

「そういえばそうだったな。てか、いたの？」

「いいえ。基本的に、能力を使って遠隔から護衛していますから」

「能力？」

「……いずれあなたもわかります」

しばらくお互い何もしゃべらず、一階に降りて、探偵科を出ると、久遠がポツリとつぶやいた。

「……あの少女には近づかない方がいい」

「え？」

久遠は質問には答えなかった。

「あなたの家、行くことにします」

「あ、ああ、そうか」

いつも以上に不思議な発言を残した久遠だったが、家に着く頃にはすっかり頭から抜け落ちていた。

それからの展開は速かった。

運よく家にいた姉さんの声を聞き、その声に聞き覚えのないことを少女が確認したら、やる事がなくなってしまった。俺、姉さん、琴音、久遠、少女の五人でやるようなゲームもそうそうなく、久遠以外はTRPG経験者だったので、部屋の引き出しの奥からCOCのリプレイシナリオを引っ張り出してきてやることになったのだ。

だが、

「終わっちゃったねー」

リビングに、姉さんの声が虚しく消えてゆく。

早い。終わるのが早すぎる。そこそ長めのシナリオなのだが、一時間強で終わってしまった。

流石に探偵科のSランクが二人もいると、謎解きが一瞬で終わってしまう。少女も久遠も中々頭の回転が速く、キーパーである俺の仕事は極端に少なかった。

「普通に全員生還したな……」

このゲーム、一応死亡率の高さに定評があったはずなのだが。

「一回、このメンバーでパラ○イアとかやってみたいわね」

ソファアに座っていた琴音は、ぐったりとソファアの背もたれにしなだれかかった。

「楽なのに疲れる、なんて経験初めてじゃ。こんなクトゥルフもな」
「久遠はどうだった？正直このプレイでTRPGを誤解してほしくないんだが……」

「……楽しかった」

「おお、それならよかった」

テーブルの中央に置かれた林檎ジュースを、自分のコップに注いで一気に飲む。

「まあ、そうは言ってももう六時か」

「そうだ。みんなご飯食べてきなさいよ」

言うと思ったよ……姉さん。

まあ異論はないが。

「どうする？ お前らがよければだけど」

「残念じゃが、妾はそろそろお暇させてもらおうかの」

少女は、本当に残念そうに眉を寄せた。

「そうか。琴音は？」

「私はこの後やることあるから……次の機会を楽しみにしてるわ」

「久遠は？」

久遠は何も言わず、首を横に振った。

「てことはこれで解散か」

「ありやうや。まあ、しょうがないね」

姉さんが椅子を立つ。

他の三人もそれにならない、放置してあった荷物を取る。

「あ、送って行くには一人足りないな……」

「私は別にいいわよ」

「妾も構わぬ」

「……大丈夫」

「けど……」

心配だ。まあ久遠は強いし、琴音も一応拳銃携帯してるから大丈夫だろうけど……

「妾が心配か？」

「ああ」

「その気持ちだけ受け取っておこう」

「気持ちもそうだが、猫も忘れるなよ」

「あ」

忘れていたらしい。少女はバツが悪そうに笑みを浮かべてダンボールを受け取ると、さっさと玄関の方に歩いて行った。すぐに他の三人も後に続く。

「「「お邪魔しました」」」

「また来いよ」

玄関先で挨拶を交わし、三人は各々の帰途へとついた。

「秋空が家に友達連れて来たの、初めてだね」

「……そうだったか？」

リビングに戻った姉さんは、すぐに台所に入ってしまった。

しばらくしてキャベツを刻む音とともに聞こえた声に、俺はとぼけて返事をした。

……いや、あながちとぼけてもいない。この前琴音が家まで押しかけてきたことは、姉さんの中ではノーカンらしい。

「そうだよ。お姉ちゃん嬉しいな」

「……そうか」

姉さんには、迷惑かけてる。心配も、いっぱいさせてる。

今回のことで、それが少しでも払拭されればなど、思わなかったわけではない。

「今日の晩飯、何だ？」

俺は強引に話題を変えた。

「今日はねー……」

穏やかな日々が過ぎていく。

「お帰り」

「うむ。ただいまじゃ」

ギイと扉が軋む音がして、一人の小さな少女が、蝋燭の光に灯された薄暗い部屋に入った。

そして、それを迎え入れる人影が一人。

「どうだった？」

「ふむ。お主の言った通り、やつらで間違いなさそうじゃ」

「それで？」

「松永の末裔は心配しなくてよさそうじゃ。しかし竹中の末裔と上泉の末裔。あの二人は要注意じゃな」

「やはりな。姉の方とはかく、あれはただの意気地なしだ」

少女が近くの椅子に腰掛ける。

「バスジャックは明日だ。兵達も血に飢え、こちらに負けはない」

「妾の出番もないがの」

少女は少し頬をふくらませた。それを見て人影が笑う。

「そう怒るな。この作戦の大部分はお前が考えたものだ。それに、血なまぐさい闘いは、お前には似合わん」

「むー。また妾を子供扱いして……」

「実際、俺はお前より長く生きている」

「そうらしいの」

長い金色の髪をいじりながら、少女は切なさそうにずっと目を細めた。

「……もっと早く、お主と出会っておきたかった」

人影は何も答えない。だが、さっきまでの少しおどけた雰囲気とは打って変わって、戦場に挑む兵士のような緊張感をまとった。

「絶対に手に入れるぞ。『漆漆色金』シンイロカネを。そして解放される。必ずだ」

「……本当に、いいのだな？」

「今更何を。俺はやると決めたことは、必ずやる」

その言葉で、二人はお互いの意志を再確認した。

「先へ進む。俺達は、それだけだ」

声と姉と、非日常への胎動（後書き）

白雪がまだ学校にいるのは、ぶっちゃけ私の確認不足です。後から苦しいのは承知で理由をこじつけてみました。

不死の王（前書き）

話が進むにつれて、原作から外れていく（・ω・）
まあ、いつか。

不死の王

まどろんだ意識の中、頬の辺りに柔らかさと温かさを感じながら、俺は目覚めた。

……なんだろう。これ。すごく柔らかくて、安心する。

まだぼんやりとしたまま目を開けると、肌色の何かが視界に映った。

「ううん……」

どうやら、俺は今抱きしめられているようだ。きゅうつと何かに締められる感覚。

「あきら……」

耳元で囁かれたその声で、俺の意識は完全に覚醒した。

隣に寝ているのが姉さんであることと、姉さんが下着しか身につけていないことを認識する。

俺はなるべく姉さんの方を見ないようにしながら、その肩を軽く揺さぶった。

「姉さん？」

返事の変わりに、すやすやと安らかな寝息が返ってきた。

天井と壁をおろおろと交互に見ていた俺だが、ふと枕元の携帯で時間を確認した。

七時四十二分。

今からなら七時五十八分のバスになる。あれを逃したら、もう後はない。

「おいっ、起きろ姉さん。遅刻するぞ」

俺は焦ってベットから飛び出そうとするが、

「うにゅう……」

「離せ、姉さん」

離れようとする俺を、背中に回された手が許さなかった。一体、姉さんの細腕のどこにこんな力があるのか、びくともしない。

「むにゃ……もう、秋空ったら、私のライフはゼロよ？」

「はなせ！　なんて言ってる場合じゃねえ！　起きろ！　マジで遅刻するって！」

「ふふ。私はもう準備出来てるもん」

「姉さん、もう起きてるだろっ。とっとと離せー！」

「はあ……はあ……」

バスに、乗り遅れた。

バス停で荒い息をつきながら、去っていくバスを見送る。その窓から、先に行った姉さんの顔が見えた気がした。

「はあ……はあ……あれ？　遠山？」

「ん、松永か。お前も乗れなかったんだな……」

二人揃ってため息をつく。何か、最近こいつと行動が似通ってる気がする。

「一時間目はもう無理だな。お前、自転車ないの？」

「この前爆破された。そういうお前は持っていないのかよ」

「ねーよ。諦めて歩こう」

降りしきる大雨のせいか、授業サボるくらい普段の俺なら何ともないのに、陰鬱な気分になる。

遅刻確定の道のりを、俺達とはとぼと歩みだした。

大雨の道を、二人で歩く。

雨のせいか、学園島の無駄に細長い道路が、いつも以上に億劫に感じられた。

「なあ。松永は一時間目どうする？」

「サボる」

「即答かよ」

遠山の声に呆れたような色はなく、疲れたような声色だった。多分、遠山もフケてしまいかどうか迷っているんだろう。

「お前もサボっちゃえよ。後で星伽にノート見せてもらうか、勉強教えてもらうかすればいいだろ」

「それが嫌だから悩んでるんだよ……」

苦々しげに遠山が呟く。

「そんなに嫌か？」

「当たり前だ。女嫌いの同志ならわかるだろ」

「嫌な同志だな。事実だけど」

俺がそう答えて少ししてから、俺と遠山の携帯が同時に鳴った。

「遠山もか。誰だろ」

携帯をポケットから取り出して開くと、知らない番号が表示されていた。通話ボタンを押す。

「――もしもし」

『秋空。今どこ』

琴音の声だ。

今はもう授業中、……というかそれ以前に携帯番号は教えてないはずなのだが……どうということだ？

「強襲科の近くだ」

『ちょうどいいわ。今すぐ探偵科まで来なさい』

「どうということだ。何があった？」

『武偵高の通学バスが、ジャックされたわ』

「何だと？」

ゾクリと、背筋に氷囊を押し当てられたような感覚がした。

「それ、俺ん家の前で何分発のバスだ？」

『七時五十八分。誰か乗ってるの？』

「多分、姉さんが乗ってる」

電話の向こうで舌打ちする音が聞こえた。

「とにかく、早く来なさい」

電話が切れた。携帯を折りたたんで、通話の終わった遠山に早口で話しかける。

「遠山。誰からどんな内容の電話だった？」

「アリアから、事件があったから来いって。どうした、顔色悪いぞ？」

「さっき俺達が乗り損ねたバスが、ジャックされたらしい」
「何だって？」

遠山が目を見開いて驚く。

「てことは、アリアの言ってた『事件』って」

「ああ、バスジャックだろうな」

「お前はどこうするんだ」

「とりあえず、琴音のところに行く」

「わかった。じゃあな」

それだけ言って、俺と遠山は別々の方向に向かって駆け出した。

琴音は恐らく、バスジャックの件で俺を呼んだのではない。

あいつなら神崎が動いていることは知っているだろうし、もし琴音も目的が同じなら、協力しようとするはずだ。

多分、バスジャックと関係する何か。思いつくとすれば、犯人から脅迫されているとかか。

「はあ……はあ」

本日二度目の全力疾走。運動不足がたたったのか、体力が落ちている。汗のせいで制服が肌にへばりついて気持ち悪い。

「遅い」

「はあ……この前とは逆だな」

琴音は探偵科の建物に腕を組んでもたれかかっていた。久遠もいる。

「時間がないから、歩きながら手短に話すわよ」

「走らなくていいのか？」

「大丈夫よ。まだ余裕あるし。気づいてるかもしれないけど、今から私達が向かうのは例のバスじゃないわ」

そうは言いつつも、歩く琴音の足はいつもより断然速い。

「さっき、私の携帯に、非通知で電話がかかってきたわ。これがその音声よ」

琴音は携帯の録音リストの中から一つ選んで、再生した。

『今から 十分以内に シシ イロカネを メールで指定した 場所 に 持って来い』

「ボカロの声、か」

また『武偵殺し』の模倣犯ということか。キンジのチャリジャツクのやつと同一犯だろう。

それに『シシイロカネ』か。聞き覚えのある単語だ。

「指定の場所ってのは？」

「この近くにある教会よ。今は使われてないみたいだけど」

「それで、どうするんだ？ 要求された物、何なのか俺にはよくわからないが、渡すのか？」

「それが、私もわからないのよ」

困ったように、琴音は眉を寄せた。

「え？ 持ってない物なのか？」

「ええ。聞いたこともないわね。あんたはどう？」

「いや、俺も聞いたことないな」

真顔で嘘をつくのなら任せろ。とはいえ、俺もその実態は知らないのだが。

「まあ、今アリア達がバスに向かってるんだけど、解決したらすぐ連絡入れるように言ってるわ」

「それまで相手して、逃げればいいわけか」

「それはヤバくなったとき。しっかり捕まえる気で行くわよ」

「……無茶だろ」

正直、逃げられるかどうかも怪しいところだ。

相手が一人とは限らないし、そうでなくても飛んで火にいる何と

やらだ。相手は爆弾のエキスパート。どんな罠が仕掛けられていてもおかしくはない。

「大丈夫。こっちには久遠がいる。開幕から一気に仕掛けていけば、何とかなるわよ」

「そうか？じゃあ、久遠が闘ってる間に、俺達が他のやつに人質に取られたりしたらどうする？」

「……問題ありません。三分四十秒ほど前から、二人の周囲に私の思念を配置しています」

……ちよつと何言ってるかわからないです。

「あんた、まだ久遠の能力知らなかったの？」

俺の表情から困惑を察したのか、琴音が久遠の能力について話し始めた。

「久遠の能力は『感情の具現化』。喜びとか、悲しみとか、そういうものを削って、自在に操れるエーテル体として召喚する……らしいわ」

「その通りです」

「……テ○ミバチみたいなの？」

俺が額を抑えながらそう聞くと、

「その解釈で、概ね問題ないかと思われます」

あ、久遠テ○ミバチわかるのか。

「でもそれ、強いのか？」

「戦闘は、全て私の操作で行われます。問題ありません」

「でも強い弱い以前に、この能力はリスクが高過ぎるわ」

「リスク？」

「『感情を削る』っていうのは、一時的とはいえ久遠の感情の一部がなくなるってことよ。例えば喜びを削れば、久遠はあらゆるこの世の快樂から最も遠い存在になるの」

「お前何でそんなに詳しいの？」

俺なんて昨日直接聞いたのに、やんわりと流されたんだぞ。

「悲しみを削れば、人の死に何も感じなくなるし、恐怖を消せば、

死の恐怖を捨てることになる。強いけど、絶対に多用は出来ないわ」
「なるほど。危ない能力だな」

完全に感情を失った久遠がどうなるか、想像するだけでも恐ろしい。

「ていうか、削られた感情とやらは、元に戻るんだろうな？」

「ええ。再生します」

久遠が静かにそう言った。

「まあ、そうじゃなきゃ本当に使い物にならないよな」

しかし、今の久遠の言葉に引かかるものを感じたのは、気のせいだろうか。

「とにかく、あんまり久遠に頼り過ぎないこと。自分の身は自分で守る」

「そうは言っても、俺もお前も何も出来んだろ」

「『武偵殺し』なんて言っても、所詮はただの人間だし、久遠も能力なしで二十人くらいは余裕で相手出来るらしいから。大丈夫よ」

「……あれ？結局久遠が頑張るだけ？」

まあそれであの爆弾魔が捕まるんらしいんだが。俺の存在意義が限りなく無に等しい件について。

「ほら。着いたわよ」

角を曲がった先を少し行くと、石造りの道が続いていた。その向こうには古びた教会がそびえ立っている。両脇には墓地があり、整備はされているらしく、草は刈り取られていた。

「……ここからは私が先行します」

石造りの道に踏み込む一歩手前で、久遠が腰の刀を引き抜く。俺と琴音も、銃を抜いて構えた。

久遠、琴音、俺の順に並び、慎重に進んで行く。
途中、念には念をと俺が教会の壁に起爆式の爆弾を設置したりもして、教会の扉の前まで辿り着いた。

木製の、重厚そうな大きな扉だ。

「下がってください」

「？」

久遠の言葉通り、一步下がる。

すると久遠は、手に持ったその刀を扉に向かって三度振り、柄を叩きつけた。

「――！嘘だろ……」

扉が、碎けた。

吹き飛んだ木の欠片がチャペルの床を滑る。わずかに残った、もう到底扉とは言えないそれから、パラパラと木の屑が舞った。

「……気を付けてください。誰かいます」

驚いた俺を気にも留めず、油断なく久遠が先へ進む。その久遠の様子に、俺は少しだけ落ち着きを取り戻した。

チャペルは静かで、薄暗かった。正面の壁にあるステンドグラスから差し込む光が、細かい塵を照らしている。

そして、俺はそれを見た。ステンドグラスの下にある、玉座のように置かれた椅子に座るそれを。

顔はよく見えない。いや、うつむいている。

それを見た瞬間、俺は何か気配のようなものを感じた。奇妙な感覚。鼓動が、脈拍が速くなっていく。

「……来たか」

低い声がした。俺はその玉座に座った人影に銃を向けた。シルエットから、刀を握っているのがわかった。

「ん？三人？……鈴木桜は一緒にやないのか」

うつむいたまま、こちらを見向きもせず、人影が呟くようにして言った。

「まあいい。よく来たな」

「お前が『武偵殺し』の模倣犯か？」

銃を向けたまま、俺は高鳴る鼓動に耐え切れず、声を上げた。

「そうだ。だが、その呼び名は気に入らん。俗人が勝手に決めた、

くだらない呼び名だ」

人影が立ち上がった。依然、うつむいたままだが、頭がステンドグラスから差し込んだ光の軌道に重なる。

その頭は白濁としていて、髪はなかった。

「顔を上げる。心を構えろ」

目が、離せない。

その顔は白く、炎の消えた蠟のように溶け、固まっていた。白く、白濁としたその顔には二つの穴があり、その奥の黒い光は、間違はなく、俺を見つめている。

視線が交差したまま、その恐ろしい外見に恐怖しながら、動けない。だが、不思議と意識だけはしっかりと働いていた。

直感する。俺とこいつは、決して相容れぬ存在であり、本来会うべきではなかったのだと。

「あ、あ、あ……」

ぐらりと琴音の身体が揺れて、俺は我に返った。

「おい、琴音！しっかりしろ！」

倒れる琴音を抱き寄せる。琴音の手から滑り落ちた銃を慌てて拾い上げる。

「琴音！おい……」

気を失っている。あんなものを見たんだ。精神的なショックは大きいだろう。

俺は琴音の銃を自分腰のホルスターにしまいながら、目の前の異形の存在に問いかけた。

「お前、何なんだ。人間か？」

あの顔は、特殊メイクではない。目が慣れてきたのでわかったことだが、あいつ、身体が透けている。赤黒い身体を通して、濁った骨や脈打つ血管が見える。

黒い、擦り切れたスウェットを穿き、マントを羽織っている以外は、何も身に着けていないようだ。

「人間、だった」

「だった？」

「そうだ」

男はゆっくりと、こちらに近づいてきた。

「動くな！」

三步ほど歩いたところで、俺は引き鉄に当てた指に力を入れながら叫んだ。意外にも、男はそれで歩みを止めた。

「俺は、『ノーライフキング』。無機の王でも、不死の王でも、どちらに取って欲れても構わん」

「不死の……王？」

思わず声に出して呟く。『不死』 だと？

「そうだ。一度死に、あの世を見て、再び蘇った者達の頂点だ」

「何意味わかんねーこと言ってんだ。そんなのあるわけないだろ」

「くく。貴様にはもう、俺の醜い身体が見えているだろう？それが答えだ」

ノーライフキングがせせら笑う。

「もう少し現実を見ることだな。……さて、今日どうしてお前達をここに呼んだのかは、わかっているだろう？」

「『お前達』？俺と久遠が来るのがわかっていたとでも言うのか？」

「いや、もう一人来ると思っていた。まあ、今来なくても、結局は同じことだ」

ノーライフキングがまた一步踏み出した。そのとき、今まで黙っていた久遠が口を開いた。

「動くな」

久遠の鋭い制止の声を無視し、ノーライフキングは一步進んだ。瞬間、久遠が消えた。

辺りに鉄を打つ音が鳴り響く。今の一瞬で、久遠とノーライフキングは切り結んでいた。

「『動くな』だと？それはこちらのセリフだ。自分の立場をわかっているのか？俺が今、大量の武偵高の生徒の命を握っていること、忘れたわけではないだろうな？」

そうだった。神崎から連絡が入るまでは、こちらかは動けない。久遠がゆつくりと刀を引いた。ノーライフキングも、構えていた腕を下ろす。

「……何が目的なんだ」

「電話でも言ったが、俺の望みはただ一つ。お前らの持つ『漆漆色^{シシイロ}金^{カネ}』の欠片が欲しいのだ」

「何なんだよ。そのシシイロカネって」

去年、姉を人質に取ったやつらの要求もそれだった。軽く調べたが、その正体は全くの闇の中だ。

「とぼけるのか？ 所詮貴様は、百人あまりの武偵高の生徒より……」

「とぼけるつもりなんかねーよ。何なんだ。そのシシイロカネってとにかく今は、神崎からの連絡があるまで時間を稼ぐ。この会話を長引かせて、撤収。落ち着いてやればいい。」

「くくく。ははははは！」

「な、何だ？」

ノーライフキングの高笑いに、俺は一步たじろぐ。

「浅はかだな。くく、時間稼ぎか。なるほどなるほど」

ノーライフキングの嘲笑は、俺を凍りつかせるのに充分だった。心を……読まれた？ バカな。

「しかし、悪いがそうはいかん」

ノーライフキングは、その骨ばった両手を掲げて、合わせた。

その手の音を合図にして――

「上です。気をつけて」

久遠そう言って刀を構え直すのと、天井を突き破って、何かが落ちてくるのはほとんど同時だった。

兵と逃走

「言ったろう？俺は『不死の王』だ。王とは、民を従える者のことだからな。」

ノーライフキングの言葉が、遠くから聞こえてくるように遅れて脳に届き、理解する。それほどまでに、その光景は壮絶だった。

見ているだけで吐きそうになるような異形の存在達　が、俺達を取り囲んでいる。ある者は肉体を持たぬ骸骨で、ある者は生気の無い目玉が飛び出している。四肢の一部が欠けている者や、身体が溶けたようになっていいる者もあり、それら全てが輪郭だけは人の形を保っていた。

「……中に三人、特殊メイクの人間が混じっています。気をつけてください」

この光景を目の当たりにして、久遠は冷静に言葉を紡いでいた。何人くらいいるんだ？四十、五十人……いや、もっとか。

逃げればバスに乗ってるやつらが死ぬし、ここにいても俺達が死ぬ。一体どうすれば……

「私が戻るまで、耐えてください」

「は？お前、何を……」

久遠が腰を深く落とす。

「動くなよ？動けば乗客の命は……」

ノーライフキングの声を無視して、久遠は真っ直ぐに、あり得ないくらい速く飛んだ。ノーライフキングの数歩前に立ち、刀を向ける。その刀から、ポタポタと何かの水滴が垂れた。

遅れて、ノーライフキングの周りにいた五体のゾンビの首が吹き飛んだ。

「……それが答えか？上泉」

久遠は答えずに、刀を横薙ぎに一閃する。

「いいだろう。かれ」

久遠の斬撃を刀で受け止めたノーライフキングは、静かに命令を下した。

唸り声を上げて、ゆっくりと向かってくるゾンビ達を視界に捉えながら、不思議と俺の頭は冴え渡っていた。現状を確認する。

まず、今のノーライフキングは久遠の相手で、起爆の余裕がないこと。

そして仮にこのゾンビ達に自我がないとすれば、バスを爆破出来る可能性があるのはノーライフキングと、特殊メイクの三人ということになるが……この期に及んで未だ何のアクションもないということは、恐らくやつらに起爆は不可能なのだろう。

久遠は、能力なしでも二十人相手出来ると言っていた。が、ゾンビの数はその倍以上。結局、ある程度は俺が何とかするしかないということか。

厄介なのは中に三人混じっている人間だ。これのせいで、銃の使用が極端に制限されている。

このゾンビ達はどうなのかわからないが、人間を殺すのは武偵法九条に反する。

ゾンビは……恐らく殺しても武偵法には引っかけられない……はずだ。でなければ人間を三人紛れ込ませる意味がない。

俺は左腕でぐったりとした琴音を抱き寄せたまま、右手で銃を構えて発砲した。これは威嚇射撃だが、人間なら銃声に何かしらの反応を示すかもしれない。

「いっ……!?!」

肩に激痛が走る。片手で銃を撃ったのは初めてだが、ここまで反動の負荷が大きいとは思ってなかった。痛みより先に驚きを感じる。

「くそっ」

すでにゾンビとの距離は三メートルを切っていた。

どうすれば、どうすればいい? どうやってこいつらの相手をすれ

ば……

迷っている間にも、ゾンビ達はさらに距離を詰めてくる。

いや落ち着け。確か俺の周囲には、久遠の思念とやらがあるはずだ。よく狙って手足、頭の順に撃てばいい。それくらいの余裕はある。手足や胴体なら、人間でも死ぬことはない。

俺はホルスターから琴音の拳銃を取り出し、構えた。片手撃ちなら、反動の少ないSIG Sauer P230の方がいい。

引き鉄を引く。放たれた弾丸は、狙ったゾンビの右腕を貫通した。傷口から青緑の、どろっとした液体が溢れている。

それがゾンビであることを確認して、俺は頭を撃ち抜いた。脳漿や頭蓋骨を飛び散らせてゾンビが倒れる。

「う……」

こみ上げてくるものを抑え、俺はなるべくそれを見ないようにしながら、隣のゾンビに銃口を向けた。これを繰り返せばかなり時間が稼げる。

そのはず、だった。

二体目の腹を撃ち、頭に照準を構えた俺は、驚きのあまり固まった。引き鉄にかけた指に力を込めようとしても、凍ったように動かない。

「え……」

さっき頭を撃ち抜いたゾンビが、のっそりと起き上がり、こちらに腕を伸ばしてきている。

「何で……」

動ける。

撃ち抜いたはずの頭は、沸騰したように泡立っていた。

「何だよ……」

ゾンビの首から上の細胞が、みるみる構築されていった。ものの数秒で、頭が元に戻る。

有り体に言えば、そいつは再生していた。

「う」

そのグロテスクな光景に、無意識に抑えていた恐怖心が溢れ始める。

怖い。逃げたい。死にたくない。死にたくない。

いや冷静になれ。今逃げたら死ぬ。

せめぎ合う心の葛藤は、ゾンビの手が俺に届く隙を生むのに充分だった。眼前に伸びてきた白い手に、俺は叫び声を上げて飛び退いた。

「うわあああっ！……え？」

壁に阻まれているかのように、ゾンビの手は俺の顔の数センチ前で止まっている。

「はあ……はあ……これが、久遠の能力か……」

危なかったが、おかげで冷静さを取り戻した。

もうここにきて何分経った？

ふいにそんな疑問が浮上した。

神崎からの連絡はどうした。さすがに遅過ぎないか？

俺は銃を琴音を抱えたままの左手に持ち直し、自分の携帯を取り出して遠山にかけた。

『もしもし。どうした？』

「遠山。そっちは今どうなってる」

『さっき爆弾を解除した。今はもう大丈夫だ』

「何だと？」

俺は携帯を取り落としそうになった。

「神崎は今どうしてる？」

『……アリアは……』

「……おい！何があったかは知らんが、早く答えてくれ！」

いつ、この見えない障壁が破られても、おかしくはないのだ。そうでなくても、大量の死者の腕が、目の前で蠢いているのは心臓に悪い。

『アリアは、額を撃たれた。今医療科に運び込まれたところだ』

「そういうことか」

どこか弱々しい遠山の声で、事情は把握出来た。

「わかった。切るぞ」

言い終わると同時に電源ボタンを押す。

そうとなれば、話は早い。今すぐここから逃げるだけだ。

「久遠！バスに仕掛けられていた爆弾が解除されたらしい。逃げるぞ！」

「……了解」

久遠の声が耳に届くより早くに、俺は発煙筒を投げ、爆弾の起爆スイッチを押した。

そこからのことはよく覚えていない。

ただ煙の立ち込める教会を抜け出し、東京の街並みを普段の俺ではありえないほどの速度で駆け抜け、医療科のベッドに琴音を寝かせるまでが、映画のフィルムをぶつ切りにしたかのように、途切れ途切れに俺の中に残っている。

「はあ……」

琴音の寝ているベッドの隣のパイプ椅子に座り、俺はため息を漏らした。

「あなたも休んでください」

ポツリと、隣に座っている久遠が言った。

「俺はそんなに疲れてないから。お前こそ、五、六人一気に相手して、しかも感情削ったんだろ？休め」

「私は軽く『恐怖』を削っていた。ですがあなたはそうではない」

「……ちよつと便利な能力に思えてきた」

再びため息をついて、俺は立ち上がった。

「電話してくる」

久遠は何も答えず、こくりと頷いただけだった。

「もしもし。理子」

「うん。どうしたの？アキくん」

俺は病室を出ると、探偵科の峰理子に電話をかけた。

「『武偵殺し』について情報が欲しい。調査を依頼してもいいか？」

「くふ。だーめ」

そんな声とともに、理子が俺の前に回り込んできた。

「……いたのか」

「あれ？あんまり驚かないんだ？」

さっきまでの恐怖が抜け切っていないのと、自分の不甲斐なさに落ち込んでいたせいで、俺はジト目で理子を見ていただけだった。

「どうかしたの？何か暗いよおー？」

「いつものことだろ。それより、『武偵殺し』の件、何でダメなんだ？報酬なら出す」

通話を切りながら、俺は尋ねた。

「はい。これ」

理子が無地のクリアファイルを手渡してきた。

「？ 何だこれ」

「報酬は秋葉原で一日デートね。では、りこりんは忙しいのでこれにて失礼しますっ」

理子はなぜかびしっと敬礼して、その場を走り去った。

「え？おい、ちょ……行っちゃった。何なんだ？これ」

手元のファイルを見て、俺は再度ため息をついた。

「ただいま」

病室は、出て行ったときと何も変化がなかった。

「……模倣犯では、ないのですか」

どうやら聞いていたらしい。

「遠山の話では、そうらしい」

パイプ椅子に腰掛けながら、俺は答えた。

「遠山からさっきメールがきてな。捕まったやつは真犯人じゃないんだと」

俺は言いながら、理子からもらったクリアファイルの中身を取り出した。

「これ……『武偵殺し』のデータ？何で……」

それは十数枚の、簡単な『武偵殺し』に関する情報が書かれたデータだった。理子には何も言っていなかったのだが、なぜ俺が必要だとわかったのだろうか？

不思議だが、その疑問は氷解することなく、すぐに頭の片隅に流れて行った。それ以上に、データのある一ページが俺の意識を引いた。

「これ、遠山の兄さんか？」

そこには、『浦賀沖海難事故 死亡 遠山金一武偵（19）』と書かれていた。

この事件はよく覚えている。

あのときは酷かった。マスコミどもも酷かったがそうじゃない。遠山がだ。

あのときの抜け殻のような遠山は、本当に見るに耐えなかった。目を離したら次の瞬間遠山が首吊ってそうな、そんな気すらして、でもあいつが一人になりたがってるのはわかったから、俺はしばらく遠山の家に通い詰めていた。

あいつが武偵を辞めたいと言ったとき、俺はそれでいいと言った。深い理由なんてない。ただ、あれ以上あんな遠山は見たくなかった。

「……いかん。集中しないと」

ぶんぶん頭を振って意識を戻す。

これによると、これはいわゆる可能性事件で、本当に『武偵殺し』かどうかはわからないようだ。だが、仮にこれが『武偵殺し』の犯

行だとする、ある規則性が浮かび上がってくる。

「バイク、車、船。自転車、バス……次は飛行機か新幹線ってところか」

規則性とは言っても何てことはない。乗り物の大きさが徐々に大きくなっていき、目標を殺した時点でまた小さくなるだけだ。

「……あれ？」

じゃあ今回の目標って何だ？ノーライフキングは『シシイロカネ』だと言っていた。

この規則性は『次も三回で仕留める』という意味合いを持つ可能性が高い……と思う。船や飛行機、新幹線以上の乗り物なんてそうそうないし。するとノーライフキングは、次の取り引き場所に、琴音が『シシイロカネ』を持ってくる公算が高いと見ていることになる。俺も、琴音も、久遠も知らないものを、持って行くと……

次で捕らえ、拷問でもして無理やり吐かせる気だろうか？あるいは、俺達を人質に親族と取り引きするか。どちらにせよ、それは三回で目的を果たしたことになるのだろうか。

そもそもこのメッセージの意味って何だ？なぜノーライフキン

グは、遠山の兄さんを狙った？

様々な疑問が脳内を駆け巡る。

「わけわかんねー……」

両手で目を覆って、膝に肘を付いて考える。

ほどなくして、俺は二つの可能性にたどり着いた。

一つ目は、『シシイロカネ』なんてものは最初から存在せず、俺達を誘い出すための妄言である可能性。

二つ目は、ノーライフキングと『武偵殺し』が、別人である可能性。

そう。犯行から推測出来る『武偵殺し』の人物像と、ノーライフキングの行動は所々食い違っている。遠隔から武偵を操作するだけの臆病者かと思いきや、今日は直接俺達と会った。兵士は全自動で使い捨てのセグウェイではなく、耐久に優れるゾンビ兵。

しかしもし、仮に、ノーライフキングが『武偵殺し』ではないとすれば、今日のあれはただのはったりだったことになる。でも、はったりであるそこまで出来るものだろうか？

「ん？何だこれ」

ファイルの中に小さな紙切れが入っていた。

『アリアは五日後、十九時の便だよ（はあと）』

理子の丸っこい字で、そう書かれていた。

それで、全てが繋がった。

「なるほど。『武偵殺し』も『無機之王』も、中々粋なことをしてくれる」

「……何か、わかったのですか」

「ああ。今この状況が、どうしようもない袋小路だってことがな」
忌々しく思いながら言葉を吐き捨てて、

「すぐ戻る」

それだけ言い残して、俺は再び病室を後にした。

兵と逃走（後書き）

どうでもいいんですが私、バイオやったことないんです。

喧嘩するほど・・・？

（くそっ。してやられた。初めからこれが狙いか……）

やつらの作戦はあまりに単純で、気づけなかった間拔けな自分に苛々する。

（なぜ……見抜けなかった）

走りながら、悔しさに歯噛みする。

まず『武偵殺し』と『不死の王』は別人だ。それは間違いない。そして、その上で次にノーライフキングが指定してくる場所は、飛行機。『武偵殺し』が次にジャックする飛行機だ。

そして、神崎はそれに乗る。遠山が知ってるのかはわからないが、多分それに着いていくのだろう。

だとするとノーライフキングの次の人質は、飛行機の乗客ではなく……

「ぜえ……はあ……つ、着いた……」

男子寮のとある一室の前で、俺は乱れた息を整える。

今日は走りすぎた。明日は確実に筋肉痛だ。

息が落ち着いたところでインターホンを押す。だが、

「……いない、か」

何も反応がない。

確か遠山は、エリアが撃たれたとか言ってたっけ。てことは医療科か、武偵病院にでもいるのだろうか。

考えてもしょうがない。俺は携帯を取り出して、遠山に電話をかけた。

「留守電……」

後でかけなおすか。

医療科の病室に戻ると、琴音はもう目を覚ましていた。

外傷はなく、精神的なショックが原因で、今はもう大丈夫だが、少し安静にして行けとのことらしい。いやまあわかりきってることなんだが。

「気分はどうだ」

パイプ椅子に腰かけながら言う。

上体だけ起こしてベットに座る琴音は、少し顔色が悪かった。

「最悪……」

おい、全然大丈夫そうじゃないぞ。

「とりあえず、久遠から大体何があったかは聞いたわ」

琴音の声からは疲労が色濃く読み取れた。自分が見たもの、久遠から聞いたことを、信じたくない精神の疲れだ。

「その資料は読んだか？」

「いや、何これ？」

琴音は具合悪そうにのっそりとファイルを手に取り、中のしおり状の紙をめくった。

「これ『武偵殺し』のデータ？やるじゃない、秋空」

「いや俺じゃない。理子っていう俺の知り合いがくれたんだ。一応、信用出来る情報だと思う」

あいつにはよく情報収集を依頼するからな。いわゆるお得意様だ。

「ふーん」

しばらく三人とも黙り、紙の擦れる音だけがした。

「……何これ。私達まんまと嵌められてるじゃない」

読み終わった琴音は、目に怒りの色を顕わにしていた。

「……久遠もそれを読めばわかるだろうが、状況の整理も兼ねて俺が説明する。まず、ノーライフキングは『武偵殺し』じゃない。バスジャックの犯人は他にいて、ノーライフキングはそれを利用して、俺達を教会に呼び寄せた。でも、これは『本命』じゃない」

「……次、ですか」

「そう。次が『本命』。俺達は今日、あの教会から逃げおおせたんじゃない。より確実に俺達を仕留めるため、いったん逃がされたん

だ」

あれだけの兵に囲まれて、逃げられるというのもおかしい話だな。

「次にノーライフキングが指定してくる場所は、五日後、神崎アリアの乗る飛行機だ。そこには『武偵殺し』、神崎アリア、ノーライフキング、そして俺達が乗ることになる」

「……爆弾魔とあの不死者が別人なら、応じなくてもいいのでは？」

「そういうわけにはいかない」

俺は頭を振った。

「言ったろ？その飛行機には神崎が乗るんだ。『武偵殺し』は、多分神崎を狙ってる。遠山がそれを知れば、あいつも着いて行くだろう」

このとき、俺達が行かなければ、飛行機には『武偵殺し』、神崎、遠山、ノーライフキングが乗ることになる。

「ここまで言えばわかるだろ？神崎達は『武偵殺し』、ノーライフキング、そしてゾンビ兵達を一気に相手にしなくちゃならない。『武偵殺し』がどれくらい強いのかはわからないが、ノーライフキング一人でも久遠と互角にやりあえるくらい強いんだ。それに単純に考えても、二対二十不特定多数。多分遠山達は勝てないだろう」

「つまり、やつらの次の人質は、遠山達ってことね」

「そうだ。だから次の要求に俺達は応じざるを得ないっていうのが、やつらの狙い」

そこで仕留めるつもりだ。本当に『シシイロカネ』なんてものがあるのかはわからないが。

「まあ、これはあくまで俺の『読み』だ。当たらなければそれに越したことはないが……」

「そんなわけないでしょ。どう考えてもあんたの言う通り、最初から二段構えだったのよ」

拳を握りしめて、琴音は悔しそうに言った。

「と、琴音も考えてるんだし、まず間違いないだろうな」

そこまで言ったところでしばらく沈黙が続き、久遠が口を開いた。
「……これからどうするのですか」

久遠の問いに、俺は少し躊躇ってから、意を決して言った。

「……俺は、次にノーライフキングから連絡があっても、応じるべきじゃないと思ってる」

「はあ！？何でよ！」

明らかに怒気のこもった、予想していた琴音からの反発に、俺は目線を琴音から外した。

「私達が行かなかったら、遠山とアリアが死ぬかもしれないのよ！
？それに、ここまでコケにされて黙ってられないわよ！」

「俺達が行っても犬死にするだけだ。ノーライフキングとゾンビ兵を、久遠一人で抑え込むのは無理だろ」

「そんなの、やってみなくちゃ……」

「やってみて……？それで死んだらどうするんだよ！」

俺は自然と、ついさっきゾンビ兵に囲まれたときのことを思い出していた。あの理性を欠いた瞳と、生気の失せた腕が、俺を殺そうと迫ってくる様を。

負けたらどうなる？やつらの本当の狙いは未だにわからないが、
負けた俺達に何があってもおかしくない。

「それに久遠にどれだけの負担がかかると思ってる。久遠の能力は
多用出来ないって言ったのは、お前だろう！」

知らず、語気が強くなる。ここが病室だということは、とつくに
頭から吹き飛んでいた。

「お前はさっき気絶してたから、あいつらを見てないからそんなこ
とと言えるだけだ！」

「じゃああんたは、それで遠山達が死んだっていいって言うの！？
ほとんど泣き叫ぶようにして言う琴音の言葉に、俺の煮え切った
脳が底冷える。」

「それは……」
いいわけない。

遠山は俺の友人で、恩人で、憧れでもあり……とても大切なやつだ。

いいわけない。

「……そうだ」

言葉が、口をついて出てきた。

「――っ」

「俺は死にたくないからな。いいか？ 今ノーライフキングに挑んでも勝ち目はない。だがハイジャックの次。それまでにノーライフキングかゾンビ兵と対等に渡り合えるやつを味方に付ければ、まだ何とかなるかもしれない。ここで応じるのは敵の思う壺だって、お前にも……」

「秋空のバカッ！」

視界が揺れる。遅れて頬に痛みを感じた。

平手を、喰らったらしい。

「秋空のバカ！ アホ！ 大っ嫌い！！」

琴音は目に涙を浮かべながら、自分の鞆をつかんで、戸口の方へとズンズン歩いて行った。

「琴音……」

「いいわよ別にっ。あんたみたいな役立たずがいなくなっただって！ 私と久遠だけで行くから！ じゃあね！」

ピシヤリと扉を閉めて、琴音は行ってしまった。足音が徐々に遠ざかる。

「……今のはあなたが悪い」

「うぐ……」

的を射た久遠の指摘が、深々と俺に突き刺さる。まさか久遠に言われるとは思ってなかった。

「い、いや、一概に俺が悪いとは……」

「いいえ」

久遠はきっぱりと否定した。

「……そこまで断言しなくても」

「……横井琴音が心配なら、素直にそう言えばいいでしょう。なぜあんな言い方を」

「琴音が心配？誰が？」

「……呆れました。無意識ですか」

そう言いつつも久遠は表情一つ崩していない。でも、呆れる？どういうことだ？

「あのな。一応言っとくけど、俺は本当に自分の命が惜しくてああ言っただ。何か勘違いしてないか？」

これは本当に自分の本心だ。死ぬのが怖い。そんなのは当たり前だ。誰だってそうだ。

「私は、能力上人の心には敏感です。あなたの考えていることは手に取るようにわかる」

「絶対勘違いだって」

「……そうですか」

久遠は立ち上がると、

「私は横井琴音を追いかけます。では」

「あ、ああ。じゃあな」

そういえば、久遠は琴音の護衛だったか。

白い髪をなびかせて、久遠は出て行った。

「……青海の公園寄って、帰ろう」

部屋で一人呟いて、俺は今度こそ病室を後にした。

その日、少女は公園に来なかった。

金の髪の少女（前書き）

年内にノーキン編完結するだろうか・・・多分しないんだろうな・・・
・なんて思ってみたり。

金の髪の少女

結局、何の打開策も思いつかないまま、日曜日を迎えた。

あれから琴音とは一言も口を聞いていない。久遠から聞いた話では、ノーライフキングから、俺の予想した通りの内容の連絡があったそうだ。

琴音にはあんなことを言ってしまったが、ノーライフキングの件はもう無関係などと割り切れるほど、俺は器用な性格ではなかった。ラノベ読んだりアニメ観たりしても、掃除や洗濯をしても、何となく上の空で、いつの間にか琴音のこと、ノーライフキングのことを考えている自分がいる。一日中引きこもってるのもアレなので、気分転換も兼ねて、夕方、俺は青海の公園に行くことにした。

最近、あの謎の少女が来ていない。何があったのかはわからないが、心配だ。

「……今日もいないか」

公園で、ベンチで寄り添っている二人組を睨みつける。周りを見渡せばどいつもこいつもカップルカップル。くそつ。爆発しろ。

これ以上ここにいと白骨化してしまいそうだが、どうしようか……どうせすることもなし、もうちょっとだけここにしようかな。

「アキラ」

「ん？ おお、久しぶりだな」

振り返ると、沈みゆく夕陽を背にして、少女がいた。

水色の目は、これまでにないほど真っ直ぐに俺を見つめ、少女の金髪は黄金色の夕陽を反射して、いつも以上にキラキラと輝いている。思わず息を吞んでしまう美しさだ。

「アキラ。今日は、妾に会いに来たのか」

「あ、ああ。最近お前来てなかったし、気になったから」

少女は俺のすぐ手前、ほんの一步手前くらいまで来て、水色の瞳で俺を見上げた。

いつもとは雰囲気の違い少女に、少しドキリとさせられる。

「話したいことがある。どこかで二人きりになれぬか？」

「大事な話なのか？」

少女はいつになく真剣な目で俺を見ながら、こくりと頷いた。

「じゃあ、今姉さんいないし、俺の家来るか？」

「……すまぬな」

「いやいいって」

誰かと話して、この陰鬱とした気分をまぎらわしたかったから、ちょうどいい。姉さんは七時頃帰ってくるって言ってたから、今メールしておけば少女の分の夕飯も買ってきてくれるだろう。

「んじゃ、行くか」

家に帰る道中、少女は自分からは一言もしゃべらなかった。俺の振った話には答えてはいたが、『ああ』とか『そうじゃな』とか、相槌程度のものだった。

俺と会っていなかったここ数日で、何かあったのだろうか。というか、そうとしか思えない。今の少女を見ると、とても心配にさせられた。

「ほら、着いたぞ」

「お邪魔します」

少女は靴を脱いで、どこか緊張したような様子で家に上がった。

一応来るのは二回目のはずなんだがな。

「そう緊張するな。今茶でも入れてくるから、リビングのソファで待ってろ」

「ああ。承知した」

そして俺は、少女に背を向けた。

いつか琴音と絡まり合うようにして倒れ込んだ、あの細長い形状

の廊下で、俺はその先にあるリビングへと足を運ぶ。

「？ どうした？」

後から続くはずの少女の足音が聞こえないのに違和感を感じて、俺は首だけ振り返って後ろを見た。

そして、そのあまりに現実味のない光景に、俺の頭の中は真っ白になった。

少女が、拳銃を構えている。

俺がそう理解したとき、少女はすでに引き鉄を引いていた。銃声は鳴らない。消音器が拳銃に取り付けられていた。

「ぎ、ぐ」

左の脇腹に、焼け付くような強い痛みを感じる。手で抑えると、生温かい血の感触がした。

何で？ どうして？ 疑問が痛みに掻き消えていく。

休日だから防弾制服は着ていない。上下黒の、ただのジャージ。

当然、そんな布切れで銃弾を防げるわけもない。

完全に、油断していた。

「お前……何で」

「お主は計画の障害になりうる。ここで消えてもらおうぞ」

続けて二発、銃弾が放たれる。一発は外れ、一発は左腕上腕部をかすめた。

「いっ……」

まずい。当然、こんなジャージ姿で帯銃などしていない。

銃は俺の部屋にある。が、残念なことに、玄関入ってすぐ左にあるのが俺の部屋だ。今は少女が塞いでいてたどり着けない。

逃げるか？ どこに？ リビングに行ってもジリ貧だ。遮蔽物は精々ソファくらいしかないし、五階のこの部屋からダイブすれば、骨折ではすまないかもしれない。

後ろがダメなら、前しかないか？ 銃はないが、バタフライナイフ

は携帯している。近づいてしまえば、腕つぶしで負けることはないはずだ。

遮蔽物は全くない。だが俺と少女の間にある、トイレの扉を開けてば、木の板一枚分の防壁になる。トイレに身を隠し、期をうかがうことも、鍵をかけて籠城作戦にも移行出来る。

まだこちらの方が分があるか？

行け。行くしかない！

ここまでの思考を瞬時に終えた俺は、ポケットから取り出したナイフを開き、突撃した。

「愚か者め」

少女は銃を構えなおすが、引き鉄を引く前に、俺がトイレのドアノブに手をかけた。

「うおおっ！」

渾身の力を込めて、それを引く。勢い余ってバネのように戻ろうとする扉を、慌てて足で食い止める。

三発中一発しか命中していないところを見ると、多分少女は銃に關しては素人だ。見えない敵など、撃つことは出来ないだろう。

一応トイレの個室に入り、深呼吸して意識を落ち着かせる。

「おい！何で俺にこんなことをする！」

返事はない。

「お前、あいつらの……ノーライフキングの一味なのか？」

返事はない。

「あの特殊メイクで紛れ込んでいた三人とやらの一人は……お前なのか？」

「……とんだ見当違いじゃな」

金属を弾いたような音がした。

手榴弾の、ピンを抜いたときの音だ。

ここは、動いちゃ駄目だ。

「う、うう……」

プレッシャーに、声が漏れる。身体が、震える。

今は逃げても、少女に向かっても無駄だ。昔遠山に聞いたことがある。手榴弾の殺傷範囲は、一般人が考えているよりよっぽど広いらしい。ここで投げればあの少女も死ぬ。つまり、はったりだ。安全レバーを押さえているか、何かの再生機で音を鳴らしたただけかはわからないが、いずれにせよ、これはこけおどしだ。

それに、少女は拳銃に消音器を取り付けていた。あれは目立ちたくないという意思表示。爆音が鳴り響く手榴弾は、できれば使いたくないだろう。

逆に、今俺が目立つような真似をすれば、本当に手榴弾が投げられるかもしれない。

「ぐ……」

脇腹の痛みに、顔をしかめながら考える。

もうどれくらい経ったんだ？ 一分？ 五分？ いやもっと短いかな？

大分落ち着いてきた。状況を整理する。

状況は至って単純で、奇しくも、俺とあの少女の取るべき行動は一致している。

少女はこのまま、俺が出血で弱るのを待つ。俺は姉さんの帰りを待ち、二対一に持ち込む。それが両者の理想の形だ。

——本来なら。

だがそれは、あくまで戦略的な観点。あくまで『取るべき行動』だ。

俺は、姉さんを巻き込みたくない。これは俺の問題だ。姉さんは関係ない。

そう。落ち着いて闘えばいい。相手はただの幼い少女一人。俺一人でも勝てる。勝てるはずだ。

口に広がりつつある血の味を舐めながら、俺はなるべく音を経えないようにトイレットペーパーを丸々抜き取った。芯の部分に、洗面器のところにあったガラス製の小さな置き時計を入れる。

出来れば止血に使いたいが、今は一手でも多く、武器が欲しい。

(さあ……行くぞ)

気を奮い立たせ、俺は扉の陰から飛び出した。

一発の発砲音がして、銃弾が頬をかすめていく。

「はあっ！」

俺は少女の顔めがけてトイレットペーパーを投げつけた。狙いは少女の顔。それでも俺はコントロールはいい方で、トイレットペーパーは少女の顔に吸い込まれるように飛んで行った。

「きょう……」

少女は怯んで一瞬目を閉じたが、すぐに目を開け、走る俺に銃を向け直した。

だが、

ゴト。

「――！」

少女が、トイレットペーパーの芯から滑り落ちた時計に目をやり、俺から意識が外れる。

俺はその隙に、一気に飛び込んで距離を詰めた。

手が――届く！

「うおおっ！」

「あ、いたっ」

俺は右手で少女の肩をつかんで、床に押し倒した。左手で、銃ごと少女の両腕を頭の上にやり、しっかりと握りしめる。左脚で少女の両脚を押さえ込み、完全に動きを封じた。

「おい！お前、何でこんなことを……」

「うるさい！離せ！妾に触れるな！」

ジタバタと暴れる少女に、俺は肩をつかんでいた右手を離し、その手で眼前にナイフを突きつけた。

「暴れるな。銃を捨てろ」

声を低くし、凄みを利かせて俺は言った。少女は答えない。銃も捨てない。それどころか、挑戦的な笑みを浮かべていた。

「それで妾を斬るか？お主にそれは出来まい」

俺は応えず、床にはらりと広がった長い金髪に、ナイフを突き立

てた。

「悪いが、俺は自分の命を狙いにきたやつを、まだ小さい女の子だからと手加減してやるほど甘くはない」

ナイフを床から引き抜く。

「もう一度言う。銃を捨て……」

ぞわ……

少女の髪の毛、切られた部分がうごめいた。

髪が、伸びている。切られたところまで、寸分違わず。

俺は言葉を失って、その様子を茫然と見ていた。

急に、俺の脳裏にゾンビの頭部が再生する映像がフラッシュバックする。まさか、こいつ……

「どけっ！」

少女が、俺を跳ね除けて立ち上がった。尻餅をついた俺に銃を向けてくる。

「お前……まさか……」

「ますますお主を生かしておけなくなったな」

少女が引き鉄にかけた指をゆっくりと引いていく。

「さらばだ。妾に殺されること、誇りに思っただけに死に逝くがいい」
死んだ。

俺は本当に死を覚悟して、目をつぶって身を固くした。

「……？」

死んで、ない？ 撃たれてない？

おそろおそろ目を開けると、

「そこまでだ」

少女の腕を、あいつがつかんでいた。

あの男、ノーライフキングが。

「ノーライフ……キング。何で……」

いつの間に家に入ってきたのか。あの異形の男は、確かにそこにいた。

「ふん。敵に救われるとは、情けない男だな」

ノーライフキングは俺を鼻で笑って、少女の持っている銃に手を添えた。

「銃を下ろせ」

「じゃが、こいつは……」

「そう焦るな。いや、焦る気持ちもわかるが、こんなやつ殺そうと思えばいつでも殺せるんだ。安心しろ。計画に支障はない」

「むう……」

「どうせ後で鈴木桜と、こいつの姉も回収せねばならんだ。何も今ここで面倒を起こすことはないだろう？」

「……わかった」

ノーライフキングの説得に納得したのか、少女は渋々といった風に銃を下ろして、俺に背を向けた。

「ゆくぞ」

「待て！ お前ら、何なんだ。何で俺達を狙うんだ？」

「死にたくなかったら、今は黙っていることだな」

興味なさげにそう言って、二人は扉の外へと歩いていく。

「おい、う……」

ズキリと撃たれた脇腹が痛む。

「今日のことを他言すれば、お前も、お前の姉もただでは済まないと思え」

その言葉を最後に、ノーライフキングは少女を抱え、地面を蹴って飛び去って行った。

開戦（前書き）

今回は超短いです。

開戦

何よ！あいつ、そんなに死にたくないわけ？そんなに自分の身が大切な？プライドは、誇りはないの？それで友達を見捨てるなんて、最低の屑野郎もいいところじゃない！

あいつ、頭の回転は早いし、伸び代もある、将来が有望な武偵だと思ってたけど、人間性がまるでダメ。あれじゃいつ裏切るかわからないわよ。

嫌よ。私は。アリアを、遠山を見捨てて自分だけのうのと生き延びるのは。絶対に。

それに、私は負けない。あいつは私と久遠じゃ勝てないなんて言ってたけど、そんなことはない。久遠の能力でゾンビ兵を抑えつつ、二対一でノーライフキングと闘う。そのまま時間を稼いで、『武偵殺し』を倒したアリア達と合流してゾンビ兵を叩く。要は、向こうがやろうとした作戦を、こっちがそのままそっくり返してやればいいんだ。大丈夫。これはチャンスよ。秋空の言ってた『次』を待つまでもない。ノーライフキングとゾンビ兵を抑え込むカードは、

『今』あるもの。そう、これでいいのよ。

……でも、なのに、何で……

『やってみて……？それで死んだらどうするんだよ！』

何で、この期に及んであいつの顔を思い出すの？

「これが最善の策よ。最善の、はずなのよ……」

『こちらから連絡するまでは動くな』

それは、高級感のあるスイートルームに入った途端の私に、ノーライフキングから届いたメールだった。

この飛行機、片道二十万は伊達ではないようで、普通の旅客機とは明らかに異なる構造をしていた。

一階はバーになっていて、二階は左右に合わせて十二枚の扉が並

んでいる。それぞれの部屋が高級ホテルの一室のように、シャワーやベット、テレビなども完備していて、私達は酷く場違いに感じられた。

「……何と？」

そんな高級感溢れる部屋でも、久遠は表情一つ変える様子はない。普段からお姫様みたいな雰囲気出てるし、もしかしたらこれくらい慣れてるのかもしれない。

「今は動くな、だって。こっちからすれば好都合、よね」

今はなるべく時間を稼ぐこと。それだけを考えればいい……はずだ。

でも、そんな目先を追うような考え方で、本当に大丈夫かしら？

「とにかく、今は待ちの一手よ。久遠は適度にリラックスしながら、いつでも闘えるようにしておいてね」

何かを振り払うようにそう言って、私は座席に座った。

「……了解」

強風の中、AN600便……私達を乗せた飛行機は東京湾上空に出た。

久遠はベットで、刀を片手にあぐらをかいて瞑想している。スカートの下が見えだが、ここには私しかないし、本人も何とも思っていないようだ。

私は、特に何の考えもなしに窓の外を眺めていた。

「……松永秋空のことが、気になるのですか？」

見ると、久遠は目を開いてこちらを見ていた。

「秋空が気になる？ 誰が？」

「あなたがです」

そんなことない、とは言えなかった。心当たりは、ちょっとだけ、ほんのちよつとだけならある。

「彼は、あなたを心配していました」

「……もしそうだったら、今ここに來てるはずでしょ？」

秋空は、来なかった。

いても足手まといにしかならないから、来なくてよかったけど。でも、もし私が心配なのなら、来る。

思えば、あいつは会ったときからそうだった。遠山の危険を、目の前で見て、気づいていながら無視した。それは、多分目の前に私が倒れてたからじゃない。自転車に仕掛けられた爆弾に気づいていたから、自分が死にたくないからだ。

結局、あいつは、そういうやつなんだ。

「——お客様に、お詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が三十分ほど遅れることが予想されます——」
機内放送が流れ、600便は少し揺れながら飛ぶ。

外では雷鳴が轟いていた。

「……る」

「え？」

久遠が窓の外を見て、何か呟いたようだけど、聞き逃してしまった。

「とにかく、秋空は来なかったんだし、この話はもうお終い。いいわね？」

久遠は窓から目を離さず、頷いた。

感情のこもらない瞳で外を見る久遠は、何だか寂しそうで、ここにはない何かを見つめているようだった。

「久遠……」

「……心配はいりません」

「何か思い出してるの？」

何となくそんな気がして、尋ねてみた。

「……ええ。少し、昔のことを」

久遠は窓から視線をそらして、立ち上がった。

「……扉の外に、誰かいます」

「え？まさか……向こうから来たの？」

「そのようです」

随分急展開ね。

『こちらから連絡するまでは』動くな、なんて言ってたから、罨を張って待つのかと思ってたけど、向こうから不意打ちで殴り込んでくるなんて…… いい趣味してるじゃない。

「でも、気づいてしまえばこっちのモンよ。ゾンビ兵が数体部屋に入るごとに、具現化させた思念で扉を閉めて、少しずつ倒すわよ」
「了解」

パン！パン！

扉の外で銃声が鳴り、闘いの火蓋は切って落とされた。

王の記憶 壱（前書き）

ヒヤッハー！二連投稿だー！

今回も超短いです。

王の記憶 壱

目が覚めると、そこは暗く、冷たい闇の中だった。

身をよじると、自分が地べたに座り込んでいて、手足に枷が付いているのがわかった。じゃらり、と枷に繋がった何かが音を立てる。多分、鎖だ。

何も見えない。何も聞こえない。

私はいつからここにいるのか。ずっと前、五年も十年も前か、あるいはついさっき、ここに来たばかりなのか。

ここに来る前は何かをしていた？

記憶がほとんどない。あるのはただ、炎。自分の身体を貪欲に貪り続ける、赤い炎。

……そうだ。思い出した。痛くて、いたくて、あつくて、いきがくるしくて、気を失って、まだ痛くて……次に目が覚めたとき、私はここにいたんだ。

……そっか。私、また死ねなかったんだ。

もうずっと何も食べてないんだし、今寝たら楽になれるかな、なんて思ったけど、ここまで来たら認めるしかない。

私は死ねないんだ。多分、これからずっと。

……寝ようかな。することないし。

ゆっくりと瞼が落ちてゆく。

キィ……

永遠に続くかと思えた静寂に、錆び付いた金属のこすれ合う音がして、私は落としたかけた瞼を開いた。

「だ……れ？」

白い吐息とともに、疑問が漏れる。

人だ。

人がいる。

自分以外の人間をここで見るのは初めてだ。

近づいてくる。顔は暗くて見えない。

「なに……して、るの？」

その人は、私の側まで来ると、膝まづいて枷を鍵で外した。

カチャ……カチャ……ガシャン。

「すまない。助けるのが遅くなって。見つけるのに手間取った」

「え？」

少し低めの、男の声だ。

「ここから逃げろ。ここから北に三マイルほど行った街に、かみ……

…ジャックという男の家がある。そこでかくまってもらえ」

「あなたは……誰……？」

「俺は……ただの侍だ」

サムライ？ 変な名前。名前がない私が言えたことじゃないけど。

「誰にも見つからないよう、森の中を進んで行け。幸運を祈る。ノ
ーライフキング」

あ、そうだ。私の名前、あった。思い出した。

そうだ。私は、私の名前は……ノーライフキング無機王だ。

王の記憶 壱（後書き）

無機『の』王にしたいのに、そうするとルビが上手くかからないよ・
・どうすればいいのか、誰か教えてエロい人。

予習

「今回も、キレイに引っかけてくれやりましたねえ」

「あんた……一体……何者……」

「理子・峰・リュパン四世——それが理子の本当の名前」

「そ、それがどうしたのよ……四世の何が悪いってのよ」

「——悪いに決まってるんだろ!! あたしは数字か!? あたしはただの、DNAかよ!? あたしは理子だ! 数字じゃない! どいつもこいつもよオ!」

「百年前、曾お爺様同士の対決は引き分けだった」

「何もかも……お前の計画通りだったってワケかよ……」

「……兄さんを、お前が……お前が!?!」

「ノン、ノン。ダメだよキンジ」

「くッ……このっ!」

「あはっ、あはははっ!」

「カドラ双剣双銃——奇遇よね、アリア」

「うあっ!」

「あは、あはは、あははははは!」

「アリア……アリア!」

「ようやく、終わったか……」

ガタツ、ガタガタツ。

頭上の蓋を開け、酒樽の中から這い出た俺は、ふう、と一息ついて辺りを見た。

「……酷えな」

そこには、キッチンには、バーのマスターや裏方のコックと思わしき人物数人が倒れていた。死屍累々、とはこのことか。死んでないけど。

この機体のエンジンがまだ温まらない内から、俺はこのアテンドントに変装し、色々と下準備をしていた。罨や、小型カメラの設置を主に、隠れ場の樽を組み立てたり……他にも、色々と小細工を。で、樽の中に隠れること一時間。そろそろ頃合いかと思って出ようとしたら、変装した理子が来て十秒ほどでキッチンを制圧してしまい、樽から出られなくなってしまった。その後、理子は樽の周囲をぐるぐる周りながら、「あれえ？おっかしいな？何でこんなところに一つだけポツンと樽があるんだろうな。もしかして、誰か入ってるのか？くふっ、まさかねー。そんな『バカ』なこと考える人いるわけないよねー」と、なぜか『バカ』を強調して言い、「人がいないなら、ちょっとこのナイフの切れ味、試してみようかなあー」と、箱に剣を突き刺す手品師のごとく、ザクザクと俺の身体ギリギリのところをナイフを刺し、少ししてどっか行っただと思えば、今度は遠山達と交戦。逃走した遠山達を追って、ようやく理子がこのフロアから消えたところだ。

まさか、理子が『武偵殺し』で、あんなやつだったとはな……

……いかん。遠い目をしている場合じゃない。理子がいたせいで、完全に出遅れた。急いで二階に行かないと。久遠の能力は長期戦向きではない。無理をすると、本当に取り返しのつかないことになる。俺は、ずっと同じ姿勢だったせいで凝り固まった筋肉を軋ませて、

二階へと駆け出した。

「これは、厳しい……」

廊下の陰に隠れて、部屋の様子をうかがう。

そこはB級ホラー映画のように、ゾンビ達が部屋に殺到していた。扉は開いてはいるが、見えない壁に阻まれているかのように、ゾンビは何もない空間を引っ掻いている。久遠の能力のせいだ。

……さて、どうやって部屋に入ろうか。

「……いや、無理だろ。これは」

あいつらだけならまだしも、久遠の思念の壁をも破らないといけないのは無理だ。

正直、俺に久遠の能力を破るくらいの力があるなら、こんな面倒なことにはなっていない。

「仕方ない。これはやりたくなかったけど、ちょっとダイナミックに入るしかない、か」

扉には、教会で使ったものと同じタイプの爆弾を、あらかじめ設置してある。

ちなみに、俺のお手製だ。爆薬の調整も完璧。

部屋に仕掛けた小型カメラの映像を、携帯で確認する。扉の前には……誰もいない。今だ。

俺は起爆ボタンにかけた指に、力をこめた。

爆音が辺りに鳴り響く。扉とともに、部屋の前で溜まっていたゾンビ達が吹き飛んだ。

俺は硝煙の匂いに包まれながら、部屋の中に駆け込んだ。

「な……秋空!？」

俺を呼ぶ、ここ最近で聞き慣れてしまった、でも聞くのは久しぶりなその声に安心する。

「おお、琴音」

よかった。怪我一つない。ピンピンして、ゾンビ兵相手に銃を構えている。

それに、ゾンビに対して扉を背にする立ち位置。これなら今すぐにも逃げられるな。久遠も琴音のすぐ近くにいます。

「あんた……今更何しに来たのよ！」

琴音は一瞬俺の方を見たが、すぐにゾンビに向き直って、銃を乱射した。

「何って、協力しに来たんだよ」

琴音は不愉快そうに眉を釣り上げて、

「いらぬ。あんたなんて、足でまといにしかないんだし……」

「嘘つけ。今は足でまとい一人でも戦力が欲しい場面だろ？」

「でも、あんたどうせ何も出来ないじゃない」

琴音がリロードする。

「その言葉、そっくりそのままお前らに返してやろう」

『お前ら』。

俺のこの物言いに、琴音はついにキレたらしい。琴音は弾倉を取り落とした。

「はあ！？あんた、今久遠がどんな気持ちで闘ってる……」

「でも事実だろう」

「あんたねえ……」

声にな怒りを通り越して、俺への敵意が感じられた。

「いい加減認めろよ。撃っても斬っても再生する、そんな相手とともに闘っても、勝ち目なんかカスすらねえんだよ」

「何よ……じゃああんたは何しに来たのよ」

「お前、きんぞくきんおう擒賊擒王という言葉を知ってるか？」

会話が噛み合っていないのを自覚しながら、俺は唐突に切り出した。

「いきなり何よ。敵を擒えんとすれば先ず王を擒えよ。知ってるに決まってるでしょ？」

「わかってるなら話が早い」

擒賊擒王とは、兵法三十六計の一つで、敵を倒すならまず王、首謀者や司令官などの中心人物から倒せ、という意味だ。

「お前はこの部屋から出て、飛行機のどこかにいるノーライフキングをあぶり出せ」

「え？ノーライフキングって……」

「その間、俺があいつを食い止める」

刀を構え静止し、久遠と睨み合っている男を見据える。

男がちらり、と俺を見た気がした……と思ったら、久遠が男と斬り結んだ。

「ちょっと待ってよ。ノーライフキングはあいつでしょ？」

「違う。俺は昨日、こいつらのボスに襲われてる。だからわかるんだ。詳しく説明してる時間はないが、とにかく機内にいる。そいつを見つけ出してくれ」

「襲われた？」

「ああ。とにかく急げ。ここは俺が何とかするから、行けっ」

ここで『公園の少女』とは言わない。言えばただでさえ薄い現実味が、皆無になる。

「久遠もだ。行け。ここは俺に任せろ」

「……了解」

偽者に向かって、俺は銃を撃ちながら一歩踏み出す。

「ちょ、ちょっと！久遠もって……あんたは……一人であいつの相手するの!？」

琴音は慌てて俺の腕をつかんで引きとめようとする。

「ああ。他に誰がいる。撃っても斬っても倒せない相手に、久遠ほどの戦力を割り当てるのは、あまりに無意だ」

「だからって、あんただけじゃ時間稼ぎにもならないわよ」

「安心しろ。策はある」

俺は首だけ琴音の方に振り向いて、にいと口角を吊り上げた。

「もう聞き飽きたろうが、俺は死にたくないんだ。いざとなったら

お前から見捨てても逃げてやるさ」

「……もう、勝手にしなさいよ！行くわよ、久遠」
背を翻し、足早に琴音は部屋を出て行った。

「……後で謝った方がいいですよ」

「そう、だな」

「すぐに戻ります」

久遠が一陣の風を残し、その場から消え去った。

「……さあ、来いよ」

いつの間にか、動きの止まっているゾンビ達を挑発する。意味あるかはわからないが。

こっちの狙いが時間稼ぎなのはバレている。なのに、ゾンビの動きが止まっているのは……不気味だ。動いても不気味で怖いが。

劣勢のときほど、目先を追ってはいけない。目先を追うのは追隨戦略、強者の取るべき行動だ。

「くく。……お前達、ここから退出しろ。松永秋空には、指一本触れるなよ」

「何？」

偽者の命令に従い、ゾンビ達は琴音の後を追うように、唸り声をあげて部屋から出て行く。

「おい、どういうつもりだ」

「くくく。貴様ならこの思考に至り、一人で俺と闘おうとすることはわかっていた」

「……ここまでがお前の手の内、ってことか」

俺の思考。それはまず、俺を襲ったあの少女がノーライフキング、やつらのボスなんじゃないかという考え。そして、ノーライフキングを捕えることに全戦力を注げば、今日の前にいるこいつの焦りを生み、そこから勝機が芽生えるのでは、という考え。

あの少女がノーライフキングである根拠はないが、この読みの大前提として、あの少女がノーライフキングの軍団の一員であるということ。そう考えると、俺と闘って負けるような少女が、やつらの

仲間である意味がない。あるとすれば、司令官、作戦立案者、あるいは、ボス。

決定打は、人を見下すような態度ばかり取っていたこの男が、俺を殺しに来た少女に対しては、なだめるような態度だったこと。あれで確信した。

しかし、この偽者には、どうやら全て読まれていたらしい。

「安心しろ。俺は貴様と二人で話したかっただけだ」

「俺と？」

「ああ。貴様にとっても、決して悪い話ではないはずだ」

偽物が、手に持っていた刀を投げ捨てる。刀は、俺のすぐ側に突き刺さって震えた。

これで対等、とでも言いたいのだろうか。だがやつなら、素手でも俺を圧倒出来る。状況は何も変わっていないと見るべきだろう。

「では単刀直入に聞くが……『イ・ウー』に出来ないか？」

「『イ・ウー』？何だそれ」

「まあ、知らんだろうな。簡単に言うと、超人達の戦闘集団だ。お互いがお互いの持つ技術を交換して、己を鍛え、超人を生みだすのが主な活動目的……と、思っておけばいいだろう」

「そんなところに、何で俺が……」

言うまでもなく、俺は超人ではない。普通のDランク武偵。それ以上でもそれ以下でもない。

「お前はな。だが、あの二人は違う」

「っ！」

教会でもあったが、まただ。まるで心を読まれているかのような

……

「横井琴音。上泉久遠。あの二人のまとめ役は貴様だからな」

「いや、それはない」

まとめ役は琴音だ。俺とはあまり話さない久遠は、琴音とはそこそこしゃべってるみたいだし。

「だとしても、貴様は鼻が利く。得るべき能力、切り捨てるべき能

力の選別が出来る。それに、貴様は伸び代があるからな。」

「……なるほど。洞察力のある俺が効率的にあいつらを育てて、俺がその能力を丸々頂く。いいかもしれないな」

「ほう。妙に物分りがいいな。では、『イ・ウー』に来るのだな？」

「だが断る」

行くわけがないだろう。

「俺がここに何しに来たか。それだけは見失わない。必ずだ」

「ここに来た、目的？」

「ああ。琴音と久遠を連れて、生きて帰る」

姉さんとした、この誓いだけは、絶対に破らない。

やるべきことは見えている。簡単だ。

「やるべきことは見えている？くだらん」

また思考を読み取られた。どういうことだ？

「何なんだお前。人の心が読めるのか？」

「少し違う。『条理予知』^{コグニス}という能力を知っているか？」

「いや、知らない」

俺は眉をひそめた。

「俺のこれは、それに近いものだ。『条理予知』は卓越した推理力により『予知』をするのに対し、俺の『条理読心』は、あらゆる判断材料から敵の考えを『読む』能力だ」

「はったりだ」

俺は偽者の世迷い言を、一言で切り捨てた。

そんなわけがない。自信を持ってそう言える。人の考え、心は文字通り千差万別で、そう単純なものではないんだ。

多分、やつ^{ステルス}の読心術の正体は、超能力。

「超能力か。そう思うのも無理はないな。まあ、どう思ってもらおうとも構わんよ」

こいつの言う通り。超能力だろうが、『条里読心』だろうが、結局は同じ。あいつが俺の心を読めるという事実は変わらない。

「だが一つだけ言っておこう。これは、『条里読心』は貴様がこれ

から至る境地。俺との闘いは、貴様にとってはいわば『予習』だ」
「予習？」

意味不明な男の言葉には、霧がかかったように、俺の中ではやけている。何だ？このもやもやした感じ……

「これ以上は、自分で推理することだな。……さて、交渉は決裂した。時間もない。そろそろ始めるか」

「……ああ。そうだな」

時間稼ぎで終わるつもりはない。久遠が戻るのを待つまでもない。今、ここで、俺がこいつに引導を渡す。

傍に刺さった刀を引き抜く。それを合図に、偽者が視界から消えた。

王の記憶 弑（前書き）

短いです。

王の記憶 弐

目が覚めると、そこは明るくて暖かい、木でできた洋風の部屋の、ベットの上がった。

「目が覚めたようじゃな」

声のした方を見ると、ベットの脇に置かれた揺り椅子に、白髪で、立派な白髭を蓄えた、初老の男が座っていた。

「だれ？」

「わしはジャック。お主を守るよう、ある者に頼まれておる」

ジャックは立ち上がって、部屋の奥に姿を消したかと思うと、湯気の香り立つティーカップを片手に戻ってきた。

「飲みなさい。ハーブティーだ」

「はーぶ、てー？」

「茶じゃ」

ジャックは揺り椅子に戻って、こちらをじっと見ている。

「人外の不死と聞いておったから、どんな恐ろしげな怪物かと思えば、美しい姫ではないか」

「うつくし？」

飲みかけのカップに口をつけたまま、首を傾げる。

「どうだ。味は」

「おいしい？」

「……ふむ。そうか」

ジャックは近くの机に山積みになっていた紙から一枚抜き取ると、筆で何か書き始めた。

「どういった風に美味しい？」

「ん……何か、温かい？」

「ほうほう。左様か」

薄ら笑いを浮かべて、嬉しそうに男は筆を走らせる。

「きもちわるいよ」

「くつくつく。何とでも言うがいい。それと、最近記憶が飛ぶようなことはなかったかの？」

「きおく？……あったよ。私、焼かれてたの、忘れてた」

「ふむ……」

ジャックは少し気落ちしたような顔になったが、すぐに元の嬉しそうな表情に戻った。

「お主は、自分の名前の意味を知っておるか？」

「むきの、王？」

「そうじゃ。心のない、名前もない、あるのは製造名称と、己の『生』のみ。『無機の王』とはそういう意味じゃ」

「……でも、私、心あるよ」

「そうだ。お主には心がある。永遠に生きるためだけに創られたお主に、心を与えた何者かがいるのじゃよ。しかし、それはまだ酷く不安定のようなじゃ。お主の記憶がたまに飛ぶのは、それが原因のようじゃの」

「……よく、わからない。むずかしい。」

眉間に皺を寄せる私を見て、ジャックは笑った。

「くく。難しい顔つきをしておるの。まあお主はわからんでもよい。わかっておくべき事柄は一つ。わしは今から、お主の不安定な心を、時間をかけて定着させるということじゃ」

「わかった」

とりあえず頷いておいた。わからないけど。

「そうかそうか」

ゴツゴツとした手で、くしゃくしゃと頭を撫でられる。

それはとても大きくて、温かくて、胸の辺りに何かがじんわり広がる。

これが、私とジャックの出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2915y/>

緋弾のアリアーお人よしの梟雄一

2011年12月29日22時51分発行